

○江戸芝居太夫本

一さかひ町

中村勘三郎

さるわかともいふ

一ふきや町

市村羽左衛門

初め竹之丞といふ

一こびき町

森田勘彌

中古川原崎權之介といひ今又元の勘彌といふ

已前は、山村長太夫といふ一座ありて、四座なりしに、寶永年中、此山村座故あつて滅亡す。今は三座計也。其外諸所寺社内に、小芝居株のまたあれども、是は格段別にて評あるゆゑ、小芝居へ出たる子供は、大芝居の役者交りせず、勿論舞臺へ出さず、其子細一口に論じがたし。京大阪は名代、座本、芝居主等、皆持主別也。江戸は元祖より以來、太夫本と稱し、名代、座本、芝居ともに、一人の持主にて、今に相續す。又操り座等の事は、近代世事談といへる書に出れば、爰にまゐるさず。尤右三座元祖よりの系圖は、役者大全にくはし。

○大坂芝居名代并矢倉株

寛永年中、京より段介といふもの下り、下難波領のけいせいにて、女をどりさせけり。大阪にては、これ則お國かぶきといへり。其後女藝を禁じ給ひ、鹽屋九郎右衛門、同九左衛門、大和屋甚兵衛、河内屋與八郎、松本名左衛門、大阪太左衛門、京都にて、大阪表へ下り、興行仕たき願ひによつて、御赦免あり。右のものども、多くは濱側小芝居にて初めたり。夫より次第に人数をくはへ、若衆子ども五十人程入かへてをどらせたり。其比は太夫本、芝居名代も極りなく、勝手に是をなす。まかるに慶安五年にいたりて、右の名代とも改りける。承應元辰年六月朔日、立慶町鹽屋九郎右衛門芝居にて口論あり、是よりして芝居中へ御制法の御書付出たり。今しばの内にある、簡條書これ也。同年七月に、惣て歌舞伎芝居御停止に成、承應二巳年、右歌舞伎太夫本、狂言づくしの御願申上候て、御赦免あり。其人々鹽屋九郎右衛門、同九左衛門、大和屋甚兵衛、右三人也。夫より松本名左衛門。少し程ありて御免あり。河内屋與八郎は、借銀の出入につき出申さず。はるか後、御尋ねものを捕へ、差上候御褒美として、狂言盡名代御免ある。大阪太左衛門は、其比江戸にあり、年あつてのぼり御願ひ申、御赦免を蒙りし也。又操りの初りけるは、京より左内宮内といふ淨るり太夫、折々大阪へくだり、定日五日宛興行せり。勝手よき時は、日延をして是をなす。其後淨瑠璃太夫段々多く成、操り芝居繁昌しける。又慶長の比より、せつみやう語興七郎、七太夫といふものあつて、後は名代御赦免にて興行す。あやつり名代のはじまりけるは、かぶき狂言づくしより十年ほど後に、御赦免あるもの也。すべて惣名代をこゝにまゐるす。

一狂言盡名代

鹽屋九郎右衛門

室町家御扶持人、鹽屋九郎次三代目。

一同

鹽屋九郎右衛門伴、此名代は已前濱芝居なりし也。

一同

一同

此名代、已前は濱芝居也。與八郎名代勘三郎といふもの譲り受け、夫より江戸へ下り、生死しれず、是より此名代なし。

一同

室町家御扶持人、松本名左衛門伴久左衛門一子。

一同

室町家御扶持人、大阪太左衛門四代目。

鹽屋九左衛門

大和屋甚兵衛

河内屋與八郎

松本名左衛門

大阪太左衛門

○大阪淨瑠璃操名代

一操名代

一同

一同

一同

前にくはしくさるす

一同

一同

一せしむる

一同

大阪次郎兵衛

虎屋長右衛門

今源夫太

宇兵衛

出羽

後信濃
今又出羽

大和

今筑後

上野

今越前

與七郎

七太夫

一 舞太夫

又太夫

一同

市太夫

一同

兵太夫

一同

金太夫

○大坂芝居主

又芝居主は、むかしより段々かはりしゆ多、事長く無益なれば、くはしく記さず。よつて元祿年中迄の事を愛にさるす。

一 立慶町

帶屋 五郎兵衛

以前まほ屋九郎右衛門芝居也。

一同町

錢屋市左衛門

以前平野次郎兵衛借地にて芝居建しが、後に市左衛門地をもとめて、これを引也。

一同町

伊藤 信濃

以前九郎右衛門町にて、まほ屋九郎右衛門名代を譲り受、其後立慶町引移り芝居せり。

一同町

福永 太左衛門

後女名前にて市と云

一同町

竹田 近江

以前福永市芝居の名代譲り請しが、其比芝居無之ゆゑ、潰去はるにて、興行の願ひによつて、御免あり。此已後芝居地を求め候は、大芝居取たて仕候やうにと、仰付られけるとなん。

歌舞妓事始卷之一終

歌舞妓事始卷之二

○芝居

芝居といふ事は、原野に屯する所といふ也。又屋根あるを芝家といひ、床を張を假家といふ。江戸にては、只まばやといへり。元來今いふ芝居は、出雲の於國、織田信長公の免許を請、北野にありし人升を拜領し、始て芝居といふ也とぞ。又甲陽軍鑑に曰、仕場居は勝軍ならずは踏とめられぬ物なりと、高坂彌正のべられたり。何れも芝に居るの意也。

○矢倉

芝居木戸口關上に、床を儲け、名代座本の紋あるしたる幕を張る、城樓の體に等し、則櫓といふ。是はこれ京師に入伏見口、三條口、大原口、鞍馬口、長坂口、丹波口、鳥羽口、此七口の矢倉を象るもの也。矢倉の事仔細めれば、こゝに記さず。

○物真似札

芝居木戸口の上に、象戯の駒の如く成札に、物真似と書り。是七ヶの矢倉御免許の札にして、外の芝居に上る事能はず、又木戸口の内に高く簡條書あり、若狹藉の者あるときは、是を計の義也。

○梵天

矢倉の左右に塵を立る、これ又陣中にして、さす塵引さひなり。陣中にては此櫓にのぼる面々、人々を招きよせ、又人升よりはかり出すの時用ふ、因てこれを招きといへり。歌舞妓の元祖於國、初て北野にて芝居興行のときは、白幣を矢倉の四隅に立たり。天正年中より、寛永年中まで幣にてありけるに、歌舞妓の名目を、物真似狂言盡しと成しより、兩部和光同塵の心にて、明暦年中にいたり、塵に轉じたり。是を今梵天といふ。心は惣て歌舞妓物まねの本義とするは、勸善懲惡の道也。されば寸善尺塵をのぞくこゝろにて、梵天王を祭る旨趣なり。

○矢倉鑑

矢倉に並べたる五本の鑑は、陣中の五奉行の持やりなり。則人升は五奉行の面々支配する故、矢倉にならべて是を置、其例を以の意趣なり。或説に、いにしへ役者の持やりなりし故、矢倉にならべ、藝終れば、矢倉の内に入れ置し也。いづれも浪人ものにてありし故といへり。まかれども妖妄の説信用しがたし。又雨ふる時、鑑幕ともに出づるは、元來ぬらむる爲なれども、むかしは雨天の節相休といふまゝなり。此例を以てのゆゑ也。

○破風造

舞臺の正面破風造は、上なき御方へ召れ、終日藝づくしを御覽に入れしとき給はりたる也。破風の幣に、太神宮を勸請し奉る、右藝盡御覽のとき、役者ども、歸宅の行粧花籠にすべしとの仰によりて、立役、女形いづれも麻上下に大小を帯し、尤立役は若黨二人、詰役より仕たて、挾箱もたせけり。女がたは小童二人召つれ、日傘をさせたりしより例と成。近き比までも樂屋入に大小を常に帯し、女形は日傘をさせし也。其頃柴崎林左衛門、藤川武左衛門は、故あるかたより大小を給はり、今に相傳ふ。又其比させたる日傘も、古き役者の家には持傳へあり。

○三間間

芝居の中央に、舞臺と方三間にたつる故、名付て三間の間といふ、こゝにて藝をなす所也。元は二間に四間の間にして、四本柱を立し也。破風造御免あつてより大臣柱といふ。陣中大將の座也。四方八方へ往來の人、此所より明らかに見ゆる所也。因て鏡の間といふ。又松の間ともいふ。其次を梅の間といふ。後のいたを鏡板といふ。是に松梅を講たり。今能の舞臺のかみ板といふ所也。則松梅をゑがく也。扱右の四本柱に、多門、地國、増長、廣目の四天王をすゑ奉る也。

○棧舖

棧敷六拾六軒は、六十六國の神々を勧請し、各々神の名あり。去によつて、六十六本の柱に、石居をする也。其神體の柱の間に、助力として柱を入建る也。棧はかけはしといふこゝろなり。又舞臺の後にかけるを、鏡としよといふ。又舞臺の幕の内兩方にかけるを、紅葉といふ。惣て紅葉櫻といふは、陣中にて棧に付たる名也。舞臺の正面にかけるを、かけ出しといふ。今芝居のむかふを、見物場の少し高きと、高場といふ。又は何軒目の出といひ。夫より前を何軒目の孫産と名付、或は出の出ともいふ。疊場は疊を敷ゆる勿論の名也。眞中に至るをば、人溜り、切落し、中の間と名付る也。小佐川十右衛門京へのほり、ことなうはんじやうし、棧敷を懸出したり。其とよむとよむの下疊場を、下さじきとしたり。又中比江戸の芝居には、三階とよむあり。又芝居茶屋へさじきより道ありしが、故あつて相やみし也。

○橋懸

横は、壹間餘、長さ極まりありといへども、今は略式にて定なし。惣じてかゝりといふは、造るといふに同じ。芝居にては、武者走と云、陣中にて丹形へ通ひ路也。又舞臺の側にくゞる口あり、是をおくびやう口といふ。世人臆病口と思へるは非也。着物のおくび形に附たる故、おくび様口也。是一日の計策を廻らし、萬事舞臺へ、此

口より出て介しやくする所也。花道は藝者へ通す花を持行路の名也。昔は幅せばくして、兩方に竹にて、高欄の機に埒をゆひしなり。今はいつの比よりか、幅三尺餘にして、板を張、もつはら藝者の出入場所となれり。

○鼠戸

繪の下板壁に、ちひさき目二ヶ所あり、是を鼠戸といふ。芝居へ這入るに、背肩を屈曲てこゆるは、さながらに鼠の穴に入るがごとし、因て名とせり。元此口は、相言葉の口といふ、則陣中の一義なり。人丹へ出入に、相とばかりし也。

○樂屋

舞臺の後に一室を構へる、是舞臺の樂屋に準ずる名なり。此所にて、各裝束とし、大成鏡をたて、かたちをみる、衣裳をせといふもの、此所にていしやうを付る也。

○幕

幕の事は、延喜式にくはしく出たり。芝居に用ふる所も同じまぐ也。一日の狂言の外題番組を述るもの、晝は日

の物見より出て、月の物見へ入る。夜は月の物見より出て、日の物見へ入る。則幕に地水火風空のかたちを顯はして、開く時には夫々に森羅萬象をなす。尤地水火は、鳴物の類にてかたちをなす。風空は其つとびる所の役くくにわかる。風林三大虚一木動教之月入三重山一扇揚喚之。此心に叶へるにや。又幕引たる時は打といひ、明たるをはるといふ。是我陣に幕打たるといふ意也。敵がたをはるといふ。今は誤り幕を引明るといへり。橋がよりにあるを諸幕といふ。倭語に一双を諸といふの謂也。又揚幕ともいふ也。又黒くは、舞臺に道具だてをするに、海山のけしきるとき、後の様を隠さん爲、佐渡島氏より初めたり。

○矢倉太鼓

矢倉にて鳴すは陣太鼓也。見物を入る時、早めて打は古例也。又人よせの内、樂屋にて、鐘太鼓を雜へ拍子をとる。是を倉來留といふ。大坂にては、人よせにまころといふものを木戸口にてうつ也。藝師の一部を一座といひ、或は一場といひ、または一幕とも、一切ともいふ。限るを段切うつといひ、又は別をうつといふ也。其文には、仁義正しき武士の、弓矢の家社久しけれ。此文をうつ也。惣終に見物出るとき、はて太鼓うつ、是を打出しといふ。昔は惣はてに、半鐘を鳴せし也、是古例なり。又替狂言の初日の前日、町々を太鼓打廻るは、近年の事也。

○役者惣名目

女形を太夫といふは、歌舞伎に因ての名也。すべて其長に至るものは、太夫と稱す。又若女形とかく事は、幾年つもるといへども若と書、又やつし形は、是色事仕也。仕内をらうしを本として、作す所のわざをやつす也。立役は、狂言の立藝をする故の名なり。實事といふは、實に作るが情なるゆゑの名也。實惡といへると、染川十郎兵衛といふ人、其身實事仕にて、初て山椒太夫の三郎の役をしけるより、實惡といふ。敵役は倭人役をいふ。道戯がた、むかしは立役のおも役なり。人品よく姿麗々として、心に足らぬ所作するを道戯といひし也。全體歌舞伎は、神代神樂の變風なれば、感心の事のみ多ければ、興あらしめん爲此役ありて、甚大役上手の仕業也。たとへば能の間に狂言あるがごとし。今の道外といふは、丁稚三太、かごかまらち兵衛、あるひは庄屋の松兵衛などいふごとき、の端役になりて、意趣たがへり。むかしの道戯は、心の内になし。今の道外は、外面一通也。坂田藤十郎曰、道戯といふものに、多く利發なる人の能物に渡りて、をかしき事を求めて爲やうなるものあり。是は道戯にてはなし。或人のいはく、狂歌などの教に、唯をかしく作るはよしとせず。其歌鈍にきこゆるを狂歌といへり。道戯もしかり、をかしきといふは興ある事にして、會て鈍なるにてはなしとぞ。扱親仁がたの名仔細なし。花車形は繼母役也。全體は茶屋揚屋のあるとといふ名也。中通りといふは、かはり仕ともいへり。小詰は惣じて石といへり。其故は、むかし役に類する人なうして、諸方の役者をつむ、是伏見三十石船の乗合に似たり、此意を以て石といへり。成外といふ事は、未太夫成の外といふ心にて號といへり。又新部子といふ名は、幼少にて、藝の至らざるをいふ。扱又太夫本といふ事は、一座の司をいふ。又座本ともいふ。名代といふは、七ヶの矢倉年寄は、七ヶやぐらの株なり。又頭取は、一座を預り支配するをいふ。役者弟子といふは、一人に極る、我子も役者となすは一人に究る也。二人はならず。治郎は妖治女態也。婦人のごとく粧ひをなすといふ。

又一種野郎の號は、元薩摩國より出し也。此國の風專武勇をばげむにより、男子たるもの十四五歳にいたるときは、悉く前髪をそりて野郎といふ。又關東にても、年わかき者髪をつまをやらうといへり。役者の額髪を剃しを以て、野郎といへり。今世人髪剃さげたるをのみ野郎と思へり。又箱のふた印籠のごとくするを、やらうふたといふは、藥籠蓋也。是は印籠藥籠といひて、藥を入る器也。愛に記すは無益なれど、訓同じきに因て申す。扱又少年の人を、若衆と稱し、又は何若、某の弱といひ、老少を老若といふ、若と弱と音相通し、弱の字を以て、若の字に代ときは、其儀相通すべし。又此女形額髪をそる事は、いにしへ役者は、妻子一所に舞踊ひしに、人心を狂はするをもつて、女藝を禁じて、近世、小性を以て女形をなすしむ、是又女にまがふを以て、振袖を禁じて給ひしが、まふと見えあしき事を御願ひ申ければ、其役者の手のひらだけに額髪を剃、振袖と替給ふ也。御改とて、毎年一度づゝまばら舞臺にて御吟味ある也。其上先年仰渡されの簡條を彌つしむ、相守申へくむね、急度仰わたるゝ古格也。

○年行事起

役者に年行事あり。其起を轉るに、大阪中の芝居にして、鶴井某、紛はしき妓者をあつめて狂言をし、衣裳など美を盡す、役者仲間より是を制し、初て大阪に年行事出来たり。京都にても、寛保二戌年二月十一日、年行事御免蒙り、神山四郎太郎、三保木儀左衛門、山下伊右衛門相つとめ、夫より年々役者仲間より是をもつ。又月行事あり。一軒の芝居に兩人づゝ、石離子よりこれをもつ。此掟初りしより、役者たるもの、穢はしき異族と交る事

猶以叶はず、すべて行儀正しきを本とし、第一色欲をつゝしむ、第二には樂屋にて酒宴を禁ず、第三に喧嘩、口論、勝負事、第四に、舞臺の姿にて機敷廻りへ行付合の事、第五に舞臺へ任する身なれば、違あるをいましめ、脇差をすとも其長にいたるものか、太夫本ならでは、常にさす事なし。若此掟違背ある時は、役者仲間を省く。されば一年に一度づゝ御役人の前にて、印形をし、互に此掟を守り、是によつて古格をつゝしむ、通知音の人招くとも、其席へのぞまざる役者あれば、其人横柄なるやうにおもふは御事也。

○日蓮宗成儀

芝居は陽氣を以て動くに、人猶あつまり陽氣彌以さかんになり、夜陰に入りて、自然人の念殘る斗ならず、過し人畜の眞似するによりて、妄念鬼魅の形あり。操り人形の樂屋も、夜陰には、何ともなら其氣味ありと也。非情すら此のごとし、況や有情の上手たる人においてをや。此故役者たるもの法華經の威力にて、過去現在の妄執をばらるんがため、多くは經宗をたふとふ也。

○外題看板

昔は看板壹枚板なり。今京は縁を拵へ、大形にする事近年の事也。むかしは勿論給かく事なし。表さびしければ、一枚紙に繪がき、上にはりし也。是今の神山小四郎初たり。それよりして、いつとなく看板に繪がく事にな

れり。今役者の名を並てかける所は、昔ひやうづけというて、其狂言のやく割を書て懸り。又惣稽古といふ日にいたつて、仕組御目にかげずと張札するは、其日舞臺にて、道具を飾りてけいこ、萬事正しからざるを改むるゆゑ、人に見せぬ也。扱又辻々へ出す札は、元祖名古屋山左衛門よりおこる也。山左衛門が出したりし、其文にい

從五月八日於北野名古屋山左衛門在所糸槍女之所
作成之一覽念望之人須來見

如此板に書て辻々に出せし也。むかしは急度したる格式也。是より今にいたつても、辻看板出す、但し繪を書は近年の事也。

○六月納涼

涼みの間、四條川原水茶屋を、矢倉年寄より支配する事は、むかし涼の間芝居なし。よつて水茶屋迷惑におよぶ、此事を思ひて、名代、座本、矢倉年寄、合體のうへにて、涼の間、水茶屋をねがひ遣す、是によつて今おまた茶店を出す事になれり。かるがゆゑに今以芝居の表に涼の間、右の面々出て川原の支配する也。元より四條川原は、萬事矢倉年寄これを取はからふ也。

○舞臺年中行事

先顔見世といふは、霜月朔日を初日として始しなり。霜月は一陽來復の月也。よつて天下泰平國土安穩と、一年をことぶく護也。唐にては此月を以て、正月とせし事あり。陽をたふとふの儀也。此理を以て、十一月顔見世には、正月のごとく備へ物などして、其身をもいはふ也。先前日に太鼓三から出して知らしむ。扱顔見世初日未明にして、式三番をことぶき、太夫子どもこれを勤るは、天照太神の故事を引て、これをなす。夫より役者座付終て、石より八人出て踊をなす、是八少女の餘風にして、天冠舞の略式也。大坂にては、三社の託宣を唱へ、白張烏帽子を着たる者三人出て、幣帛を持舞ふ也。又正月に至て、大黒舞といふものを、兩人出て舞ふ、本是は美濃國より出る、民家にて春のことぶきには是をうたふ。又二の替りには、脇狂言に壬生の狂言、花盗人といふものをなし。三の替には、かつこほらうくといふものを拍子に合せて是を舞ふ。七月の狂言には、井戸はりといふものをする。皆石より出て例年はなす。同じく一部の終りにをどりなす。委は後にまゐるす。

江戸元日の式、朝四ツ半より初り、晝八ツ時に打いだす也。尤此日札錢なし。諸人朝五ツ時より群集す。

翁 勘三郎 三千歳 誰九郎
翁 羽左衛門 三千歳 龜藏

翁 勘 彌

千 歳
三 番 三
誰

右三番叟の次に、惣色子、梅が枝大をどりといふ物をなす。次に惣役者麻上下にて、舞臺へ居ならび、其座の立物、新春のことぶきを述る。次に新子供より、段々小舞、或は能狂言、又は所作半などする。次に立役、女形面々、得手物一人づつ、仕退にす。次に立物又罷出、春の狂言名代、役人替名を讀也。明二日より初日仕るよしをいふ時、座本立のかり、扇をひらき、千秋樂を颯ひいだす也。扱明二日より大當り大入續ても、六月中旬より相休み、七月十五日より又々初日也。大かた盆替りとして、新狂言いだす事也。扱また京大坂の芝居は、序開より悪人退治まで、初日より不殘して見せねば、見物合點せず、江戸は左にあらす、第一番目ばかりにて、初日、二日、三日、或は十日、廿日入があつて持る限りは、一番目ばかりにて打出す也。扱少し入も薄く成し時、はたたくと跡を出す也。たとへば江戸の操座にて、五段目を語るはまれなり。刈萱桑門の五段目などは各別、皆四段目切にて打出す事、江戸の風氣也。扱顔見世十月晦日の夜は、さかひ町、ふさや町、木びき町、裏店表店ともに、芝居がりの茶屋、野郎屋、役者の宅はいふに及ばず、作り花、おもひくの燈灯行燈等出す、元より芝居、木戸口、樂屋口、切落の上に、惣役者紋盡のてうとん、萬燈のごとし。扱明七時半時にはじめ、式三番元日のごとし。常の日は小詰ども順番に勤る也。但し中村座の三番叟齊次第、市村座はじまり、右式三番の次に、色子共大をどり、次に前狂言、夫より本狂言にかゝる也。但し中村座の序開は、明六ツ時也。扱其座の新下り役者、又は外座より初て来る役者、入かはり等、其役々の出初に、狂言の内、諸見物へ目見口上をいひ、御いひ奉頼と申事也。右のごとく壹人く口上長々しく、狂言の邪魔なれど、むかしより江戸の芝居に座付といふ事會てなし。よつて藝の内に目

見する也。惣じて顔見世のけしき花やかな事筆に及びがたし。扱顔見世に女形揃ひの長上下を囃子へ出す、歌舞の元なれば所作を勤る上下也。立役は揃ひの衣裳を石へ渡す。舞臺の役に應じて、其人に順ひ付、仍て一列にわたしおく。扱又一部の内、毎事樂屋にして、三味線をならす、是をめりやすといふ。甲陽軍鑑にも出たる、めりやすといふ事を下略して是を名付る。又亡魂などいふるとき、笛を吹事あり、是をねとりといふ。本樂にねとりあり、則是也。太鼓をどろく打事は物すこく見せる一義也。天皇立といふ事は、御殿がりの狂言に、笛鼓、太鼓にて、是を囃して幕明る、又は神樂一聲打、其やく人の出端により、淨瑠璃節に色々あり、都て樂屋の通用ことは様々あり。大勢相手にして、太刀打するをたてといひ、少しき事は立廻りといひ、くるりと返るを中がへり、或は手ばひ、さるがへり、又は杉たち、胸がへり、五段返りに、きば、あこつさ、その首おとし、引廻し、つめよせ行は、ひさ詰といふ。又幕明ににきはしく、大勢出るをまたしといひ、舞臺に揃ふをならびといひ、介しやく人を座付といひ、又後見ともいふ。扱又太刀うちする時、板間をばはたく、拍子木にてならずと、かけをうつといふ。其役人に付添ひる、介しやく人これをなす。扱又藝のあたりとるを、はねたといひ、又は、おちとるといひ、或は、はめをはづしたといふ。其外まじと入へども、こゝに略す。

○衣裳體紀原

元女形前帶する事、むかしは會てなし、是近代の事なり。此前おびの起は、明曆の比、東山邊の茶店のもの、いそがしとの餘り、後へ回す隙をへなく、其まゝに居たりしに、其風傳へ移り、今世間一統となりし也。甚略義に

して非禮の様也。瀬川菊之丞曰、前帯仕たる時は、年のふける物ぞかし。女は色を元とすれば、後結びを本義とす。女の情と思ふものは、心得有べき事也。むかしは女形の帯の幅三寸五分四寸ほど成しが、萩野澤之丞鳴神の狂言に、帯の見えおしき故、幅廣の帯と仕たりしより、今に専これを用ふ。吉彌むすびといふ事は、延寶の比、上村吉彌といへりし女形、結をめしより今に用ふ。又男のごとく、四角にするを、かるたむすびといふ。平十郎結びといふは、三代目村山平十郎といへる立役、立に結び出たるより初る。扱又染いるに、小太夫鹿子といふものあり。貞享より元禄にいたりて、江戸若女形、伊藤小太夫といふ女かた、是を初め、今に用ふ。又宇源次染といふは、小野川宇源次といへりし若衆方好み初し也。市松染は、佐野川市松が思ひつき、石畳の模様。小六染は、今の嵐小六、左さまの染模様をきて出たるより初る。小六紐といへる物、すげ笠のひもを糸組打を付たり。今専町方にて是を用ふ。龜藏小紋は、湯水の模様にて、江戸市村座の若太夫、市村龜藏より初る。其外色々ありといへども、思ひ付の名も知れず、あらまじこゝに記し侍る。惣て衣裳はてなるを着る事、染川十郎兵衛より也。其比の衣裳等は、紅の無地に白糸にて、大なるかぶらをたゞ二つ縫せたり。又は袖の火うちをば、鱗形に縫せたり。今狂言にて、詰きはに袴をきるといふ事は、此人初ける。又舞臺にて懸る帽子種々あり。むかし女形藝をなす時は、いたゞきを手拭にて見えよく包し也。女形帽子の由来は、役者大全に委ければ、爰に略す。今用るやうらうらうしは、元祖芳澤めやめ始たり。又小さんばうしというて、町家にて用るは、藤井古今といへる女形より始る。黒船頭巾といへるのは、立役姉川新四郎はじめたり。尻からげて狂言すると、ぶしやう織を初しは、立役小佐川十右衛門より起りし也。

○男女髪品

髪かみの風は、時代にて替る也。辰松風は、巻たてながく高くあげてのふ。こまなひなでといへるは、立役桐野谷權十郎はじめたり。さしづとは、若女形瀬川菊之丞始、三つとは、中村八重八、調子丸といふ鬘は、伽藍鑑の狂言のとき、嵐三五郎が風也。勝山といふは、勝山仙州始たり。はらけがみといへるのは、樂屋入急ぐより思ひよつたる鬘なりしが、いつとなく今専これを用ふ。かづらに紐を付たるは、水木辰之介始めたり。かづらに鬘を出し、うつくしくなしたるは、萩野八重桐はじめたり。扱又付鬘といへるは、姉川氏よりおこりし也。むかしより用る髪かみの風左のごとし。

男女髪かみのゆひやうをまへへりといへども、古風なるはこゝに圖せず。當世專用のみをあらはす。此外女がたの髪丸からがひ、ちやせん、はらけがみ、かごまきだ、やうこ、ねぢむぎ、ぬき元ひ、立ひやうと、へしきまひやうと、ふらむきやうと、かみむきやうと、これら古風なり、今もつはらちとせす。

歌舞伎事始卷之二終

歌舞伎事始卷之三

目錄

兩義舞
榕接舞
夏神樂舞

七月芝居風流踊

鳥舞
天冠舞
俱舍論舞
小舞唱哥

役者藝品定本元

歌舞妓事始卷之三

○兩儀舞 天地和合舞ともいふ

歌舞妓舞也。名古屋氏、神代の故事を妓樂にやはらげて、これをまふ。其舞の秘事を説て、こゝに略す。兩儀とは、大極天地わかれて陰陽と成を兩儀といふ。輕く清るは登つて天と成、おもく濁は下つて地と成、天は九重、九は數の極也。天は動くを司どつて、其體は渾圓也。天に二の神あり、寒暑の精也。此精を日天子といふ。天に麗て晝夜をなす。地に二の神有。火水の精也。是月天子といふ。天に係て其盈虚をなして有無有。五星は晨昏に伏見をなし、列宿は二十八舎にして運旋す。年を經に隨ひて、奇なる星もめらはる、其かたち七星に異なり、列宿七星の行は、環の端なきがごとし。天地開、陰陽二つらだめられざる時を、大極一易といふ。法性常住の形也。此形なき所より一念おこりたるを神道といふ。諸の世界は、こゝろのごとし。そのこゝろなる所は清淨也。其清淨を妓樂にうつして舞ふの義也。たとへば一念のおこる處、無心無念にして神道に叶へり。二柱の御神、大和國に住給ひて、女男戯れ遊び給ふといへり。いざなみの尊、胎内に太神宮を持給ふを、天の岩戸に籠るといふ。岩戸は胎内に十月子を孕むとしていふ也。佛によせては、石にて入薬の蓮華をまきり、其上に白き龍を石にて作り、胎藏界を表す。よつて舞者、頭に白龍をいたして舞ふ。又石にて五輪を造り、九輪の上に、石にて白蛇を造り、常住の體を表はすといふ。よつて頭に蛇の形をいたして是を舞ふ。歌に、

千はや振我心よりなすむむをいづれの神かよそに見るべき



西儀舞圖

ちはやふるの意味は、胎内上下に蓮花あり、男の姪は、の蓮花にとまりて、十月に生れ落るをいふ也。又出雲の神、十月日は、母の胎内を出る故に、雲の出るうちは神なし。我心そのまゝ神也。此秘事を以て舞也。歌に、

ちはやふる神のやしろは我身にて出入いきは外宮内宮

いせにしていせとはいかゞ尋ねべきいせのいせにていせのいせなり

是男女の體にして、和合のいせ也。胎内におち入一滴白赤の姪は、男子女子の姪也。佛によせたる歌に、

ばさらだとはんぢの水の清きをば結びてかたにあびらうんけん

うなばしやほこのしたよりなかりせば此まよひある身とは生れじ

さしおろす天つみほこの露もこち國とならずはこひはあらめや

生れこし天のさかほこしたよりて人の命は露となりけり

そのかみのうかりしことの忘られてあなうれしさは身にもあまれり

是白露也。鉢は男、海は女、東は發心門、南は修行門、西は菩提門、北は涅槃門、此四門と顯はれて男女と別れ、うごく事は、せきさいの尾をうごかすとき、兩姪和合して、天地開闢するなり。我佛體にして、月日は眼、風は息、海山は我身にして、頭は妙高山、兩の乳房は尼浪達羅山、此山に二ツの龍あり、龍の乳房腰をば、持軸山、腰より下にながる所は、擔木山、表は善見山、兩の手は馬耳山、鼻をば象鼻山、七の山悉く我にありて、頭に七ツの穴あり、七曜の星の姿也。下に二ツの穴あり、合せて九ツの穴、九曜の星也、身に三百六十の骨あり、是年の三百六十日を表する也。金剛界は五百七十の脈也。胎藏界は十二穴、大骨小骨、三百六十の筋骨を生ずる也、男子の姪は白を生じ、女子の姪は赤を生じ。此兩姪寒熱にて、火也、水也。夜は寒、晝は熱也。寒熱の二つ、萬法を生ず。有

情は五大の外に識、大備るゆゑに、善悪等の分別ある也。非情は識人なきゆゑに、物の分別なし。此心を以て姿を表する也。大秘事の舞也。器物は大鼓と、鼓を二挺と笛を用ひ、尤一七日の別火海鹽を以て身を清め、諸の汚穢を去て洗髪しまふ也。

○鳥舞

二神いまだ出現なき前は、とつと事となさず、或ときはいだき、あるときは手枕をなすりて、和合はあれども動事なし。二神より動初給ふ秘事、鳥井は姪交のはじめ、たとへば天の浮はしの心也。熊野山九本の鳥井は、老陽の敷にして。出入とをつかさどるのかたち也。其ほか佛によせたる二河白道秘事の舞也。



○榕接舞

妹背かたらひの舞とも云



なふまぐさつたるまふんだりきやそたらん○此秘文を以舞也。此舞を願するときは、女夫の中つじつまのいせかねたる裏も表にしたがうて叶はぬ戀も心のまゝに成也。

○天冠舞

則神道入乙女の秘事にして、此舞を願する時は、一切の諸神微妙の伎樂の徳によりて感應し給ふ也。中古佛によせても行ふ。則秘文に曰、



まんだらふれりとみふれり。ありやのしやうどのとよなれば、まらても〜つとせせす。



○夏神樂舞

國女舞ける中に、夏神樂舞といふものあり。元は五節の舞也。四本柱に榊の枝をさし、其身神樂乙女の姿にて、笹の枝にぬさをかけ、髪洗して舞也。此舞は無實の難を負たる時、其無名をいひ清めん爲とての舞の一義也。近頃笹に短冊を付、狂女の所作事あり、此舞より出たるもの歟。

○俱舍論舞 并 歌文

抑俱舍論といふは、佛によせたる三十三天也。其源は目也。此目といふは眼の事ならず、我一心の秀たる處をさしていふ。總じて此歌は、一休禪師、夢想國師達の道歌を以て、連続したる文句なり。則僧衣のすがたを略して舞ふなり。江戸にて中古まで念佛をどりといふものありしも、此まひより出たる也。又かくや道心といふ、所作まひあり。是も又此舞より出たるなり。



釋迦殿が目なしどの、なり得て、天地萬法を勘見る、悉く目なしどの也と説給ふ。草木だにも佛になれば、ましていはんや人間の、なにか佛にならざらん。おしやか殿も彌陀どのも、皆佛じやといふたもだうりうそのつぎよ。目なしのをとを人々に、しらさん爲とあれこれに、物によそへてしやべられた。ほんぶの心しらざれば、義理計にて一とも、目なし殿にいひあてられ、大きなうそと赤らそよ、うそをつかずは佛にやせまい、そりやまたなせに、方便のうそは皆まこと、うたへやのめや一寸さきは闇の夜、うたふもまふも法のこと、されば風のこゑ、水の面、みな目なしをあらはせば、諷ふもまふも法のこと、來世も過去もあらはこそ、三世不可得人心。

おこらぬ所が極樂にて、おこりし心を現世也。さうなりとないが過去といふ、楷がなうても天へのほろ、愚純な
經はたのみやせぬ。よしもあしりもとがむれば、みな悪にこそ成ぬべき。いたづらものが世に出て、多くの人
を迷はする、心とはいかなるものかいふやらん。さうくつと一筆に、書たは何ぞ松風のおと、二つなきも
の一もなし。墨繪の風のはつてもく涼しやな。からだがあつかる不動どの、悪魔さうぶくおらておらさか
ならざよと思ふなよ。氣がす心があくまなれ。かた見の五倫茶臼にせら。だまされなりんの三世よ。さるとる
は何のさとりなり。さとりぬさきのさとりなり。

○七月芝居風流踊

七月は、陰陽合體の月にて、陰氣地のうへのほり、陰陽不順にして、變易の月なれば、大風ふき、五穀をここ
なふ。こをもつてやすくおだやかに陰氣にうつり、燈籠ともし踊をなし、陽氣をうしなはざるやうにして、五
穀成就、人民安とんをいのる也。元來七月芝居のをどりは、京よりはじめたり。今に相續す。江戸の芝居にはを
どりなし。大坂は京にならびてをどりあり。よつて大坂にても、都大踊といひ傳へたり。番附にも今に其通を書
いだす也。芝居のをどりは京が最初なり。

○小舞唱歌 十六番

小舞十六番は、表八番裏八番也。一番とは一つがひとといふ文字なり。よつて表裏合て八番也。八の字はいの字
也。いは四十八字の始也。されば表裏十六ばんを三通りに教かたあり、合て四十八と成。伊勢外宮内宮の間四十
八町あるを表す也。深き口傳あり。本此舞は、八乙女の舞より出たるものなり。秘事なれば具に記さず。唱歌を
左にあらはすのみ。

室町

文がやりたやむろ町すぢへ、とりやちがへて他の人にやるな、花のふみさまの手にわたせ。

鹿子

おなつかしやといはんとすれど、鹿子かたびらで御目しげれば、目もとならではあらはれぬ。

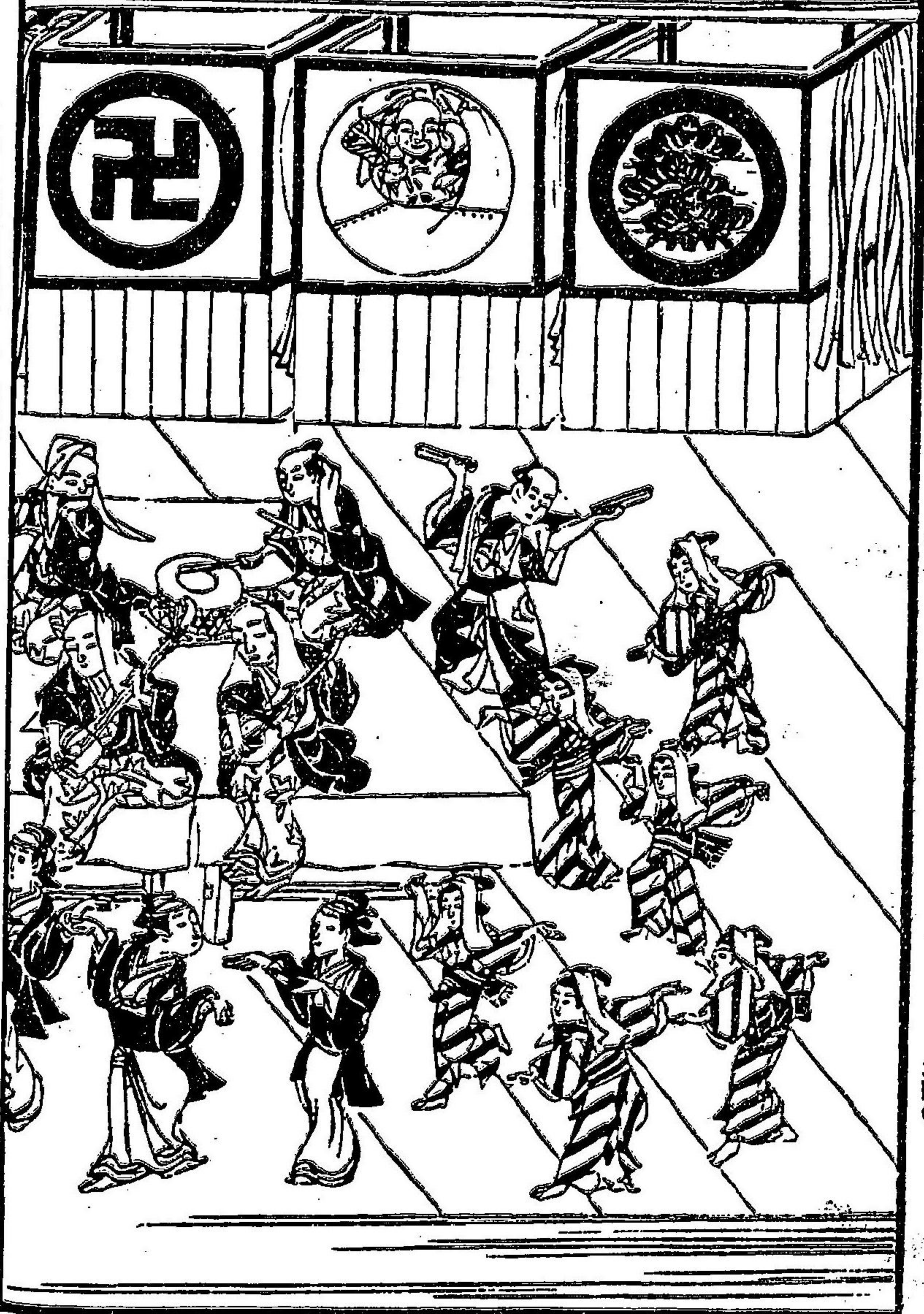
木下

花はおりたし木ずるは高しく、はなれがたなの木のもとや。

三島

ぬなかなれども駿河は名所、田子にうち出てしほどりくるを、君を三しすよふしをがまう。

都芝居の盆狂言大踊りの園



葉露

まだれ柳の葉の露もさして、ふちとなるまで御身にこそは、物はおもはじ世はなにととも。

香衣

水をひすべば月も手にやとる、花をれば香衣にうつるならひの候もの、袖をひくにひかれぬはあらうらたへやの。

高安

高須がよひの朝もどり、裾がぬれ候袖とも、いけ水によなく月はうつれども、あせうしと君のいらすがはにて。

片裙

先文をやりて見て、来たならばだいても寐やすもの、小裙めはせの片裙打布て、うらみくもぬやすもの。

千歳山

君ちとせ山よりやひかしのさるれ石、岩に生る苔の色、とにかくに君とわが中よもつれど。

辰袋

わが戀の色にうつるよ入ごとに、水はせけどもまたにゆく、けふりはいと入と空にたつ、辰のふくらに色こそで、なにとつめどらるに出て。

芭蕉葉

そなたと思へば鹿ふすのべも、かよひきなれし我なれど、ます花あればせうの葉の露、賤ふり捨め、うらめしや、思ひまらやれ戀のみち。

鹿毛駒

らとまにえて来たかげのこま、ひまふくくらしのあみよち、もくよりくつわのなりもよち、あよの鹿毛こそあせうこそ、このはとほらでめはししよにまじしよならなのわがみち。

石川

逢うてもどるよはの花が候もの、逢うてもどる夜半の花も紅葉も見もわかぬ。われは石川をにこらねども、ひとがにこりをかけうには、何としてまらせう。

津國

津のくにのながしめの中津川原をせまかねて、土まちはまたさして、鏡もは關越もこのおこの下とこ
そ千鳥めしはよき、あさかゝるゝさひつととこ、あさかゝるゝさひつととこ、あさかゝるゝさひつととこ。

上の寺

うつもよりはつらつ太鼓のねのよなよ、上の御寺か安國寺かの、とて又加賀の大聖寺のお道場かの、せまらせ
あぢすてんどうとうつたる太鼓のねのよな。そなたな見だるになよとて、山のはは〜。かおるゝさひつととこ。

織殿屋

おろどのちの孫三郎が、織手ごめたるおりぎぬ、牡丹唐草、獅子や象龍、雪折竹のまがきの桔梗に、法の鹿も
白菊、祇園殿會の竹の下、うちよく風もなつかし、あすやうてまゝぬから木戸、なぜまつ人はこぞるぞ、待人は
こまらげに候、うら門をなまらう。

○右の歌、いづれも代々の撰集の歌のことばを採り、或は心をとりにて、名ある方々の御作なりと申傳ふ。されば
此小舞古は貴人のもつはら翫び給ひし也。延寶年中、庄左衛門といへる立役あり。元武門の御歴々より出たる
人なりしに、歌舞伎役者と成、以前習ひ得たりし小舞を、幸芝居にて大に行ひ、後は小舞庄左衛門と、苗氏のや

うに人々申き。其後中絶して、正徳年中、竹島幸左衛門といへる立役、此小舞を行ひける。此竹島氏はむかし左渡亭
保年中より以來役者是をつとめず、今も傳來したるものあれども、行はれず成にき。
鳥氏よりわかれし未也

歌舞伎事始卷之三終

歌舞伎事始卷之四

役者藝品定本元

目錄

古人役者部類

古人仕内佳境

- 元祖坂田藤十郎 古精買
- 元祖澤村長十郎 石切
- 古市川海老藏 不動
- 井仕内本義シテワキの辨付氣持之差別
- 古市川海老藏 教訓
- 古小倉山百介 振付
- 前山中平九郎 鬼女
- 前姉川新四郎 氣持
- 前市川團藏 心得
- 附録丁子屋新四郎奉納

- 元祖芳澤あやめ あはら 井に淺尾十次郎あはら
- 古荒木與治兵衛 一心
- 前柳山小四郎 能藝

- 古市山介五郎 いろは談
- 古市川海老藏 立合
- 前山中平九郎 立合
- 古中村新五郎 打擲
- 古市山助五郎 差別
- 元祖市川團十郎 上京

古人所作事

早川初瀬 輕業始

佐渡島長五郎 七化井に 狐奇妙

瀬川菊之丞 石橋

歌舞伎事始卷之四

○古人役者部類

○立役 次第不同

佐渡島坊	段助	大和左衛門
門屋唐左衛門	竹島天笠左衛門	村山又八
村山又三郎	村雲八郎兵衛	桐大九郎
大澤團七	しころ藤左衛門	異風辰右衛門
金子六右衛門	山口源五左衛門	川島庄左衛門
大和權之助	岡田次左衛門	長島磯右衛門
難波常右衛門	中島小平太	西村彌平次
中川金太夫	大坂傳吉	田崎九郎三郎



彌八	吉村吉兵衛	松島新六
松島左平次	富川平八	鎌倉新藏
鎌倉長九郎	さこん左兵衛	櫻井和平
宮崎八郎左衛門	松本常右松門	松島定右衛門
中村左五右衛門	津田八兵衛	坊主百兵衛
古今九郎次郎	山本八郎次	淺田清左衛門
花崎九郎次	村山源太良	村山庄五左衛門
玉井權八	橋本新三郎	野川吉十良
笠屋宇右衛門	清水半右衛門	金澤五平次
安田吉郎次	森六三郎	木村喜右衛門
宮田半左衛門	仁右衛門	小島喜八
櫻井傳左衛門	宮木平兵衛	宮川勝右衛門
	堅田平九郎	荒井兵左衛門

中田吉右衛門	明石武兵衛	花井岡右衛門
三郎左衛門	村山四郎太郎	猿若山三郎
松本五左衛門	吉田權八	戸根川園右衛門
紫竹勘兵衛	西川金左衛門	吉村勝右衛門
小島德左衛門	榊原平右衛門	中島小平太
田代清左衛門	山村傳右衛門	宮田庄六
生島半六	坂田四郎左衛門	藤野和兵衛
西川平八	佐藤島傳八	二代目村山平右衛門
安達三郎左衛門	嵐三郎四良	瀧岡彦右衛門
龜谷九郎右衛門	勝井長右衛門	志賀吉兵衛
片桐小十郎	羽山岡右衛門	小勘太郎次
大山儀左衛門	天井又右衛門	高岡村右衛門
太村又左衛門	鎌田瀧右衛門	大森辰右衛門



川島彦左衛門	大山萬左衛門	金屋金五良
成川傳十郎	安田市郎左衛門	田島半兵衛
藤本平十郎	水島四郎兵衛	平島與三兵衛
いな <small>の</small> 屋文五郎	小島平七	淺田太郎左衛門
服部次郎左衛門	伊藤小十郎	村上竹之丞
大橋淺野右衛門	さほ山彦左衛門	川村金右衛門
片相宇右衛門	三名川彌平次	鎌倉利藏
坂田傳才	川上三郎左衛門	三尾彌三右衛門
村上又三郎	狸 <small>目</small> 十郎右衛門	嵐 <small>目</small> 三右衛門
竹島幸十郎	三代目村山平右衛門	金子吉左衛門
山田甚八	荒川重野右衛門	高尾和歌右衛門
福岡彌五四郎	澤井園右衛門	豐田剛右衛門
松川六郎左衛門	大島道右衛門	荒川十郎右衛門

桐島重右衛門	淺田善右衛門	藤田孫十郎
あぶら勘六	森田小左衛門	坂田市左衛門
眞野屋勘左衛門	宮崎傳吉	竹中藤三郎
三島佐渡八	鹽崎與左衛門	京屋彌五四郎
金子十郎左衛門	三原十太夫	宮崎義平太
山下三津右衛門	松本幸四郎	合點彌左衛門
若林四郎右衛門	大谷廣右衛門	中島勘左衛門
百人一首源三郎	八鹽幾右衛門	山中平九郎
山村哥左衛門	春山源七	松永六郎左衛門
今村七三郎	嵐勘四郎	大島嘉十郎
三升屋助十郎	柴崎龍左衛門	
嵐三十郎	金澤彦五郎	榊山勘介

坂東又十郎

山村義右衛門

山本彦五郎

中村吉兵衛

榊山小四郎

染川六郎左衛門

嵐三五郎

二代目 民谷四郎五郎

大谷廣次

姊川新四郎

澤村長十良

市川宗三郎

大谷龍左衛門

中川茂十郎

澤村音右衛門

佐川文藏

松本友十郎

桐野谷權十郎

二代目 辰岡染右衛門

森田勘彌

萩野伊三郎

三代目初外五郎事 坂東彦三郎

二代目 市川團十郎

嵐三十郎

松島茂平次

藤岡大吉

一の谷十郎兵衛

小野川宇源次

片山小左衛門

市川團藏

一野川彦四郎

三保木儀左衛門

河原崎權之助

三條勘太郎

中村新五郎

三代目嵐三右衛門事 市山介五郎

嵐新平

津打門三郎

嵐七五郎

○女形 延寶年中より以後

藤田鶴之介

村山内匠

明石玉之丞

宮田沖之介

高島沖之丞

村山淺之丞

西川哥之介

熊澤政之介

出來島主膳

竹島かもん

竹山勘太良

澤井辨之介

杉山染之介

柏木采女

淺香皆之助

松本ゆきへ

山村半太夫

藤田吉三郎

上村長太夫

瀧本かつま

松本鶴之介

出來島吉十良

高島庄太夫

松本三四良

中島かつま

村山かもん

岩井花之丞

下村金彌

萬作

澤井勘之助

若山勘太郎

出來島吉彌

山本右近	出來島主水	松本萬三良
隼之丞	出來島小太郎	玉川彦太郎
小島妻之助	出來島賴母	松川蘭之介
小野山あづま	松本笹之介	唐松かせん
岡田左馬之介	妻木虎之介	松島半彌
谷島主水	玉村艶之介	松本長藏
芳川多門	伊藤庄太夫	竹中初三良
袖崎市彌	富澤左馬之助	嵐喜代三郎
玉村淺之丞	竹中庄太夫	玉川さらし
袖崎政之介	勝山見なと	中村小夜之介
玉川さんや	干野主膳	袖崎縫之介
出來島小ざらし	櫻山小太夫	萩野金之丞
	中村源次郎	高尾林之介

村上竹之丞	唐松金彌	玉澤あきの
近松勘之介	山澤吉十良	小櫻千之介
筒井千太郎	藤田ゆきへ	玉川哥仙
玉川千之丞	津川半太夫	岩井平次郎
早川初瀬	鈴木辰三良	外山千之介
尾上左門	花桐小傳次	富澤千代之助
瀬川竹之丞	高島初太夫	出來島勘之介
玉川半太夫	高島尾上	萩野長太夫
三扇なには	尾上うこん	袖島源氏
淺尾十次郎	小倉七三郎	藤本花桐
山村哥之助	山下小才三	市川かほる
岸田小傳次		花井小山三
袖崎若浦	筒井吉十郎	市村かつら

津川かもん	花染皆之丞	葉山繁之丞
葛城つねよ	外山かもん	泉川千之介
尾上菊三郎	紅葉川京七	清崎半太夫
嵐金三郎	尾上小次郎	早川新勝
山下金作	富澤門太良	佐野川萬菊
佐野川花妻	瀬川菊之丞	瀬川菊次郎
芳澤あやめ		

○若衆形 延寶の比より以後

坂田小傳次	鈴木平八	尾上袖之介
中村かづま	吉岡もとめ	中村峯之介
嵐三郎四良	櫻山林之助	豊島春之丞
上村勘之介	山澤作彌	尾上源太郎

岸田才三良	上村八彌	松本千之介
松本類之助	松本小四郎	松本しづま
中川才三郎	藤田吉三郎	宮崎清吉
森島平八	宮崎式部	村山萬之丞
村山四郎太良	猿若小山三良	瀧本金吾
中山喜代之助	西村伊太郎	山川皆之介
萩野駒之介	光山七三郎	小島大吉
藤村近之介	富澤彌三良	花桐平八
山本作彌	十木萬吉	櫻木金太夫
竹島幸三良	松島作彌	櫻山富八
花桐千之介	嵐松太郎	澤村峯五郎
嵐大三良	音羽勝之丞	吉岡もとめ
藤田吉十良	哥村才三郎	市川門之助

藤川萬三郎

○繼母役

今いふ花車形なり
延寶のころより以後

- | | | |
|--------|--------|---------|
| 杉九兵衛 | 安田吉兵衛 | 藤本平左衛門 |
| 櫻井傳右衛門 | 上村かもん | 傳之丞 |
| 彌五左衛門 | 早蜘蛛梅之丞 | 西川佐兵衛 |
| 藤川喜右衛門 | 龜四郎三良 | やすと見吉兵衛 |
| 松本小左衛門 | 松本六右衛門 | 杉宇兵衛 |
| よし川八兵衛 | 染川宇兵衛 | 高本三左衛門 |
| 藤田文左衛門 | 熊本伊右衛門 | 橋本平介 |
| 尾上源次 | 澤村源次郎 | |

其外數百人ありといへども、古き立もの役者聞傳へたるを載たり。近世上手の役者かぞふるに盡せずといへども其中よりすぐり出してこゝに記す。

○古人仕内佳境

元祖坂田藤十郎、延寶年中、壬生大念佛の狂言に、古精買の役にて、其身揚屋に居らずして、詞と姿とにして傾城買の肝要を顯はせり。初日二日見る人さのみ悦ばざれば、今一度稽古仕なほさんと、相手にとりし者をかたらひ、深更におよぶまで、稽古をなして、千々に心を碎しに、うつゝの如くに古精買の荷物を負て、一聲二聲よばはつてなすむが、賤うしてうつたかく、暫ものして橋が、りに入る。是に心移りて、まばしみるとれ居たりしが、傍に有合もの一兩輩を見えて、おやしのものと思ひけん、即座に氣を取らしなへり。是を見て初めて心づき、奇異の思ひをなし、わが家に歸りて是を工夫し、翌日の所作感にたへたり。夫より此狂言を度々仕けるに、繁昌せずといふ事なし。是藝の精也。又藤十郎けいせいの買の狂言せしとき、相手どりし亭主の役人にけいこさせしに、終日此業をなすといへども、藤十郎心に叶はず、いかなればと尋るに、音のおふ合ぬの差別にて、曲とわざも出来るぞかし。さればこそ亭主の仕なしによつて、けいせいの買も性根を亂すなりといへり。是等を聞侍るに、藤十郎は自然と舞臺へ出て狂言とは思はれず、今に至りて此人の金言毎度申出し、諸道の心得に通ず。斯のごときの人故、役者たるもの、古今の元祖となし侍る。耳藝集金子吉左衛門選 又佐渡島日記 佐渡島長五郎選 などで考へ見るべし。

元祖芳澤あやめといへる若女形、立役坂田藤十郎に并ぶべき名人なり。或時山椒太夫の狂言に、惣領娘あはらの役を勤ける。此役は賑やかしき姿をするやらんと思ひ侍るに、常體のこしらへにて、まかも美しき出たち

也。人々心得ずして、是をみるに、舞臺へ出るやいなや、見る人臍をかへて一笑す。何事をかするやらんと、樂屋よりも各々出て見るに、いかにも鈍にしてをかき也。淺尾十次郎といへる若女形、阿房の役せし時は、ゆきたけみじかく、鍔袖のごとくに拵へ、其身をわはうらしくつくり出たれども、そのみをかきともおもはざるに、あやめは身のこしらへうつくしく、舞臺のわざ自然と思也、あざりふしぎに、或人あやめに問はれば、答ていはく、山椒太夫は其所の分限者なり、娘も随分きれいに育べし。元來召つかひも付置べし、阿房に見するは心にありといへるよし、名人の心得は又格別也と人々感ぜける。淺尾氏も其頃の上手名人なれども、あやめには劣たるとまざるべし。

元祖澤村長十郎といへる立役、大阪中の芝居にて弓削道鏡の狂言に、よし澤わやめを相手にして、幕際に石を切る藝あり、色々仕内ありて石を切り、互に奇異の思ひをなし、習く物をもいはず顔見合たる有さま、諸見物の人は是に氣をうばはれ、幕引終て後、まや〜〜〜と感心ししばらくなりもやまざりしと云傳ふ。是を以て見れば、皆藝の精なるべし。

荒木與次兵衛といひし立役、狂言によつて、松の立木を切事あり。或時細工人誤りて、しかけなき松の立木を、舞臺へ出し置しに、與次兵衛作り刀をもつて、すつはと切終て後、細工人是を見て肝を潰せしと也。心の鋭とはこれらといふなるべし。これほど仕内に魂を入る人又あるまじ。

市川海老蔵、家の狂言に、不動明王の役、眼ぶたせはしくなり、睡をすゑる事能はず、依て日來念じ奉る、なりたの不動尊へ參、我眼中の血をそへ、一七日誓ひをたてしに、不思議なるかな、誠の尊像に見まがうて、眼中すこうしてひと見をすゑること時をうつす、是精といふべし。

前神山小四郎六藝の奥義を極め、遊藝に上達したり。いかさま物真似といふは、諸藝に達したるものなりては、其長とはいはず。あるとき前小四郎宅へ、不敵なる盗人はいりける、其手強きものにて有しを、やがて小四郎彼者のさうで取て押へ、繩かけてさし上げれば、名ある曲者にして御褒美給はりける。是を以て見れば、ひかしの役者は、藝によつて、人の助と成事多し。

或人曰、今時の役者思へらく、まばりく、人なしといへる事、いかなる譯やらんとひたすら尋ねければ、されば見物の人々、一日ぬんせいをほくする事を屈して、酒などにうさを嗜す。なすわざ物真似の骨髄に徹するやうにすれば、見物其情に成によりて、見物をしばらく、るといふ。又淨瑠璃節を語るといへり、人形も操といへり、節にて人を泣すは語る也。木偶人にてうごかせば人を操る也。是操り語るにて、歌舞伎の本義をうしなふべからずといへり。又めるははる、はるはめるといふ事あり。藝を爲ものせりふをばり、つつこんでする時は見る人める也。仕うち骨髄になす時は見る人はる也。因てめりはりの大事也。又シテワキにて引しめるといふ事あり。ワキは相手になるもの也。シテは其場のく、りをする人也。たとへば正面へ出て仕内ある時、相手になるもの片はきにある時は、シテおのれと見物にされる也。ワキをする人、シテに能順ふときは、聲も向ふへ通り、見物を引しめる也といへり。又藝をなすもの、其日によつて氣段かはる事あり。工をする人、又物道具あまたもてること、たとへば切物にて磨たつるといへども、腹立るとやらいうて、其日によつて更に切ぬ事あり。寺々の鐘だにも、其時々音かはると也。扱又形よりいづる詞、言葉より出る形、役々の居り様、同じ形にて二役の仕用、男女居すまひ手のつき様、人に心を懸、また思はれる氣持、人をだまし方、男女の泣やう、或は人毎に返事するには五ツの心得あり。其人のこんなたんによつて、大佛の仁王あり。小寺の仁王あり。堂塔伽藍の細工あり。根

付彫物のさいくわり。女はいろを本とすれば、立居ふるまひ、人と物いふにも氣だんあり。表をはでにし、裏に貞心あり。又女の上目づかひは愛想つまるものぞかし。身のとりなし立派にせんと心が付ほど男に成やすし。武士の妻は表は吃として心は和らか也。又物わざもりしからず、唯おそれざる氣持也。仕にくき物は傾城役にて、柔らか過ればいやみと成、又遠目づかひに誰かが見付し事までも見えねど、人見にあらはれ、年寄て其身叶はずしても、若き時のつよき情は離れず、老女になりても、若きはでなるしほらしき情ある也。童子はかたしく正直也。扱三ヶ津の氣持、江戸は賢ば人とならび行にも、跡へよる事を自然とさうらひ、大坂は男をみがく氣質也。京は我すがたを粧る風義にして、表を美しく仕なす也。扱又狐は臆病なる情あり。犬は主をわすれざる所の情あり。鶏の頭に角あり。外の鳥は頭のつかひかたすなほ也。鳥さしがさゝんとすれば、其氣をしる不思議あり。されば夫の情を知らん爲、幼少より修行の事多し。論語曰、賢を賢として色にかへよとあり。又法華經にも、咸皆懷戀慕、而生渴仰心とあり。藝者といふもの我慢を第一とす。二ツには色に迷うて戀慕ほどに思へとのをしへ也。都て歌舞妓の秘事といふは、其身修行の功なくしては、中々解する事あたはず。世人思ふには、役者にさへなれば、つひ其長にいたるものと思ふはおろかな事也。たやすくなせるわざにあらす。

或遠國の人なりしが、此道に入て柏達市川海老蔵に藝修行の事を尋ねければ、市川曰、教る斗を力とするは、儒書めきたよめるといへども、其身才智なくして解する事なきは、たとへにいへる、論語よみの論語しらす也。去國に座頭あり、生得すね者にて有しと、其國の大名、其すねもの召呼としてよせ玉ふ。さていかなることをかすねるやらんと見玉ふに、會てすねたるとしな。故に座頭に、何とてすねざるやと尋玉ひしに、さん候、私儀すねるを以て御召なされし故、すねぬはやつはりすねる也と申上げると也。藝のまうちもしかり、我生質の氣によつて、す

ねてせざれば、上手には成がたしといはれたると也。

同人市山助五郎に藝の修行を問れば、市山氏答に、御身は遠國のうまれにて、へいへの詞、先詔る事をたしなみ玉へとて、松といへる名を、男女にいひ分て見よとありし故、色々心を盡されけれど、さらに直らず、いかにしてか此訛ぬけべきやと尋ねければ、さればいろはのかな文字、いとけなき時これを習うて、段々成人にしたがつて、是を習ふ事なし。文道を能學びて、又元のごとくいろはを習ひなば、筆道に叶ひ侍らん。今役者の藝も其ごとし。上手に成てはむかしを捨、功者のみにか、はりなすゆゑ、狂言もさびしく成、見る人もさのみ悦ばず。若きときのはでなる藝の氣持を考へ、むかしに歸らば彌上手なるべき。三味線を引人修行にしたがひ、六ヶ敷事を習ふを手柄とし、初心をすてたる故、彼いろはのごとく習ひしおきのいしなど忘れ、奥へ〜と行ゆゑ、上手の人まれ也。御身の修行もそのごとく、先言葉つきむかしに歸つて、いろはを習ふごとくせられよといはれし也。こゝにある人諷を好み。京へ登り師を求め、習ひにゆかれけるに、高砂や此うら船を唯一ツをしへけり。此うらたひのみ三年が間けりこせしに、師が心に叶はず、彼もの大に精をつかし、師にいとまをひ、本國に歸らんとて、伏見乗合舟に乗り、終夜屈する儘、彼此うら船を興風うたひけるが、乗合中に觀世流の人々同船して居たりしに、耳にとまりけるにや、彼男に近付、さて〜驚入たる御うたひ、我々此道に染るといへども、貴殿のやうなるうたひいまだ聞侍らず、希くは自今したしきうたひをむすび給れと、両手をつき述べられければ、此男初て心ひらけ、夫より彌修行し、終に名ある人となられし也。役者の藝もまづそのごとし、二度いろはを習ふべしといはれし也。

京芝居の道外形にて、頭取なども勤し、小倉山百介といへる人、かぶきの舞を能鍛練し、振付など上手なれ

ば、舞を習ひに行し人に、百介曰、猿の真似して見られよ、つかうて見んとしへりよし。是いかにと尋ければ、猿といふものは、生得かしてこまものなれども、子猿のときより仕入ざれば藝つかざると也。諸藝もそのごとしとすへり。

市川海老蔵と、實徳の名人山中平九郎と、たがひに藝をばげみ合ける。或ときこの役に、平九郎、市川の左に座し、左の手に火繩をもち、いかにもかしてやらうこちらへ呉れといふ。市川むつとして、いや右の手へ取直してかせといひ、半時斗白眼のひる狂言ありしが、彼關羽張飛がいさほひ、見物もいさをつめて見入たるよし。とき平九郎、是非なくエ、しぶとき野郎めと右の手へとりなほし、火繩をかす、爰にて幕を引し也。斯のごとく藝をばり合事今時はなし。さればこそ、近代希なる上手なりと語りつたへり。

山中平九郎、ある時の狂言に、鬼女の役を請取、樂屋にて稽古をして、私宅へ歸り、二階へ上りしが、側に有合し鏡臺にかゝり、紅にて顔をくまどり、手をならしければ、妻女何心なく二階へわがりしに、平九郎が顔を見て、わつというて、氣をとらうしなひ下へ落たり。人々おはて介抱し、漸正氣に成、おら恐しやといふ。其時平九郎手を打てしたりくと悦び、訝たる鬼女は見るといへども、正體を知らず、今我顔をくまどり見せたるに、氣をうしなふほどの形に見ゆれば、此度の役は仕當しとかたられしが、はたして其狂言、大入せし事夥しかりしと也。中村新五郎、中村富十郎人を打擲する藝ありしとき、舞臺にて、其身不叶ほどた、かれしかば、其人以外の外に腹を立、其夜ねだりにゆきければ、さればの事、御自分の仕うち性根いらざるゆゑ仕内うそ也、今日はいたみしかしてこれまでの大出来なり、此事を心付せん爲、扱社實に打擲せしと語られければ、彼人赤面して感じられしと也。

姉川新四郎曰、江戸の氣持は廿斗也、大坂は三十ばかり、京は四十以上の氣内也と語りけると也。是いか成義と尋ければ、江戸は廿斗の氣なればこそ、物だのもしく受合、活氣にしてしまらぬやうに見ゆる、さるによつてくはつと白眼で見えてとり。大坂は三十斗の氣にして、少し分別あり、理非を正して男を立つ氣持也。京は四十を越たる氣にして、能物になづさはり、始終を辨へ物をなす氣持也。此心なくては、三ヶ津のげいは仕分がたし。まかるに近年、京は物やはらかなる土地にて、歌道などこのむべきに、おら事などをすき、馬方歌を興にして、女がたの紅の湯具あらはに出る事を好むは、全かぶき役者藝のしうち、興になる事のみにかゝはるゆゑ、おのれと見る人其心になるといへり。さればこそ、敵役が女がたの弟子に成、女がたが敵役の弟子に成やうには成たり、つゝしむべき事也。

市山助五郎曰、役者に立もの藝者、世にうたはれもの、世にすてられもの、世に出来もの、所作仕あり。立者といふは、芝居の役者頭也。藝者はよく物になれて、しうち狂言の氣に叶ふといひ、世にうたはれものは、時の氣に叶ひ、仕内はでにして悦ぶをいひ、世に捨られものは、藝功者にして、非をうつ事更になし。まかれども時の氣に叶はず、たとへばはでなるをすく時、世にこうとうなる風を見ることし。世にできものは、しうち人の真似する事も叶はずして、自然と藝に徳の備りあるをいひ、所作仕といふは、舞事をいふにあらす、男女の情を能辨へたる也。たとへば被着たる女の手のそなへ、こしもとの手のすへ様、乗物に付女の風俗、夫々の情をなす是所作也。或人曰、手負にて泣事有、其時こしらへてなくもあり、おさへて泣もあり、是いかなれば、おさへてなくは人目をはかりふるうてなく也。こらへてなくは未練にみゆる也。

先市川團藏曰、立役はさびすすわらずしては、狂言の體居らず。女形は胸すわらずしては、狂言に性根なし。又

時代物、世話物の狂言するに、時代は見えにあり、世話は業にありと也。或時の咄しに、時計屋の仕かけをするに、豊年は玄かけ狂はず、凶年は狂ふ也、狂言も其年々の人の氣によるもの也といへり。予是に付て鳴物を考へきくに、太鼓をわふのいて打ば甲に成、うつむきて打時は乙に成、まして掌ののびきまらざれば、愈調子狂ふ也。夜ばん太鼓うつに、其時々調子狂ふ。又笛吹人肌はだに和らかなる衣類いりょうを着、又は兎うさぎ成ものを着し、又着なしきたらく成か、居すまひによつて調子狂ふなり。或人鼻紙はなかみを腹はらに當て吹といへり、いかなれば紙を當ると問に、調子の狂はざる爲也とかや。むかしの人は、物毎に心を付、工夫をこらせし也。すべて調子狂へば、天地人三才さんさいの和に叶はず。

元祖市川團十郎、坂田藤十良が藝を見んとて、態々上京せられけるに、折節坂田氏病氣にて舞臺へ出ず、市川氏殘念の事に思ひしに、藤十郎使を以いへるには、適々御登の事に候へば、責て東山邊にて、兎酒うさぎしゅ飲のむじたまよし申送る。團十郎も辭退じたいなく行けるに、藤十郎座敷へ出ず、市川氏腹立はらたてしける體見えしとき、むかふの座敷へをろりとしたるすがたにて立いで、生花いばななどして、又這入れれば、彌市川氏不興ふきようにて、すでに歸らんとせし處へ、坂田氏人を以いへるは、囁御退屈ささごたいくつならん、唯今御目にかゝらんとて、長髪ながかみの體をわらため、威儀いぎを正したち出、對めんしける其行粧ぎやうじやう、さすがの市川氏、狂言見るに及ばずとて、其翌日江戸へ下りける。扱江戸にていへるは、藤十郎存生の内は、京へ役者のほすまじとていへりしと也。

祇園の社は、出雲の大社と同たい也。かぶきの元祖於國は、大やしろの巫女みこなれば、今芝居繁昌も、神慮しんりょに叶ひし也。祇園の御神詠に、

我がどに千本の櫻花さかばらゑおく人の身もさかえな舞

との玉ひし。彼是を以て芝居仕、丁子屋新四郎、櫻樹千本を植たり、今ある所の櫻是也。此内に黄櫻、緋櫻と、井手山吹、宮城野萩、此四色いかになりしや今はなし。

○古人役者所作

凡所作事は、程よく舞ふ斗ぶたうにわらず、歌うたふにも文句をうたはず氣を諷ふ也。歌の唱歌はまらねども、勇もする又かなしむ情にもなる。女ならば物事なすにも、腕うではなれざる處あり。ありくにも爪つめさきよりむかふへ足の出ぬもの也。走り行にも、つぎの明事をいとひ、立にも右よりたつもの也。腰こしほそにすくとひらき、目をふりにつけ、ふりより目をつく、すべて所作事は狂言の花也。

江戸にては六法を丹前にまへといふ。其出立時々による成べし。また大阪のだんぢりは、高股立を取振とれいだす也。京にては羽織着ながしどろりとして六法をふりいだす也。是嵐三右衛門家の風也。

早川初瀬といふ女形、大阪松本名左衛門座にて、獅子の所作事輕わざにて勤めける。是始也。前瀬川菊之丞、享保十六亥年、江戸猿蓑勘三郎座にて、去方と相談あつて、石橋と云を始、三弦は杵屋喜三郎、此節付を仕たり。享保十九年、繩手姉川新四郎座、菊藏座へ上京し、菊之丞是をまた増補して、頭取桐山宗七といふものによりを付させ、三味線は芳澤金七節付をして、瀬川氏此所作をなす。今世に專是を用ゆるゆゑ、くはしく愛に記さず。

佐渡島長五郎、五歳ごさいのとき、碁盤ごばんの上にて五化といふものをはじめたり。九歳くさざいのとき、碁ばんをおりて是に二ツたして、七化ななげとなして所作事始る。又七小町の所作事あり、傳次事にて人に洩らさず。又邯鄲かんたんの所作事ありて、

枕の夢に四季折々の榮花を早替にてなす。中にも秋は四方の梢をもかれく成氣を以て、翁の骨髓をなし、冬は六法、春は萬歳調のの妙をあらはし、夏は賤女一様にさらし布の所作事、舞臺にての早替、是一流と成。又狐の所作事は、ある時つれづれの折節、雨降けるに、大豆の入たる盆へ、軒づたひの雨のしたがり音、拍子を感じ、雨だれ拍手を工夫して、狐の風俗にうつし、早替りと思ひつき、前に黒き物を身に覆て、後に狐の面をかけ、後へ手を廻し、秘術を盡す。くるりと廻前の黒きものを上ると、伯藏主とかはる、見る人心をまどはし、皆人感にたへ、いつとなく誰か名付るとも知れず、うしろ面と呼ける。先祖佐渡島坊より相續したる長五郎也。幼少比より此道に心をよせ、凡修行の年月三十年來也。中興所作事の祖也。能の道は家傳也。分て狐の所作に妙を得て、野狐これを嫌て、妨をなす。藝の精妙手のまどくにや、あたりへ近よる事能はず。されば其比所々の鎮守につかへる狐にむかうて恥しければ、野狐號のあるは恐れて、其土地をよりしと也。長五郎曰、つらく變化のわざを見るに、あるは狐人を化する時、女ならば右より踏んだし、道を行くにもまびすにてあるくもの成に、かけたるわなを見て、さすが畜生のわざとせば、氣をうばはれ、其儘左より踏んだし、爪をまきにてあるく。畜生足に成と也。又後面などの所作は、頭の前うしろにて三寸違ふ也。其心を以て後へ反也。狐は常に頭を治居る事なし。是は常に狩人又は犬を嫌ふゆゑ、役の内の嘶子物なれど、鳴物に恐れおどろく仕内あり。又つくばる居るは前足折る也。立ちきは腕胸を離れず、頭を背けるもの也。又獅子は物に恐れず、おほやうに頭をつかふを第一とす。扱又歌の節にふり付ず、文句にふりあり。生なき事には品に付、節にて引時は拍子程よくふり付るなりと云へり。斯のごとく心を盡せし佐渡島氏の藝には、神も納受し玉はん。をしやかな寶曆七年秋七月十三日に身をかき、蓮知法師と名のみ残り侍り。俗説辨曰、一とせ百日のひでりありけるに、靜が舞に至て、龍神是

にやめて玉ひけん、俄に黒雲起りて、雨降、靜に日本一の宣言を給りけり。然れども、白拍子に歌舞せしめしは天を輕侮もの也、非禮にめて玉ふ龍神あらんやといふ人あり。予思ふに、人は天地の體と同體也。形を論ずるときは、貴賤僧俗男女老少美惡と分れども、體は差別なし。されば體を以てする時は、靜も遊女にて穢はしき形なれど、天地の靈にして、則天地の氣をうけたる物なり。形は穢はしけれど體は清淨也。其體を以て藝をなし、天を祈るなれば、天是をよそに見玉はんや。なんぞ遊女に愛て感應あらん。既に伊勢大神宮御宮居衰へ玉ひしとき、伊勢比丘尼とも勸進し、御宮再興せしと也。是形によらば比丘尼は佛道也、唯一の神なれば、御罪と蒙るべきに、再興成就せしは、感應のしるしならずや。

歌舞伎事始卷之四終

歌舞伎事始卷之五

役者藝品定本元

目錄

古人小歌作者附

古今小歌諷 雜子方部類

歌舞伎三味線流儀

岸澤治郎三 妙手遊鳴神名器

山本喜市 上手

鳥羽屋三右衛門 三藝

狂言作者名人

津打治兵衛 案方

東三八 名言

中村傳七 奇作

歌舞妓事始卷之五

○古人小歌作者

富士大鼓 歌占

山姥所作 あだ浪

安藝宮島

雉子 戀すてふ 草づくし

鳥の所作

傾城花いかだ

四季の所作 放下僧

あさま 三ツ車

かやの所作 近江八景

榊山小四郎作

澤野九郎兵衛作

山田兵介作

嶋野勘七 兩人作

若村藤四郎 兩人作

嶋野勘七 兩人作

葛山四郎兵衛 兩人作

葉山岡右衛門 兩人作

杵屋長右衛門作

同人作

唐人歌 世間にてちんないろといふ

松風 あを葉

きあやうの所作 龜の所作

鷺の所作

有馬の富士

沖の石 萬菊

近江八景

きぬく つくば山

唐金茂右衛門

とけつ

高瀬ぶね

花かつら

因幡の松

同 人 作

杵屋長右衛門 兩人作

葛山四郎兵衛門 兩人作

知原 藤四郎作

同 人 作

木甲三左衛門作

永島庄左衛門作

和歌村藤四郎 兩人作

柴崎 勘六作

同 人 作

杵屋 長五郎作

辻 甚左衛門作

大和屋傳十郎作

三松三左衛門作

鳥部山 古 十三がね

花の香

井筒

松虫の所作

うとふ 狸 松風

道成寺 こんくはい 桶ぶせ

入間川 放下僧

六だんれんば 里げしき

あきぶとん 二の替りのうたは是よりはじまれり

きつね火

けいせい男山 明がらす

かくや道心 新道成寺

小出 金四郎作

坂田 兵四郎作

坂田 兵四郎 市 兩人作

嵐 三 五 郎 兩人作

岸野 次郎三作

同 人 作

同 人 作

同 人 作

同 人 作

同 人 作

同 人 作

同 人 作

同 人 作

春の雪

海人 新道成寺

石橋

庭鳥所作 心中づくし

なごやおび 相の山

つき出し かぶろまつ

十三がね 關こまん

おはつ徳兵衛 白小そで

むげんのかね

はつ櫻 しらいと 雪見酒

杵屋長五郎 兩人作

青木半兵衛 兩人作

芳澤金七 作

若村藤四郎 兩人作

山本喜市 作

同 人 作

同 人 作

同 人 作

山本喜市 兩人作

若村藤四郎 兩人作

同 人 作

其外古來より残る處の歌の目錄あまたあれども、松の葉、又は松の落葉等にありゆる略す。其外外記節薩摩ふししろく有。

古今小歌謡

三子方部類

○小歌うたひ

寛文のころより名あるはやしかた、聞傳へたるをこゝにします。

彌惣兵衛

五郎左衛門

半左衛門

吉兵衛

太兵衛

あつき 庄兵衛

山崎五郎治

森清兵衛

日暮六右衛門

十右衛門

九郎兵衛

勘左衛門

大川傳八

吉左衛門

彌兵衛

徳左衛門

權兵衛

五郎兵衛

權左衛門

長左衛門

半左衛門

作右衛門

五郎兵衛

傳右衛門

久兵衛

彌兵衛

徳右衛門

源右衛門
七郎左衛門

七郎右衛門
權左衛門

七郎左衛門
五兵衛

○三味線方

八郎右衛門

勘十郎

彦兵衛

三左衛門

權左衛門

沖右衛門

勘五郎

權九郎

權八

安兵衛

杉山 權九郎

杉山 彦三郎

平次郎

權九郎

平三郎

藤本平介

林與左衛門

玉山源三良

左渡島六右衛門

山本勘作

梅垣六左衛門

友喜平次

權之丞

清左衛門

彌兵衛

八郎左衛門

八太左衛門

清十郎

平七

○鳴物雛子方

小つゞみ

小つゞみ

小つゞみ

大つゞみ

山日源七

小つゞみ

吉右衛門

小つゞみ

藤右衛門

小つゞみ

小つゞみ

左五左衛門

小つゞみ

小村宇右衛門

早川五郎兵衛

小つゞみ

四郎兵衛

小つゞみ

今井利兵衛

左門喜兵衛

大つゞみ

加兵衛

大つゞみ

河内五郎兵衛

大つゞみ

小つゞみ

與介

小つゞみ

三左衛門

大つゞみ

大つゞみ

彌平次

大つゞみ

伊兵衛

大つゞみ

大つゞみ

平太夫

大つゞみ

作右衛門

都傳右衛門

小つゞみ

吉左衛門

大つゞみ

又右衛門

大つゞみ

小つゞみ

三郎右衛門

小つゞみ

か平十郎

久左衛門

はやし

彌三三良

小つゞみ

百兵衛

傳兵衛

林

彌三三良

小つゞみ

百兵衛

小つゞみ	傳四郎	はやし	次郎三良	大つゞみ	宇右衛門
大つゞみ	市十郎	小つゞみ	源兵衛	小つゞみ	源内
大つゞみ	三左衛門	大つゞみ	間兵衛	はやし小つゞみ	彌平太
小つゞみ	加兵衛	大つゞみ	間兵衛	大つゞみ	清左衛門
ふえ	權兵衛	ふえ	權左衛門	ふえ	茂兵衛
ふえ	六郎兵衛	ふえ	三郎次	ふえ	四郎兵衛
ふえ	市左衛門	ふえ	金兵衛	ふえ	庄左衛門
ふえ	龜谷庄左衛門	ふえ	與次兵衛	はやしふえ	七郎兵衛
元祿の比よりのはやし方名ある者こゝにしるす					
大	藏善六	松下金之丞	幸野清五郎		
大	木源左衛門	川村庄左衛門	杉本新七		
野	口重右衛門	徳田長右衛門	天上庄七		
近	江屋甚三	近江屋勘五郎	小林新介		

竹中左平次 佐川與平次 佐川升五良
 清水清吉 あみの伊右衛門 錢屋圓流

近年上手の囃子かたまたまありといへども、人のまゐる處のまこゝにのせず。七十年前、骨屋庄右衛門といふ名人の鼓打あり。常に上手めかして打ず、人は是を聽るといへども敢てかまはず。或人尋ければ、上手にうたせ舞ふ人なしといへるよし。又歌舞妓三味線は、他流と事かはり、一切の鳴物に調子を合せ、微妙の色音を弾むくる也。元祿年中、岸野次郎三といふものあり、古今に勝れたる名人にて、古き唱歌をこのみ、故律の正しきことを尋ねざりて、自然と三弦の妙を得たり。いかに早めてひくといへども、ばちを持たる手の小ゆび、三弦のこまにひたくとつきしと也。藝にいたる人ならんではなき事也。或時神山氏、ぬめりといふものを望まれたれば、治郎三是を十七段に引分たり。是けいせいとの出端にして、其大夫の位くを音色にて、十七段に引分たるよし、奇妙の術を得たり。さるによつて、諸方の法師も此人に習ひしとぞ。此人の所持したる三弦は、鳴神といつて、日本に二挺の名作なり。今一挺は先神山小四郎所持して、常に此三味せんともつて音律の事を論じたり。又あるとき、哥占のなり物をはやされしに、治郎三是にしたがひ、歌うたひ三弦を合しけるよし、今にいたるまで是のみ噂し侍る。又其身芝居に行ずして三弦をならし、其日くの見物の人数の多少を知る、これ音を聞てまれると也。又小四郎宮商角徴羽の道理を能辨へたれば、道成寺を略して舞ふことをこしらへたるは此人に始る。今小四郎、此道成寺に輕わざを入れ五度つとめたり、則節付は治郎三也。又山本喜市といふもの妙手にして、治郎三におとらぬ三弦也。或秋の頃、聲々に鳴虫の音をき、調子をほそめて、色にまたがひ曲節を作しに、忽虫の音や

始終理屈つまり、見物よく取やうに作る名人也。取分引道具、せり出し、押し出し、ぶんまはし、引かへし等、珍らしき大道具仕出し、見物の目をおどろかせし也。有が中にも、先年中村座にて、嫁入角田河といふ狂言に、兩國橋より三園の堤まで一里ほどある、川岸の大引道具、大形成こと、古今の珍景にて大入せしと也。竹田出雲存生のとき、弟子爲永千蝶、作者の秘事を尋ねければ、机邊脚ゆづられき。千蝶病死の節、一紙を添へ、予に又是とゆづられたる、其文に曰、

木の葉おちてめぐむにわらず、またよりつはりめぐむによつておつる也。作者の趣向も、其時に望ていつるにわらず、多年心がくるを以て趣向も出来る也。十月は小春とてあたゝかに花も咲、狂言一かはり二替りうどんげの花さくといへども、下よりつはるめぐみなければ、春の盛りは身をうらむ。學文せよ、學文すな。才智になれば、利口になるな。阿房になれ、あはらすな。恥をかけ、笑はるゝな。色にまよへ、我色に迷ふな。長生せい、ながいすな。

と書り、今我拙くして實生の土氣を恨み、よそに開く花を見て、初てむかしをしたひ、日蔭のうもれ木なりとも、接木をなさんものを、いたづらに過る月日は多けれど、心のくもりあるゆゑに、見がき出す力もなし。此書も古人の説を用ひ書つゝけぬ。夫人は水のかはるを以て、土地の氣にうつり、心を付れば、詞のなまりもぬけ、言葉もやはらぎ、たけき心も柔和に成也。ぬくめ鳥といふは、極寒に鷹の足をわたため、おそろしとまりながら、和らぐ心は則神也。其鷹ぬくめ鳥の飛さりしかたへ羽をのさす、和俗にも杖の下よりもまはればかはゆいといふも、和を以ていふ。その和を本として、歌舞伎の業をつとむる也。

歌舞伎事始卷之五終

跋

予此書を、そこはかなく書續けて、國の花とはかどめくに似て輝しながら、氷は水より出て、水よりも寒く、青き色は藍より出て、かへつて藍よりも青し。其いろにあやかつて、八百日行濱のおもひ、ささすにまかせて、さえかしこきあてなる人に、あさな夕ないうちとけて、心のくまをとふ事年あり、或夜のつれくに、月の都へ登れとの給ふについて、予これにこたふるに、羽なくしてはとさいまぐりいへば、師がいはくむべ也。又曰、千尋の海に入、龍宮に波の契りをこめよと也。予はかなくして、口さけられいひしろふに、師またおにつわるやうにして、梓弓おこななる聲にて、はしたなめ侍るに、予なほ是をうらめば、師の曰、汝堪忍の情なし。たとへば六つの境に居て、有無に迷ふに似たり。千日の茅もけふりとならんと、いましめ給ふに、おもなくてぬすまへたるかと、心もわれならずして思へば、玉をあさむく白露は、目にふるるといへども、置草のいろたうつりて、

白きを忘れ、師のいふ月の都、海底の道をしらざるながら、さかし心の人をうけへたる心はあさまし。かく適々あてなる人を慕ふといへども、其人もうたかたにうつる。稻妻にして、あるかなきかの世のありさまを悔めども歸らず。されどまたかいやりすつべくもなく、むかしをまたふ人もあらば、かどふ事もありなんと、つたなき予が種々を、鳥の跡は人に見すべくもあらねど、幾野のみちの遠ければ、踏あらしたるあとをしるるべに、まよひをひらく便りともならんかしと、跋してまかいふ。

むまの初春

爲永一蝶



寶曆十二年

午正月吉日

秋月下

露



武府書肆

江戸大傳馬町三丁目

鱗形屋孫兵衛

皇都書坊

京麩屋町誓願寺下ル町

八文字屋八左衛門板

むかし汝南の月旦評は、當時の人物を嚴論して品題せしに、きのふは愚にして、けふは賢なるもあれば、やがて、月々に褒貶を更めける名なりとぞ。況や先人役者大全を出してより、いくはくの星霜を経ぬれば、其後に出たる役者はいふに及ばず、大全には不達の部に題せるも、今は名譽の聞えあるも少なからず。これ我やむことを得ずして綱目を撰む所以也。もとより彼李卓吾李笠翁などを欺くほどの戲場の鑒定家、たれかれに討論して、其衆議の宜きを取り、露ばかりも臆説を須ひず、尙くわしくは役者大全と參合して見給はんことをこひねがふのみ。

于時明和八辛卯夏五月

八文舍自笑序

凡例

一新刻綱目六冊、第一には湖上笠翁が編次の唐土歌舞妓狂言傳奇十種の内、屋中樓の結屋雙訂二齣を譯し、奥に童蒙の見安さやうに、せりふ帳の詞にやはらげ、唐土の芝居舞臺の圖、ならびに狂言の趣を繪にわらはす。

一第二は、三ヶ津立役の部を評し、初舞臺より以來、當り不當りの仕内を詳に書載せ、師弟の系譜を記す。且京大坂の芝居子供芝居等へ出勤の分をまたあれども、師弟の系譜にもらず、三ヶ津大芝居へ出勤のせつ加ふべきなり。

一第三は、三ヶ津立役、親仁形の部を評す。

一第四は、三ヶ津實惡、敵役、道外形、花車形の部を評す。

一第五は、三ヶ津若女形の部を評す。

一第六は、同く若女形、若衆形の部を評し、おくに江戸三芝居太夫元の傳をせるせり。

俳名をことくくまるとし、或は二代三代など、かきたるは、故人の名を相續したるをわかつためなり。唯何ともまゐるしなきは、其身始ての姓名と知るべし。位付は年々の藝品定にあきらかなれば爰に記さず。惣して三ヶ津舞臺へ出られし人、今何方にゐらる、やらんまればたきもあり、又旅にゐらる、よしは聞ぬれども、本座へ出られねばたしかにまゐるしがたし、其分は本座へ出られ次第のすべし。又當時本座を引てゐらる、衆中も、まれたる分は書載せておきぬ。まればたきは追て其わけまれば次第に加ふべし。

古今若女形の名人惣頭と稱せられし、元祖芳澤のやめがはなせし伎家の心得になるべき口傳二十ヶ條を、福岡彌五郎書集め置しを、世にわやめ艸と呼て、優家七部書の内を附録に載す。 已上

新刻役者綱目卷之一

湖上笠翁編次

屋中樓

第五齣 結屋

預結精工奇巧、屋樓一座、暗置戲房、勿使場上人見、候場上、唱曲放烟、時、忽然拾出、全以神速爲主、使觀者驚奇羨巧、莫知何來、斯有

當三子屋樓之義演者、萬勿草草

末扮仙人撲杖上

〔皂羅袍〕名 離却清虛宮殿、倩紅雲一朵、扶下遙天。人看那洋洋大海、口無邊、俺觀着盈盈一水、纔如練。只見些霏霏似雨、蠢鼉噴涎。濛濛似霧、蛟龍吐烟。待要把握樓上、二憑空建。

〔下〕四人一扮魚、一扮蝦、一扮蟹、一扮鼈、全上。蝦肥魚大、蟹裙長、螃蟹橫行勢、更強把守龍宮、稱四傑、千年不怕網羅張。〔蝦〕自家蝦元帥是也。〔蟹〕自家蟹將軍是也。〔魚〕自家魚參政是也。〔鼈〕自家鼈相公是也。〔合〕我們四個、都是東海龍王的兵將、千歲今日傳令、叫我們噓氣成雲、吐涎作霧、結成一座屋樓、待兩位公主遊玩、我們還是那一個吐起。〔蝦蟹鼈〕魚哥吐起。〔魚

呵好一似天孫織所。淒淒可憐。俺便做個填橋鳥鵲行方便。

不免將柱杖擲去。變做一條長橋。待柳生來時。度將過去便了。〔擲杖介〕

非是神仙多事。祇因才貌堪憐。

暫學長房縮地。權爲媧氏補天。

第六齣 雙訂

〔玉女步瑞雲〕傳言玉女生上海郡荒涼。惡殺此時游況。〔瑞雲濃〕準備着月明歸舫。

小生柳毅別了張伯騰。來到東海訪友。不料此地甚是荒涼。游興蕭然之極。欲這山陰之棹。又爲地生苦留。終日坐在旅邸之中。好生寂寞。今日天氣晴明。不免叫奚奴看了寓所。獨自一個到海邊流覽一番。多少是好。正是：廣充眼界。惟觀海。盪滌胸襟。是聽潮。〔暫下〕〔且小且帶丑上。〕

〔鳳凰閣〕且湘裙飄蕩。窄窄蓮浮水上。小且珮聲輕曳。也叮嚀驚起海鷗西向。丑看新粧宮樣水鏡裏盤龍影雙。

公主來。此已是屋樓了。你看雕欄繞轉。畫檻玲瓏。上下三層。高低百丈。人間的工匠。那裏起造得來。〔且小且〕果然好一座樓臺也。

〔獅子序〕且黃金棟。白玉梁。瓦琉璃。壁磚兒。都是珊瑚嵌鑲。小且姐姐這是第二層。已自一望無際了。到了那第三層。還不知怎麼樣空曠。我和你再上去。登一登來。同上介。正是欲窺千里目。更上一層樓。且更望窮了青遠。眺盡蒼茫。丑不但樓高。就是那條橋兒也長得有趣。小且侍兒。那沙灘之上。丁對不怕羞的鳥兒。叫做甚麼名字。丑那就算是鴛鴦了。他兩個正在好處。不要驚散了他。且歎介。妹子。我和你終日在畫上看他。枕上繡他。只說爲甚麼緣故。再不見分開。今日〔觀〕親眼看來。方纔知道是這種道理。鎮日在水國內癡養。何曾見人世間。錦滄洲。眞鴛鴦風流模樣。則這箇中情緒大費思量。小且姐姐。我前日在書本上面。看見那潘安擲果。宋玉窺牆的故事。甚是疑心。難道人間世上。就有這樣標致男子。我和你生了這雙眼睛。爲甚麼不曾看見一個。且潘安宋玉。是岸上生的。不是水裏生的。就有這樣的人。我和你怎得見面。小且姐姐說得有理。我和你前世不修。生在這龍宮裏面。地日子歸。不知嫁着個甚麼男子。好生愁悶人也。

〔太平歌〕投胎誤。悔落水中央。怕沒個才人相倚傍。若要論門楣。纔把朱陳講。少不得個披

子。好生愁悶人也。

〔且〕我有道理。〔對生介〕妾身龍一氏。小字舜華。這是一嫡堂舍妹。小字瓊蓮。〔生〕魯有夫家否。〔且〕小且作差。容各搖頭介。〔生背介〕國色難逢。良緣不再。本待說起求親之事。又不好唐突他。如何是好。

〔降黃龍〕我偷伴。心口相商。纔得班荆。怎好把朱陳輕講。我想他在樓上。我在樓下。還不十分相近。況且下半段身子。不魯看見。怎麼就輕易求親。我有道理。轉介。稟告

小姐。小生欲借瓊樓一登。以窮遠目。不知可容上來。〔且〕男女混雜不雅。君子若要登臨。待妾畫下來相讓。〔生〕多謝。且小且丑下樓介。〔生細看背介〕若非月窟嫦娥。定是滿湘神女。塵凡世界。那有這等姿容。我柳毅遇了神仙。也看他那輕盈態度。綽

約丰姿。頓使我痴魂飄盪。丑相公請上樓。生如今不上去了。丑既不上去。為何騙我。們下來。〔生〕方纔二位小姐在上面。我要借澄眺為名。好親近玉體的意思。如今小

姐下來了。上面是一所空樓。去做甚麼。丑小姐怪道他眼睛光碌碌。原來是騙你下來。看會足。你便走。幾箇金蓮小步與他照。只怕他過後的相思。要害得哭。推且小且近

生介。〔生〕小生有句不知進退的話。要啓上二位小姐。只怕唐突西施。不敢出口。

〔且〕不知君子有何賜教。生小生學成滿腹文章。視功名如草芥。如今沖齡未娶。非

因納采無貲。祇要遲迴擇配。今日與芳卿不期而遇。應有夙緣。小生不揣。要與

小姐訂百年之約。不知可肯俯從。非狂我。才鄉貌。今生合該相儔。若不是紅絲暗

引。隔藍橋。怎乞瓊漿。

〔且〕待妾身商量。回話。〔背介〕妹妹。才子難得相逢。機會不可錯過。我替你做個媒人。許了他一個。虧了。一個。虧了。一個。〔且〕小且胡說。〔丑〕這等說起來。要序齒了。大公主許他。沒得說。〔且對生

介〕君子。念妾身笑。親自愛。常以不得所。天為憂。今遇仙郎。豈肯自外。百年之約。謹當

從之。白頭之吟。其能免否。〔生〕小生若做負心人。天地神明決不相佑。〔小且背嘆介〕這等說起來。吾事休矣。

〔前腔〕且〕休忘。情短情長。你看這汨汨波濤。須知道海神難誑。〔生〕小姐。既蒙慨諾。難使令妹。向隅。小生有個朋友。姓張名羽。也與小生一般。青年未娶。若還令妹不棄。待小生作伐。何如。且對小且介。〔且〕妹子。難得又有一個。你也許了他罷。〔小且〕知他

是怎生的模樣。(生)若論才貌。小生還不及他。(小且)背對日介。姐姐看他。憐香至性。惜玉真情。料不把虛言相憑。憑你做主罷。(日)對生介。舍妹也許了。(生)二位小姐。既然見允。還求各賜一物。留以為憑。(日)奴家有鮫綃帕一條奉贈。(付帕介)妹子。你把他甚麼與他。(小且)我有晶佩一枚。託他寄去。(解佩付日)日付生介。(日)小且。合取藏情。隨物贈。休擲在柳街花巷。更莫向人前誇示。賣弄輕狂。

【生】小生同去。與做友一說。過。一同央人來說親。只是聘禮非薄。還要求令尊海涵。(且)家君杜門深居。不通賓客。就有冰人到來。也不能相見。待奴家回去。各過家君。日有回覆。(生)這等在。那一處。等候同音。(且)八月十五夜。仍約在此處。相會便了。(生)謹依尊命。(且)我姊妹出來已久。恐家慈見疑。如今要返深閨。君子請回去罷。(生)這等告別了。(揖別介)【且】長橋險峻。好生行走。千萬不要回頭。(生)上橋介。(且)妹子。我們回去罷。話因三塞。日短。情共海天長。(小且)一片綢繆意。從今隔茫茫。(同)下。【二人暗上。一面放烟。一面散去。】(小且)暗上取杖下。(生)好了。被我走過來了。只是一件。方纔談了半日。不曾會問他。父親叫甚麼名字。以後再來的時節。從那裏問起。這也糊塗了。不免轉去問二箇明白。(向)頭大驚介。(呀。怎麼倏忽之間。樓也不見。人也不見。連那條長橋。也不知那裏去了。難道是做夢不成。

幽事云。非當作。

幽事云。阿當作。

幽事云。在當作。

【天聖樂】好一似。携雲夢。覺靈王。渺巫峰。在那廂。青天白日。豈有做夢之理。若說是水怪作祟。偶現幻形。怎麼贈我這兩件東西。又依然還在。這明珠兀自猶擎掌。左綃帕。右明璫。我知道。若不是仙妃現出湘波。上一定是神女行來洛水傍。這椿事情。回去對張兄說了。阿他一定疑虛詫妄。還把我這真情實話。猜做奇謊。我如回到家中。再做道理。只是一件。模樣都是虛的。只得這兩件東西是實。須要緊緊的捏在。又不不要被他不見了。

每讀齊諧。眼倦開。怪將詫事。費中疑。猜從今莫笑荒唐史。親向荒唐會裏來。

屋中樓

役人替名の次第

一 未 仙人

實惡

一 蝦 えび

一 小旦

神童

若衆形

一 蟹 かに

一 小旦

姉姫

若女形

一 魚 うを

一 丑

妹姫

娘形

一 鼈 すつぼん

一 浄

侍従

敵役

一 副浄

下部

道外形

〔地囃曲〕仙人うたひもの出端。

聞ゆアらしきや、この海原をうかへば、青天にわかにかきくもり、雲ともなく霧ともなく、たゞへかたに凝めつまひしは、必定これは元留鯨龍、彼屋樓をよきめらはすか、はて、いふかしやなア。ぶたいを下る

○魚蝦蟹鼈 各々襲取して出る

〔蝦〕それがしは、蝦大将でござる。〔蟹〕同断。〔魚〕同断。〔鼈〕同断。同音我ともがら。東海龍王につかへて、いにしへより今にいたつて四天王とよばる。まかるに今日仰出さるゝは、それがしに申付、氣を吐て雲となし、涎を吐て霧とし、一の屋樓を結びめらはして、御ふたりの姫君、御遊覽にそなへよとの御上意。〔魚蝦蟹〕魚どのそこ

もとよみ出されい。「魚解龍」蟹殿先をこもと。「魚蝦龍」蟹殿先「魚蝦蟹」龍殿よりはじめられい。「魚唯のかれ
 のといはうより古より本文あり。事あれば弟子其勢に服と、先各職分の高きと、年の老たると、もちまへの
 のすむれたるを分け、下座より段々一口つ、吹のぼされたらばよかるう。「衆」なるほど。「魚」われらは職
 分の高びくをせんさういたと、水族のうち何がまざるぞ。「衆」龍は水族の長たるにあらざる。「魚」龍は何が
 へんする。「衆」魚へんす。「魚」まからは龍にちかければ、先それがしが職分の高し。に立つ「蝦」も年せんさく
 があつたが、いづれもには鬚があるか。「衆」なまら。おれもなり。これは蝦老じや。「蟹」もちまへの藝のことな
 らば、みな〜本體をあらはして、さうやれ大地をばすまはつて、はやらがからじや。しほなく本たいあらは「蟹」
 これはだまされた。わぬしは入本脚、おれは四本脚、どう追付う、わされふけ。「蟹」たわ 事有れば弟子、勢に服と
 いふ本文で、是非われらにふかせざるやのかれやうがござる、ひよつと吹まければわるい、さう今じや。風
 けふりをふきけり。「衆」おとめされしを。仕内あり「魚」兼にむかてんがらた、これはのがれ
 うでござる。拙者にまかせておかれら、くびを出して見せう。正前に我ともから氣を吹おほせ、うれしや屋樓
 がてきた〜。いづれも目出た〜。「蟹」こはわれらにまかせて、先御のまわれ。「衆」笑ハハハハハ。死だか
 とおもたら、又いさかへつた。「蟹」いづれも笑ふことなけれ、出陣には頭をすつこめ、凱陣には頭をのばす。
 是が大將のまじり〜とぞ、まこれから蟹どののはん、ゆる〜ふく。「蟹」はひまはらるゝとはらがうて、まだ
 る〜。「蟹」われ〜は走ばかりが能。「蝦」是から拙者で御ざる。「蟹」いづれも〜「衆」ふてはあすみ、ふ
 てはあすみ、はて御感謝な。「蝦」いづれも左様に思召すは御光、拙者見かけは堅たりと見ゆれども、うちには
 ねなし、こはかち〜。いづれはつけませぬ。「魚」あ〜いづれもらちのわかぬ吹やう、此てきは御見やれ、

けふりふく、仕内「衆」〜いづれ〜此ほしか〜まじり、姫君をか、したら、まじりぬわるがらつしやう。「魚」
 いちぢかひなら〜。「衆」なせに、「魚」人の尻はくさし、我尻はくさうなら〜といふた〜もあり。〜と
 にとりては、女中がたみな、めん〜おほへのある事。「衆」笑「魚」此様に一口つ〜は吹はらり、ふけばらり、
 中々のだんしては、屋樓心もとなし。いづれも精神を凝らし、吹出されてよからう。「衆」もつと〜。みなみ
 な精出されいや。

「地唱曲」【兼調】三口【雲のごとく霧ににてまたわれかとうたかふ、ふ、ふ、ふ。五色の光明びつかり、ふ、ふ、ふ。
 そろ〜盛氣がこりかたまり。ふ、ふ、ふ。我輩四天王大いさをつき。ふ、ふ、ふ。下へはさげず、はなも一處にな
 つて、みな〜いづれこへ。屋樓成就目出たい〜。いづれも御たち。

此處屋樓のせり出し魚蝦蟹、みな〜ふたひを下る。

「地唱曲」【小生】水の中央一座の樓臺、十二のらんかん、三千のまがりらうか、蓬萊山も遠からず。蒼々たる
 海上は、これありひめのはた織處、ひこぼしの牛かひ原にも似たり。いづれ橋をかけてまわらせう。杖を擲
 出せば、長生し
 と成すは、長生し

「地唱曲」【生】うたひ出端。ふたひ上る間それがしは柳毅と申すもの、張伯騰にわかれてより、さるふありて、こ
 の東海にはからずまよひ、いぢまう、このあやなるひし魔もこもひゆ、か〜いぢまうと存ずれば地主にと
 められ、こことまづかな旅やどり、けふは幸、日よりよし、小のうたは留主をさせ、かやうに唯ひとり、はまばた
 にきたり、かう見はらした所は、まためつたものでござる。うしほの音もこ〜入出て聞けば、氣がびつびつとす
 る。ふたひ下る。【旦】【小旦】【丑】「地唱曲」【旦】うたひ出端【小旦】同【丑】うたひ出端【丑】【旦】おは姫君、

ふくま、さるしの玉左右の手に其儘めるは、浴水の濱の神女にてあつたか。此始終を歸て張伯藤にいひ聞すと
も、眞實の事とはおもふべし、しかし何にもせよ、このふくまと玉、しつかつと握りおぼせり、かへらう。下る、此
所まへ。

新刻役者綱目卷之一終

新刻役者綱目卷之二

○三ヶ津立役評

○松本幸四郎 二代

誹名 五粒

元祖松本小四郎は、元祿の始、若女形にて、同十二卯年より若立役、それより評判日々に増、出世ありて、實荒事に名を得、享保元年に、幸四郎と改め、江戸立役の大立者と成、河津、和藤内、あら岡、鬼王、金時の大出来殊に名高く、其外年毎の當り、中にも鬼王にてまうたんなど至て上手、享保十五戌の年三月廿五日に故人となられ、駒込榮松院に其まゐるしを殘す。今の幸四郎は養子にて、享保四亥のとし春、森田座へ松本七藏といふ子役にて出、分身あら岡の荒事が初ふたいなり。同十三年の頃は、娘形と成、それより七八年も過ぎ、上上の女形の部に入、同二十卯の年、市村座にて、二代目幸四郎と改、立役、それよりも上上の實悪なりしが、段々評よく、元文五は上上黒吉に至り、江戸實悪上手功者と呼ばれし市川宗三郎と列をわらそひ、誹名は、初は五粒といひ、一度海丸と改め、今また五粒と號す。以前幸四郎とよびし頃、大當りせし事あまた有。なかんづく禪司公曉の悪形より評判よく、河原崎にて早咲が死靈久米平内をぞかし、市村座へ歸りては、今若岸柳の大當り、又々々わんてつ、辰夜丸、工藤は度々。忠臣藏の定九郎、本藏、爲朝、熊坂、喜三太のあほう城之介の實事、せいらひ清兵衛、三庄太夫、此外とし毎の當り、夫より寶曆四年戌の冬、四代目市川團十郎と改、岡崎悪四郎にてまばらくの出端、大當り、此

時悴幸藏に、幸四郎の名を譲る。又土左衛門、傳吉、おはらさね藏をてかし、將門の大出来大當り、これより評書に白極とし、清玄の亡魂にて、かいつ女形にての所作、油や九平次、病氣工藤、荒五郎、茂兵衛の男作、恭ばん忠信、大見八幡之介、河津、丹波助太郎、三浦の文藏、松王、寺岡平右衛門、てのうら八兵衛、山掛太夫、景清は春毎につゝめ大あたり。明和四亥のとしよりは、大極上上吉にいたりて、當時江戸の大立者、位事よく誠に上手といふもくだ。此人の仕内には、至て感心する事あり。さすが養父海老藏の見立にて、市川の名跡を譲られしものとわり。然るに明和七寅のとし霜月より、實子幸四郎を、五代目團十郎と名乗らせ、其身は元の松本幸四郎に立歸りて、中むら座の勤、とから譽やうもなき名人、三ヶ津につゝく人なき大立物、立役實惡の差別なく、當時無双の名譽達人、それゆゑの惣巻頭。

○松本ノ系

元祖 本國下總國小見川産

○松本幸四郎

實荒事上手始の名小四郎

享保十五戌三月廿五日白魯單然直道居士

二代目養子

○松本幸四郎

始名七藏

三代目

○松本幸四郎

始は幸藏

弟子 松本秀十郎

松本大七
松本山吉

寶曆四戌霜月より

四代目市川團十郎と號明和七寅霜月より元の松本幸四郎に歸る

明和七寅霜月より市川團十郎と改名

松本松藏
松本豊藏

○中山新九郎

一

蝶

とつとむかしは松本嘉平次、一たん姉川の弟子とか、黒船の頭巾と草履下駄を受、後に一派をたて、中山と名乗、いゝ京大坂での老分、三ヶ津にて評を取、寛保二年より上上黒吉の大立者と成、寛延三年のとしは、伊勢へのかれ、始終の大當りし、其暮京都萬太夫座へ登り、顔見せに藥賣荷持久馬平と成、居合の相手にてをかしがらせ、後に後室の死霊つゝ、歌占くづしの所作、思ひの外和らかにておもしろいと、諸けんぶつの悦び大かたならず、立役の巻頭と成、間の替り玉藻前に、かづさの助、百性十作、二役とも評よく、寶曆二申の年顔見せより、子息文七に座元を勤させ、役行者の谷藏役大出来にて、二の替菅原織にぐわんてつ役をてかし、同霜月に大坂へ下り、三條定助座へ和歌山と苗氏を替出、鏡男相合枕に、米や仁左衛門と成、まうたんだできにて、先年姉川新四郎當た役を、少も姉川風なしに、自身の持まへにて出かされしは、さすが大立物程あると、其砌の評判にて、秋狂言戀女房に、入藏役は古今の大でき、翌戌のとしも同座をつとめ、二の替天の羽衣に、北川宗左衛門の大當り、同五亥の顔みせより、子息文七に座本を勤させ、同六子のとし、元の中山を名のり、會根崎新地芝居淺尾元五郎座へ出、景清役よろしく、同七丑の年は、大松曲助座へすみ、二の替天竺徳兵衛の大あたり、寅のとしは、姉川座にて、間の替姫小松にらげんと成、鬼界が島の物語をせらるゝ間は、詞にのべられぬ大でき、二の替毀廓曙に、三浦道寸、百性兵作二役をてかし、お上上吉と成、同卯の年三十石燈始に、花まけんぼうの腹切大出来に

て、同辰のとし、戀女房の定之進役評よく、同十二巳の年の二の替藤太郎の當りより、極上上吉にいたり、同十二年の顔見せ鎌倉鑑に、肥後の守高安と成、ひはん人實悪の仕内は、三好長慶このかたの評ばんにて、續いて明和四年まで、大坂勤にて、其暮子息文七と一所に、京市山助五郎座へ登られしが、いせん程に花くしき事もなかりしが、信仰記のせざらば、さすが功者の程を見せ、二の替より功上上吉と考るし、其暮すぐに大坂へ下り、他人座、同七は藤松座、今年はお林舊功の古兵なれど、重る年には立つかれぬさんねん、どうぞ人魚でもまゐつて、今一しほわか〜となし、花く敷事が見たいと、諸見物の望みも理り〜。

○中山系

姉川新四郎弟子後中山ヲ立ル

○中山新九郎

兄

中山門十郎

養子

中山文七

弟

中山來助

子

中山與三郎

弟子餘たあれども舞臺を引たるは不記

右三人兄弟にて實は狂言作者松屋來介子なり

○尾上菊五郎

梅

幸

若女形名取尾上左門弟子にて、享保十五戌の冬、若衆形にて、京柳山座が初舞臺、夫より元文の頃、若女形と成、

寛保元年冬より、大坂の勤めにて、海老藏鳴神の時、雲のたえまにて名をあげ、同二戌の霜月、江戸市むら座へ初下り、いよく評判よく、時としては若衆形にても當、なかんづく糸賣藤五郎の若衆形大當り、女形にて、色深き仕立にてよく、上上吉と記し、寛延四の春、市村座にて、又く海老藏鳴神に、雲のたえまをてかし、いまだ女形の盛りなるに、寶曆二申の年霜月、市村座にて立役と成、千壽次郎の大でさなれども、初めての立役ゆゑに、上上白吉にて、同三年の春、いろは會我に二ノ宮判官をてかし、同七年は、中むら座にて顔みせ、頼朝の役よく、上上黒吉に進み、翌年の春、八幡三郎と、ひらのや徳兵衛のやつし大出来、明和三戌の九月、市村座にて、忠臣ぐらに、ゆらの介と、となせの女形、大々當りにて、是を名殘として、二十五年ふりにて上京し、山下市山合座へ出、顔出せ田原武者之助と成、出端は上下大小にて、後冠装束の公家すがた、先人品よろしく、其上仕内大でさにて、京中一統に請とり、大上上吉に成、同子の顔見せは、尾上座へ住、名古屋山三役、又々大當りにて、三の替に忠臣藏を出し、ゆらの助となせ二役、大く當りにて、由良の介役は、長十郎このかたとの評ばん、替りめ度毎に入を取、哥右衛門暇乞のがんりう島に、月本武者之助役、是はけしからぬ大出来なれども、時節あしく、世間の評は薄くありしが、上京のうちでの大でさ、同丑のとしは、中むら松代座へ出、二の替油屋庄九郎役をてかし、世話事はいかゞと沙汰ありしに、桂川心中の帯屋長右衛門役、大出来にて、見物に我ををらせ、江戸下り暇乞に、秋田城之介と成、二挺鼓を打、我子を身代りに立てんとする狂言にて、女房慶子にて兩人の大出来、今に云出すほどの大當り、諸見物名殘ををしみ、毎日の大入、誠に梅幸は仕合男にて、京の見物の氣に合ひ、九三年出勤の内、とかく何がさせて見たい、是をさせて見たいと、諸人の思ひ入つよく、京勤の狂言の中にも、物草の伴左衛門、一谷の六彌太、軍略の巻の常悅、千本櫻の狐忠信、梶原平三、北條の時頼、薄雪の蘭部兵衛、地藏の

五平次、菅原の菅添相松王、これらの役などは、うま過るの、いや何のかのと評もありしが、とかく入を取、諸見物の悦び、夫故京にては今にしたはれぬ。一體花ある仕内ゆゑ、舞臺賑やかなり。其うへいつとも、衣装花やかにてよし、然れ共此人舞臺好ゆゑ、人のせらるゝ所をも、おしのけてせらるゝやう成所有。されば時によりては見うごき所あり。扱去春の大伴ひたちのすけ座頭の仕内など甚大出来、此時女形にて、松風の所作、淨るりに合せ永くと致され、玄かも相手羽左衛門なり。大詰に似せ朝比奈、又は折としては、角かづら真赤にぬりての荒事、これらは稱すべき程の事なし。和實武道の一通は、古薪水古訥子の意味あつて、花實相對の大立もの。

○尾上系

尾上左門弟子
○尾上菊五郎

- 尾上菊三郎 — 舞臺をやめる
- 尾上新七
- 尾上松助
- 尾上民藏
- 尾上政藏
- 尾上叶介

菊五郎弟子筋
○尾上紋太郎

- 尾上久米助
- 同 尾上門三郎

○市川團藏 二代

市 紅

元祖團藏は、江戸根生、實荒事の立者、幼名市川團之介として、若衆形を勤、元祖市川團十郎弟子にて、父は松本四郎三郎と云。元祿十一寅の年、中ひら座にて團藏と改め、寶永五子のとし、森田座にて元服して立役と成、正徳五未の年、子細これあり、紋回如此付る。年々春は曾我五郎役にて大當りし、享保十六の冬、中村座にて十八年ふりにて團十郎と和陸と、のひ、一文字を抜て元の如く回を付、それより元文五申の春、五郎八が此世の名残となり、四月五日に空敷成る。今の團藏、其頃はいまだ團三郎といひし時にて、養父團藏病氣に付、替り役を勤しなり、幼名は松太郎とて、木挽丁又兵衛といふ人の子にして、狂言作者坂東田助養子と成、坂東次郎三郎と名乗、それより元祖團藏弟子と成て、市川次郎三と名乗、元文四未の冬、養子と成て市川團三郎、同五申の冬、團藏と改名、此頃は、いまだ上上と記し、延享元子の年、大坂へ登り、上上吉に成、寛延元辰の年、京へ登り、段々との出世、寶曆始の比より上上黒吉と成、いよく評判よく、寶曆十一辛巳の冬、十八年ふりにて江戸森田座へ下り、青砥左衛門にて大當り、それより三座を勤め、明和六丑の年は、大上上吉に進み、同七年休、同霜月より中ひら座へ出、今江戸の大立者、男小がらなれども、一たい海老藏の藝風ありて、三ヶ津修行の功者、玄かし事に寄ては、餘り氣持すきて、こせつく所あり。とかく大立ものはすらくと大様に有たき物なり。當時市川流の藝風、武道事の達人、何方へ出しても動かぬ座がしら。

○市川系

元祖團十郎弟子

市川團藏

幼名團之助

養子

市川團藏

幼名松太郎

初ノ名坂東次郎三郎

弟

市川團三郎

弟子

市川齋藏

市川友藏

市川章藏

市川綾藏

市川時藏

市川岸藏

中山文七

由男

中山與三郎として、女形のむかしを思へば、此人ほどめきくと仕上ケ、今三ヶ津に一二を争ふ大立者になられし人は、近來稀なり。實は松屋來助といふ狂言作者の子にして、中山新九郎養子と成、寛延元の冬より、角前髪にて京へ出られ、寶曆元未の顔見せは、京都半太夫座をつとめ、親父新九郎と一所に、與勘平くづしの幕にて評よく、上上にて、玉藻前の非人大六より、めつきりと沙汰よく、上上吉に成、同二酉の年は、初座本を勤め、役行者に大伴王子、山がみ次郎二役、大當りにて、上上吉に進み、二の替菅原織に、今川仲秋と成、これは先年、嵐新

平役ゆゑ、持まへに合ず、さたも勝れざりし故、上上白吉にまゐりし、同三酉の顔みせ、大坂三條定介座へ、親新九郎と一所に下り、相合枕に、放駒長吉役、評よく元の位に直り、同四も同座にて、二のかはり天の羽衣に、今川仲秋、あほう與五郎をてかし、同五和歌山と苗氏を改め、初座本を勤、上上吉、同六子の顔見せは、坂田豊三郎座へ住、元の中山と名乗、せいすゐ紀の作り替にて、樋口次郎役を、明神丸富藏にしての大あたり、翌丑の年は、大松座、寅の年は、姉川新四郎座へ住み、次第に評判よく、同九卯の顔見せより、座本を勤め、川太郎役にて當りを取、二の替三十石は、神道源八、つめながや權九郎二役をてかし、上上吉、同十巳のかは見せに、あみだ如來と成、大に評を取、上上吉、同二の替天狗齋に、キノ平、大江廣元二役よろしく、上上黒吉と成、同十二年の顔みせ、鎌倉鑑に、實は義經なれど、奴ほど内となりての仕内よく、いろは行列、鹽谷判官、秋替り磯馴松太郎七次當り、同十三年の年、双蝶々に濡髪長五郎と成、大く當りにて大上上吉と進み、和田合戦あさりの與市、菅原に松王、小栗に横山太郎、入重霞にふく清、當り續けゆゑ、同十四年申の顔みせより、赤上上吉とのぼり、二の替に先年親父新九郎役の天の羽衣、北川宗左衛門役をせられまが、實惡の仕内ゆゑ、それほどにはつきりとはせざりしをかさね、與右衛門、非人敵討にて入を取、明和二酉の顔みせより、繰上上吉の大立もの、大坂中にて、文七をひいさせぬものは、あほうのやうに思はるゝ位のはつかう成しが、何やら少し障有て、其夏より翌成の年の夏まで出勤なく、四月十五日より、夏祭を出し、此度より出勤との看板、何がひいさきの文七を一年も見ずに居たゆゑ、大坂三郷町中、上を下へかへし、初日よりえいたうくの大入、すなはち團七九郎兵衛役を勤め、諸名物の悦び、最負連中は、地ぞくにて佛に逢うたる心地、其暮京上り暇乞として、八月廿八日より忠臣藏を出し、由良の助を勤られ、もそつと年若にて、人品がとり合ぬなど、沙汰ありしが、何かなしの大入にて、爪も立たれぬ程の

釣亭云、諸名物の名は、見の誤り。

賑はひ、次第に立身して評判高く、上手になられし事、京にても聞及び、難波へ下らぬ人は待かねて、はやく見たいと年々の噂の所へ、同四亥のかほみせに、京山下市山合座本の芝居へとられしが、餘り前邊の評強く、殊に狂言もよろしからざる故にて有しか、さほど評ばんもほつこりとなかりしゆゑ、繼はちと過、上てもあるとの評もあれども、一體が上手成所あつて、評者見究め置し位の事ゆゑ、やはり持こたへて白極、三の替、物ぐさ太郎評よく、菊水の巻のまりがせしうや役は、大によろしく、出入湊黒船、一谷の熊谷などは、さのみ評もなく、同五子の顔見せも、同座に居なりにて、信仰記の東吉、をの、道風も、どつといふ程の事もなく、益替りに、團七を出し入を取、大坂下り名残に、平惟茂四段目を出し、則これもち役に、二挺鼓を打、大入にて首尾よく暇乞勤め、其暮霜月大坂三升他人座へ出、二の替、又ぬれ髪長五郎を出され、仕内は至極いせんに替らず面白けれ共、西の芝居にも双蝶々にて、嵐雛介若女形にて、濡髪を勤しゆゑ、先珍らしく評よく、このたびは前度程入なく、扱々残念な事、同七寅の年は、子息中山興三郎に座本をさせて出勤、京上りよりこのかた、前かた程の當りもなく、始終七八分の出来、是はどうした拍子な事やら、合點がいかにぬと諸方の取ざた、全體が上手にて、何役でも自由に成、其うへ物により、をかしい事もでき、まうたん事は別してよく、江戸へ下られ、鬼王役などは、きつと當る事は受合、此年配にて、此人ほど立身せられし人、今三ヶ津になし、第一男大がらにて色白く、大芝居の大たてものとは、赤子に見せても確成こつがら、其上平生心がけよく、假にも野卑なる業を好まず、書は唐やうを學び、さりとは見事なること。今年は何とした廻り合せやらお休、占者もこれは合點がゆかぬとの取ざた、何方へ出られても、きつとした座がしらく。

○中村少長

江戸名物男、元祖七三郎は、和事の名人、始は若女形にて、後に江戸の立役の巻頭と成、其頃京都には、山下半左衛門、坂田藤十郎につゞきての名譽の達人、ことにけいせい淺間がだけ狂言の始にして、三ヶ津に名高く、中むら一流の丹前とて、今に傳へ、又名古屋山三は、家の藝とす、寶永五戊子年二月三日死去、法名心鏡院杏實日映と、本所報恩寺中にその名を残す。今の少長は、古七三郎養子にして、實は明石清三郎と云人の子なり。寶永八卯の春、中村座、先例扇曾我に、中村七三郎とて子役にて、頼家の役が初ふたい、元來中むら座由緒ある人なれば、同座にて段々との立身、享保二十一年春、初て曾我十郎役を勤め、それより年々春は十郎役にて當りを取、元文元辰の霜月より、河原崎座へすみ、同二年も同座の勤、夫より中村座へ歸り、寛保元酉の霜月より、又河原崎座、同二年も居なり、扱寶曆元霜月より、傳九郎と共に森田座へ出、同七丑の霜月は、市村座の勤、是養父の藝を受継て、和事の上手、殊に十郎役の一の筆なりしが、寶曆九卯の春まで勤、今は若手へ譲り、實事さかり、年功程あつて、氣持、又は衣裳の好みなど格別なり。位事よく、中にも菅原傳授の菅丞相は、外に比するものなし。延享四年より、四度勤られ評判よく、今眞上上吉と記し、去寅の霜月より、孫七之介に七三郎の名跡をゆづり、其身は俳名の少長と替名しての出勤、京大坂の舞臺をふまず、江戸はへぬきの和事の達人。

○中村ノ系

名物男 和事名人

○中村七三郎

母は二代目勘三郎女養子 二代目
誹名少長と號す

中村七三郎

實は日映妻甥
明石清三郎男

寶永五子二月三日心鏡院香實日映

正徳四年初舞臺
明和七寅冬より少長と呼

三代目

○中村七三郎

始名七之介
明和七寅年改時二十七才
誹名少長

○中村友十郎

弟子 始七太郎

江戸道外名人

○仙國彦助

元祖七三郎門人

仙國彦助弟子

田川彦十郎

始は仙國彦十郎
今の坂田半五郎實父

元文五四月廿六日諸法院宗真日實

古

○中村助五郎

幼名龜太郎 實子
彦助子 魚樂ト云

中村助五郎

始は仙國助次子

仙國助次

二代目ノ少長弟子
寶曆十三未正月十三日

勇猛院魚樂日涼

右魚樂弟子あまたあれども
舞臺を引たるは略す

弟子

○中村助三

○中村吉平次

○中村民十郎

○三桝大五郎

一

光

よし澤藏之助といひし、若衆形のむかしを思へば、きつゝ面影の替りやう、元文五年が京小六座へ立役にてい
で、上上に記され、寛保二年も京坂田座、其幕大坂へくだり、岩井座の敵役、延享元年より實悪に直り、上上書に
進み、それより立役と成、日に増て評よく、寛延四二の替、十藏座にて、名古屋山三、浮世又平二役を勤め、姉川
の若き時に其儘とのさたにて上上書、寶曆二も同座のつとめ、翌西成兩年座本を勤、同五亥のときは、三右衛門
座へすみ、ちと評もめいりたる所を、二の替千貫樋に、すまふ取の大井川文平と、くつわや萬八二役をてかし、
評を持直し、同六子のとし、二の替、北濱名物男に、うばの吉兵衛に成、ねつの四郎右衛門に、藤川平九郎と出合
の大出来、いかさま色白にして男大きく、男作事は、打てつけたこつから、同七丑のかほみせは、久しぶりにて、
京澤村國太郎座へ上り、餘りどつといふ評もなかりしが、翌とらの年、信仰記のせさい役を當、其幕大坂へ下
り、中山座の實悪と成、二の替三十石に、川浦ずのけん、關ぐち平太二役をてかし、同十一年も同座をつと
められ、實悪されめの時節にて、立役よりはるかによとの評にて有しを、翌午の年より、立役にもどり、明和
三年迄打つゞき、座本を勤られ、島原小蝶に、鍋釜やの役をてかされ、世話ごとは去とは御功者、きつと舞臺の
功がみえます。同四亥の顔見せより、歌右衛門座へ出、二の替より上上吉と成ぬ。翌五子のかほみせより、子息
他人に座本を勤させ、同六も同座、同七八は與三郎座へすみ、秋の角力の狂言に、文七と二人双べた時は、どう
もいへぬ立物、此狂言の中途より、名古屋へくだり大きに評を取、今年是小川座の座がしら、二の替は、めづら
しく女形糸姫と成、大酒をのみあはれる仕内、評よくお手柄く。子息他人段く、評判よく有しに、病氣つか

れ、去明和七卯の霜月廿七日に此世をさらしは、さぞお力落し。それは格別、何役をさせても、あふなげなく、今難波津での大立者く。

○三樹ノ系

芳澤玉妻弟子筋

○三樹大五郎

始ノ名芳澤藏之助

後ニ三樹を立る

○三樹他人

明和七寅の十一月廿七日死去

弟
三樹官藏

弟子
三樹徳次郎

○櫻山四良三郎

南

雅

親は櫻山小太夫とて、享保年中の立者、其子竹松、今の四郎三なり。一頃伯父庄左衛門の名をつぎ、伊勢、または宮島を修行し、其後四郎三郎と改め、次第に立身して、上上吉に進み、寛延四未の顔みせ、京神山座へ出、寶曆二申の顔見せは、嵐座へ出、いく世併や彌介、ゆき助之進、二役大出来、同三も同座を勤め、同四戌の年、二の替、けいせい眞葛原に、小早川いつとう腹切、山名氏清二役をてかし、夫より打續き京勤にて、同十辰の顔見せ、大坂嵐吉三郎座へ、十三年ふりにて下り、一年つとめ、又京へ上り、今年までの出勤、親仁形などは、當時外に仕手はなき御功者、近年折ふしは、實悪を勤、又作り方もお手傳、次第にお年の寄るが、殘心に存ます。當時一蝶につ

いではお年かさ、舊功の達人捨られぬお人じやぞ。

○坂田藤十郎 三代

車

漣

そもく元祖坂田藤十郎は、伎道の開山、和事師の始と呼で、三ヶ津に聞えし名人なり。わけて夕ぎりの狂言に、ふじや伊左衛門の傾情買に名高く、耳塵集に詳なり。寶永六年霜月朔日に終る。重譽一室信士と改名す。其後正徳の始め、二代目藤十郎あり。是元祖藤十郎弟分にて、世に伏見藤十郎といふ。又元祖藤十郎甥坂田兵四郎終屋兵四郎子これは小歌の名人にて、世に名高く、今藤十郎は、此兵四郎より請繼き、元は三條勘太郎弟子にて、三條半彌とて若衆形、一度役者を止め、又享保十五戌の年冬より、坂田定四郎と改實悪、元文四未の冬より、坂田藤十郎と改名、夫より段々立身して、寶曆二申の冬、大阪大五郎座の勤、此時上上音なりしが、同九年卯の春より、江戸中村座へ出、祐信、八百屋久兵衛をてかし、同十一巳の冬迄森田座をつとめ、夫より旅へ出られ、明和元年冬、上京にて實悪、同四亥の冬、江戸市村座へ下り、同五の秋、石井宇内の大出来、其冬よりついで中村座に居なり、三ヶ津修行はどあつて功者、いつにてもあしき事なし。まかれども當時上上音、今少にて、吉の黒くならぬは花なきゆゑなり。

○富澤辰十郎

連

袖

富澤の苗氏の事は、大全に委し、よつて略す、此人始は享保十二年霜月、大坂前の澤村音右衛門座へ、色子にて出、とみ澤千代之介弟子にて、富澤辰之助とて、元文三年の年冬、女形にて、森田座へ下り、同四年未の冬より、

色悪と成、元文五申の年冬より、辰十郎に改、立役、古坂東彦三郎の風あり。狂言引まめてせらるゝゆゑ、舞臺ま
まる事至て功者なれども、これも花うすし。よつて上上吉にて藤十郎と同座同格たるべし。

○坂東豊三郎

東朝

元祖坂東彦三郎弟子にて、元文三年の年までは、京都萬太夫座の若女形の立ものにて、其暮江戸へ下り、暇乞狂
言に立變にて、立役と女形の仕内大できにて、そのとき京中の取ざたには、立役も大分よいとの評判、元文四よ
り江戸にて若女形、五六迄首尾よく勤、寛保二戌の年大坂へ上り、初めて立役と成、古市山助五郎の面影あると
て、次第に評よく上上吉、寶曆八とりの顔見せに、京染松澤村合座へ、久しぶりにて上り、間の替信仰記に信長
と成、花子の段大出来にて、翌卯の年、大友真鳥に庄屋松兵衛をどかし、辰のときは休にて、巳のとし二の替、け
いせい大内山に、みの尾新兵衛役をどかされ、上上吉まで進み、午の年の暮、大坂中山文七座へ下り、双蝶々に、
長五郎母の役評よく、いぜんの女形の面影あつて、どうもいへぬとの取ざた、其後明和六丑の年迄出勤なりし
が、一兩年はお休み、せりふがちやはくしてやかましの何のといへど、舞臺功がきつと見えなすく。

新刻役者綱目卷之二終

新刻役者綱目卷之三

○三ヶ津立役評

○市川團十郎 五代

三三 升

東夷南蠻、北狄西戎、四夷八荒、天地乾坤の間に、有べき人のまらざらんや。市川氏の藝名世に鳴る事、古今未曾
有の譽れ、比類なき伎道の稀ものなり。元祖市川團十郎は、荒事の開山、江戸の名物、延寶、天和、貞享元祿の間
に、その名をとろろかし、上京にても譽れあり。元祿十七年二月十七日に、極樂のふたいへ行かれ、改名して門
譽入室覺榮と號し、その子九藏、同十年、中村座へ十歳にて初舞臺、夫より同十七年の秋、二代目團十郎と改、角
前邊の荒事、夫より父の勤し伎藝を受継ぎ、次第に評判まし、正徳四年の年は、上上黒吉、享保の始より、江戸立
役の巻頭に居る、同四年より、極上上吉と評し、享保二十年の冬は、中むら座にて、親父團十郎の幼名を壽きて、
海老藏と改名、此時養子升五郎に、團十郎の名を譲り、是を三代目團十郎といふ。實は古三升や助十郎實子、い
たつて多藝なる人、段々立身にて當りをとられき、掛海老藏、養子團十郎をつれし、寛保元年の冬より大阪へ登
り鳴神にては例なき大當り、同二戌の冬、江戸へ歸り、此時極上上大吉無類と記ぬ。昔しの名人と聞えし坂田、
山下、江戸にては中村、市川、これらも皆上上吉をつかさとし、至極稀成事なりしに、斯の如くの位付は、栢庭の
みなり。又三代目團十郎は、父栢庭とともに大阪へ登り、病氣にて江戸へ歸りしが、世を早く去る、さて栢庭は、

不動の寄
は、奇の
誤り

成田山のをし子として、則家名も成田屋十兵衛と號、ゆゑに不動の狂言には、精神をうつし、名を後代に顯せしもひとへに瑞鳳うたがひなし。右不動の寄なる事は、歌舞伎事始に委し。すでに年毎の大當り、顔見せは角かづらのまばらく、四天王の四役など、春は五郎の荒事、又は十郎の和事、やつしにてのもぐり賣、ういろう賣は、一世のうち五度、助六三度、矢の根五郎四度、父より受繼し、鳴かみ五度の當り、不破伴左衛門、其外同じ狂言にて譽れある事數多たり、ひとつとして化矢なく、大出来大當り、かぞふるにいとまわらず。其上俳道に志深く、寶齋の門業と成りて、三升といふ。又才牛齋と呼、其のち栢蓮と號。誠に藝道に玄妙なる事、世々の書に顯はしたりといへども、猶また後代に其徳を殘さんがため、荒増をこゝにゑるす。時に寶曆八寅の年、一世一代として鐵五郎を勤し所、勢ひ若盛りのごとくにして、大當り大人なりしが、同九月廿四日、行年七十二才にて、寂光の都へ出立。法興栢蓮隨性信士と、芝あかん堂に其ゑるしを殘す。扱又習松本幸四郎目、寶曆四戌の顔見せより、四代目團十郎と改名し、市川の藝名を受繼ぎ、鳴神助六をでかし、年毎に春は景清の大あたりし、既に大極上上吉の大立もの、至極の上手にて、市川の流れをくみし人々に稀者あること、誠に奇異といふべし、委くは幸四郎評の所に述べ。今五代目團十郎は、四代目團十郎實子にて、古栢蓮孫なり。寶曆四戌の春、中村座へ始て出、松本幸藏として、子役をつとめ、同年冬より、實父の名を繼て、三代目松本幸四郎と改名、寶曆十一年の頃より實惡と成、段々との立身、父の藝風をよくうつし、時としては實事をも勤、當りを取、明和七寅の霜月、父團十郎は、ふた、び松本氏に立歸り此時より市川團十郎の名を相續し、元祖より傳へし、角かづら柿の素袍大太刀にてのまばらく、二役尾形の三郎大でき、全體仕うちすなほにして氣持よく、藝道に心懸深く、故に改名より仕うち別りし事あきらかなり。此上大立物にならるべき氣さし有、頼もしく。

元祖より藝名世に高く、江戸名物と稱し、又五代相續する事、其道の譽れ、其上市川團十郎の名は、伎家にては至て重き名なり。故に年功上達の人より上に列す。

○市川系

子
市川久藏

本國下總國市川村ノ出
元祖荒事開山
○市川團十郎
幼名海老藏
俳名才牛
元祿十七二月十九日門譽入室覺榮

二代目實子
○市川海老藏
幼名九藏
初號團十郎
寶曆八月廿四日
法興栢蓮隨性

三代目養子早世
○市川團十郎
寛保三三月廿七日
隨譽覺應

四代目實
市川團十郎
初松本幸四郎
後市川團十郎
明和七再改松本幸四郎

五代目子
市川團十郎
幼名幸藏
初號松本幸四郎
明和七寅冬團十郎と改

○女
今團十郎
妻

弟子

○市川高麗藏
幼名瀬川金吾
錦治
後市川武十郎
○染五郎

○市川純藏

○市川和哥藏
初名
鳴川太十郎

○市川八百藏
初中村傳藏寶曆十三
古八百藏名跡をつぐ

○市川伊達藏
始花川市之丞
子
市川三木藏

弟子

○市川染五郎
初名
松兵衛

子
市川富三

○市川門之助 始胤中秀松 後市川辨藏

市川常五郎

○市川照右衛門 初名入藏

○市川小團次 初名三次

○市川平藏 篠塚浦右衛門子

○市川辰藏

○市川龜吉

○岩井半四郎 初松本長松 後七藏

明和二酉冬 半四郎と改傳おくニ委シ

○市川染藏

○市川春藏

古市川栢庭門人

○市川八百藏 實松島茂平次子 始名吉三郎

寶曆九卯十月十九日全冬成果

○市川團五郎

○市川雷藏 初嵐玉栢 後市川升藏

子 市川雷藏 初名ひな藏

弟子 ○市川綱藏

此外栢庭門人のまたあり 役者大全に委こゝに略す

○嵐三五郎 二代

雷子

親三五郎は、三代目嵐三右衛門弟子にて、始は竹田出にて、享保の初より、大阪を勤、其後京へ上り、同十一年の冬、江戸市村座へ下り、後面大出来にて、それより三年の間勤め、大當りして、同十三申の霜月、京万菊座へ登られ、同十五大阪へ歸り、元文四年は、座本を勤め、やつし事の上手と呼れ最負つよく、上上黒吉の立者なりしが、元文未の七月十二日、本譽良馨と改名せられ、其年今の三五郎幼くして、霜月三日より、大坂あやめ座にて、親三五郎の名を繼て、子役にて出、それより若衆形と成、寶曆元未の顔見せより、八枚の内へ入、大坂中村十藏座へ、若立役として出、同五亥の顔みせより、元服して、中山文七座へ出、やつし形と成、上上と云るされ、同七丑のかほみせより、京染松次郎座へ登り、上上にて、二の替に、へくや與市といふ前髪のおるかしき仕内にて、久米太郎と心中して腹切狂言をてかし、上上と成、同八寅のとし、打續評よく上上、同九卯の年は、京にて座本を勤、同辰の年は、澤むら座にて、浮洲岩にまげひら役をてかし、次第にひいきつよく、ちと藝にたるみ付いたる所を、蛭小嶋に、さなだ與市役を當、其霜月、大阪三升大五郎座へ下り、上上と成、同十三未の年、二の替正平織に、浮世之助と成、やつし武道の仕内、大きによろしく、同申の年、極彩色清十郎、兵介、二役とも大出来にて、安達原の八幡太郎、そ、けず落付てよいとの評判にて、明和四亥のとし迄打つ、大阪を勤、同五子の顔みせより、京尾上座へ登り、同六も同座にて、中途より名古屋へ下り、千本櫻に鮎や彌介、小金五、忠信、狐の四役大當りをして、大いに評を取、同七寅の年、京へ歸り、蘭奢侍の助市役よく、庄屋可兵衛と成、うかれ座頭所作よろしく、江戸下り暇乞に、ふじや伊左衛門と成、ゆかりの月大々當りにて、同冬、江戸市むら座へ、初下り、

り大評判にて、男つきよく、小手きにて、和かみ有て、所作事宜しく、やつし事よく、武道とゆるに出来、藝風上手筋にて、親まさりの出来もの。

○嵐系

三代目嵐三衛門弟子

古

○嵐三五郎

二代目

○嵐三五郎

弟子

○嵐七五郎

子

○嵐七五郎

弟子

○嵐金妻

○嵐歌仙 初歌五郎と云

○嵐重の井 初山下歌川と云

○嵐三次郎

弟
○嵐秀五郎

○藤川八藏

八

甫

父藤川平九郎は、中興實悪の随一、極上上吉の大立もの、三ヶ津にて大當りせし事、かぞふるにいとまわらず。寶曆二申の顔みせには、江戸下りに極まり、京出勤なりしが、名残狂言を大坂へ下り、中村歌右衛門座にて、九

月十一日より始め、先年京にて致されし鏡磨と、左甚五郎を出し、十月十日まで、三十日が間大入にて、棧敷も初日の出ぬ先に、さつはりと賣れ切、やれ平九郎が京から下つて暇乞をすると、大坂中上下ともさわぎ出し、冬籠する時分に、道頓堀は花の春の賑ひを見せての大當り、此内十月朔日より、先年京でせし、無間の鐘に替る、夫より京都半太夫座へ戻り、切狂言に、かの鏡とぎを出し、十二日より十六日迄、五日が間大入にて、兩津とも暇乞しゆびよくつとめ、七年ふりにて、江戸中村座へ下り、反魂丹うりにて評を取、春は左甚五郎にて當、暇乞に物草太郎をでかし一年勤、同三酉の顔みせに、大坂三升大五郎座へ登り、九月に又物ぐさを出されしが、入かゝなくて殘心、同四戌のかほみせは、市村さの八座へ出、お家のはんごん丹うりにて、切に歌占くづしの所作よく、同五亥のときは嵐三右衛門座へすみ、二の替道中千貫樋に、吉岡けんばらの實悪、古中村十藏と出合にて大々當り、秋は非人敵討に、治郎右衛門大できにて、同六七、姉川大吉座を勤、同八顔みせに、京中村久米太郎座へ上り、又ははんごん丹賣を出され、餘り度々ゆゑなんのかのと沙汰もありしが、いつとも見物を面白がらす名人のまるしにて、東鑑に朝ひなのやくは、餘人の及ぶ所にわらず。秋は非人敵討を出し、京にても大きに受とり、同九卯の顔みせは、染松澤ひら合座へ出、崇禎寺馬場の木曾兵衛、真鳥の橋、主計などは、いふもくだなる面白さ、同十辰の顔みせに、大坂嵐吉三郎座へ下り、同十一巳の年は、姉川新四郎座へ出、夏祭の團七九郎兵衛役を、此世のいとま乞として、七月四日に、行年六十四歳にて、心了院玄性日縁と改名して、名のみ残す、今の八藏は、初名八太郎といひ、寶曆三酉のかほみせに、大坂三升大五郎座へ敵役にて出られ、上上寺にゑるす。第一男大がらにて色白く、顔ににがみありて、去とはよい男じやと評判つよく、五年が間大坂を勤、同八寅の顔みせに、親逸風と同道にて、京中村久米太郎座へ初登り評よく、信仰記の松永大膳役よろしく、同九も京勤にて、其幕大坂吉

三郎座へ下り、立役と成、顔みせに、大角前髪すまみの朝比奈と成、またの、五郎と角力物語の仕内より、次第に評よく、同十一巳の年には、姉川座へ出、親逸風いづし死後、團七の替り役を勤、めつさりと評判よく、夫より大坂中は、やれ八藏やちやうくと、ひいさつよく、翌午のときは、大五郎座にて上上言、同未の年は、中山座へ出、上上言にて、二の替双蝶ふたてつにて長吉と成、長五郎に中山文七、出合の大當りをしてよりこのかたは、江戸にての十町魚樂といふ格にて、それより文七とは相役者にて、出合狂言にては、毎度當りをと、同申酉も同座の勤にて、二の替より上上言にまゐるし、次第に名を揚、同子の顔みせより、三升他人座へすみ、上上言となり、同丑の年は、山下八百藏座へ出、又ふたつ蝶てふくの長吉を勤上上言、此時の濡髪ぬかみは、嵐ひな介にて、は大當り、寅の年は、中山與三郎座にて、二の替山中鹿之助しかと成、我子の腹はらを截割ちりりてのまうたんをでかし、秋の角力すまみの狂言に、文七、大五郎、八藏とならべた時の見事さ、さつと立物のまゐるし見え、花やかなことの天上く、大坂中のひいさ役者にて、いつでもちよつと顔さへ出さる、と見物の悦び、いかなる故か今年はお休み、諸人の力おとし、なみ大ていの事ならず、唯出勤を待のみ。

○藤川系

○藤川武左衛門

○女 江戸坂東又九郎妻

○藤川平九郎

寶曆十一巳七月四日死
心了院立性日縁
行年六十四才

○藤川八藏

- 弟子
- 藤川金十郎
- 藤川乙右衛門
- 藤川十郎兵衛
- 藤川龜の井

○小川吉太郎

英子

はりあひのよい紙燕いかのぼりと、小川氏の藝とが同じ事にて、どこまであがらうもしれぬ、近年掘出しのやつし形なり。寶曆元未の顔みせに、大坂岩田染松座の色子にて、同九卯の年迄若衆形を勤、同十辰の年、角邊すみかべと成上上言と記され、翌巳の顔見せに、姉川新四郎座へ、若立役として看板かんばんは出たれど、出勤なく、其秋京北野下の森芝居、嵐此松座へ始て上られしが、はじめのほどは、さのみ評もなく、同十二午の顔みせに、四條さの川若松座へ出、くれは縁之介みどりと成、切に舟辨慶たぐの太鼓たいこを打ての仕内、評よく上上と成、未の年は、中むら千藏座、段々と評判が出、同申のとし、澤村國太郎座へすみ、業平之介役をでかし、上上言と成、富十郎と同座にて、始終相手に引まわされての修行にて、ぐつと藝をあげ、戀女房こひめの右馬之助うまを大きにでかし、明和二酉の顔みせには上上言、替り度毎たびに只よしくとの沙汰にて、二の替にあほう三太郎の大出来にて上上言に成、是迄に登られてより、あほう役を三

度勤られしが、一々仕様替り氣持よく、秋狂言磯馴松に、おなべの役に大當りし、二やく高松左衛門はすぐれず、いよくやつしの上手と、諸人のなつとくにて、同三戌の顔見せに、初座本を勤、二の替比叡山に、田原秀次郎といふ若殿に成、追劔の弟子と成、稽古する仕内にて評よく、二役下人喜六と成、此役は在郷の伴義なる角前髪の内にて、おほうでなき仕様、わかりての大出来にて、何をさせても只よいと評ばんにて、同四亥の顔みせは、山中市山合座へ出、上上音に進み、同五子の年も、市山座へすみ、益評よく、評書にも嵐三五郎より上に立、秋狂言忠臣講釋に、おくみの女形にて琴を弾仕内、評よろしく、同六丑の年益替りに、粹の喜六と成、當世なる事をいひならべては至つたやつといふせりふにて、大に當り、其暮霜月、大坂中山興三郎座へ下り、顔みせに千本櫻の狐忠信の格の仕うちを出されしが、京ほどには評も勝れず、いかと存た所に、次第に上手になられし事、見物のみこみ、評判出、上上音に進み、今年は座本を勤られ、珍重く。全體此人の藝、京の風に叶ひ、何をせられても、わるい事なく、一々當りを取、替り目毎にわるいといふさたなく、近頃にては染松七三郎の死後、是ほどのやつしなし。元祿年中名人と諸人に賞せられし、元祖坂田藤十郎より、けいせい買の狂言に、着せし紙子を譲り受し、大和山甚左衛門といへる優形、延寶五年に生れ、元祿二年に若衆形を勤、同八年は十九歳にて立役と成、寶永正徳中に、上手と成、享保の初に名人と稱し、其のち此大和山ほどの人なし。其子甚左衛門といへる、やつし形能せられたれども、元祖甚左衛門程に優美になかりし。まかるに此小川氏の仕内せりふの程、拍子を見て見るに、生立の様子にて、自己の才智を出さず、ゆつたりと、何やら今少し見たらぬ様成仕やうにて、元祖の大和山氏の御ありて、當時若殿役は、先此人にといひました。

○市川高麗藏

錦 江

延享二かほみせより、中村座へ色子にて出、古瀬川菊之丞の弟子にて、瀬川金吾といひしなり。寛延三の頃より、若衆形と成、それより上京して、寶曆四戌の冬、江戸市村座へ瀬川錦次とて立役にて下り、此時上上とまゐりし、それより寶曆七年丑の冬より、中むら座にて、四代目團十郎弟子と成、市川武十郎と改、同八寅の春は、女粹の女郎買をてかし、同秋青柳硯のより風より、段々評判よく、同冬上京、同十辰の冬、森田座へ下り、同十二年の春は、中村座にて、初ての十郎、た、みや伊八をてかし、上上士に成、同十三未の春より、染五郎と名乗、同年顔みせより、又々高麗藏と改名し、明和二顔みせの評には、上上白吉と成、明和六丑の春、中村座にて、八幡三郎にて、本名鬼王の大出来、一體やはらかにて色ある仕うち、當時諸見物のうれしが人なり。明和七寅の冬は、上上音に至り、上上黒吉にても、少しもふそくなき當時のき、物く。

○江戸坂京右衛門

正 吉

古中村吉右衛門弟子にて、初めは中村正藏とて、寛延三年の年は、京の中芝居へ出、評ばんを取、寶曆二申の顔みせより、京嵐三右衛門座が、大芝居の初ふたいにて、上上とまゐるされ、同三酉のとしも、同座の勤、其あくとしは、いかしてか出勤なく、同五亥の顔みせより、染松松次郎座へ出、上上音と成、打つゝき京勤にて、評よく有しが、師匠吉右衛門、中村十藏の名苗氏とも、小倉山文太郎へ譲りしゆゑ、寶曆十辰の顔みせより、名苗氏とも改め、江戸坂京右衛門と名乗、京嵐維助座へ出、同十二年のとし、佐野川若松座にて、二の替に鳥眼のけんしの

役をでかし、ぐつと評判出、翌年の夏狂言に、嵐小六女非人を勤め、大きに評判ありし時、さらしやの役をでかし、一年中當つゝけ、此二三年次第に藝上達ゆゑ、寶曆十四申のかほみせには、上上書にすゝみ、問の替出入湊に黒舟忠右衛門をよく致され、段々に大立者と成、脇目もふらず京の舞臺を勤、明和四年、顔みせに初座本を勤られしに、をしい事は座組宜からず、顔見せ九日興行にて休み、春は琅太鼓曉櫻といふ外題看板迄出たれど、つひに其年はやぐら太鼓の音も聞えなんだは、去とは残念。同五巳の年、名古屋へ下り、評判を取、同六丑の顔みせより、師匠吉右衛門と和順に成、京尾上久米介座へ一所に住、顔見せは座附斗出勤ゆゑ、見物のさんねんがり大かたならず。同七寅の年は、三升徳次郎座へすみ、三の替まではまばる興行有しに、其後芝居出来かねしを、久米太郎と兩人して取たて、閏六月廿六日より始られし所、大々の大入はきつのお手柄。此二三年とかくふ役者の座へすまれ、何かとのお骨折、今年は打續き三升座の出勤、全體小取まはしよく、小手さゝにて世話事などは功者成る仕内、當時の位は上上書、餘り實すぎて花うすく、是のみ残念の至り、此うへ今少しゆるみがあれば、上上黒吉のぶらついで有事は眼前。

○市野川彦四郎 二代

可慶

先達四郎實子にて、幼名は四郎太郎というて若衆形、其後父の名に改立役と成、大坂の勤、かるはづみにて仕過しなきやつし形との評ばんよろしく、寶曆三酉の年、大坂十藏座にて一谷に忠則役大できにて、上上書と成、夫よりをりく、武道事をせられ、同六子の年、二の替、通神曲輪日記に、金岡金五の武道大出来にて、翌丑の顔見せより、上上書とあるされ、ちか頃は、やつしをやめ、實事のみにして、折節は親仁形もおつとめにて、次第に御

功者のゑ上上書、花やかな事が薄らぎまして残念の至、ねから外見ずの難波のお勤は、まんびやうく。

○大谷廣次 三代

十町

元祖廣次は、廣右衛門子にて、元祿十四森田座へ初て出、敵役より出世して、其後享保八の春、中村座にて海老藏いまだ團十郎の時分、五郎にて、此人朝比奈帶引大當り、同冬、大坂また京をつとめ、五年ぶりにて江戸へ歸り、中村座にて、唐金茂右衛門の當り、夫より元文二は上京し、寛保元を下り、江戸の大立者にして、大上上吉、年々當りを取、中にも鬼王、朝比奈、男作は得ものなり。延享四卯の五月廿五日に相果たり。二代目廣次は、右廣次弟子、大谷文藏とて、享保廿卯の顔見せ、市村座へ初て出、元文三の冬、市村河江弟子と成、坂東又太郎と改、寛保二の冬、中むら座にて、又々廣次弟子と成、鬼次と改、大森彦七にて、琴の段大出来、寛延元霜月、市村座にて、二代目廣次と改名す。前の中村魚樂とは相役者にて、男作にて度々大當りし、河津股野の相撲、其外自身の當ては、おんかうのひけん、濡髪長五郎の髪すき、鬼王のまうたんは、家のもの、重の井新左衛門を名殘として、寶曆七丑の年、丹信院泰然日了と改、深川淨心寺に誌を殘す。今三代目廣次は、初米山徳五郎とて、小芝居へ出、寶曆五亥の秋、二代目の廣次弟子と成て、大谷春次とて、市村座へ始て出られ、上とあるし、寶曆八寅の冬、鬼次と改、段々評判よく、同九の春は、始てあさひな、同十二年の顔みせより、市むら座にて大谷廣次と改上上吉、同十三未の春、始て鬼王をでかし、同冬、森田座にて相撲、同十四の春は、黒舟忠右衛門よく、明和三年より上上白吉にいたり、同五子の春、市村座にて、始てすけつねの大當り、同六午の春、同座にて鬼王役、すまふの物語大出来、同七寅の冬は、市村座にて、又々河津の角力をでかし、今上上吉、此人一體いやみな仕内にて、狂言をそ、

らず、日頃よく、愛敬ありて、いさつよく、何を致されいども、舞臺へ出らるゝと、諸見物の悦ば大かたならず、仕合男〜。

○大谷ノ系

元祖 江戸敵役關山

○大谷廣右衛門

○享保六丑二月十九日死

二代目 半道敵始

○大谷廣右衛門

始は新右衛門と云
延享四卯十二月廿五日死

子 始は廣七と云

○大谷新右衛門

寛延二己十一月廿六日死

子 始は傳二郎と云

○大谷廣七

名人 延享四卯五月廿五日死

○大谷廣次

○圓頓院顯理日證

弟子

○大谷廣次

始は大谷文藏
中頃坂東又太郎
後大谷鬼次

寶曆七六月廿八日圓德院泰然日下

女 初萩野伊三郎妻
後尾上菊五郎妻と成死

○大谷才藏

寶曆七年
五月十七日死

弟子

○大谷廣次

初は春次
後鬼次

弟子

○大谷谷次

○大谷永助

○大谷徳次

○大谷外五郎

○大谷廣八

弟子

○大谷友右衛門

弟子

○大谷國藏

始は廣藏

○大谷國次

二代目廣次弟子 始は國藏
三代目

○大谷廣右衛門

○中山來助

幼き時は、大坂龜谷座へ、源之介として出、實は狂言作者、松屋來介子にて、門十郎文七などの弟にて、三人兄弟なり、父の名を付松屋來助と成て、寶曆七丑の顔みせより、大坂大松曲介座へ立役にて初て出、優形を勤、上上に記され、同八寅の顔みせより、中山と改め、姉川新四郎座へすみ、それより打つゝ大坂を勤、やつし形をやめて、實事ばかりをせられ、明和四亥のかほみせに、嵐雛介座にて、油かけの地蔵役をてかし、次第に評よく、明和七寅の顔みせより、上上書に進み、藤松三十郎座を勤、二の替り東山殿女狩に、片岡はいとこの實事をてかされ、其暮より、京三升徳次郎座へ初上り受よく、先はお仕合〜、口跡立居何角文七の藝風に其儘、兄弟なれば、似るも無理ならねど、ならう事なら、自分の來助風といふものをせられたら此上もなき事、全體器用なる仕内な

舎

柳

れば、心掛次第で、どこまでも藝の上るは儘か。

○中村十藏 二代

虎

宥

故中村十藏は、武道のひんぬきにして、坂東彦三郎死後は、實事は此人にとり、極上上吉の名人、大阪にては、寛延頃より寶曆三年まで座本を勤、當り狂言をかぞふれば、寶曆二申の二の替、けいせい都富士に、淀の與三右衛門、同四戌の顔みせは、三條定介座にて、泰平木曾借に、能登守と成、若衆形に三輪の能指南の大で、同二の替、天の羽衣に、さうら三八、同五亥の二の替、道中千貫樋に、桃井てるもと、成、けんぼうは藤川平九郎出合の大出来、同六子のかほみせは、京染まつ松次郎座へ上り、又能登守の大當り、二の替、花街蛙に、毛利元就と成、大々當り、龍安寺の歸るさ、幕の外へ出、門前迄の思ひ入、いやはや詞にのべられぬ面白さ、京中の見物、上中下一統に悦び、山といへば、比叡山、寺といへば三井寺と心得ること、二の替狂言より、龍安寺といへば十藏事と取違へる程にひき渡る大評ばん、秋狂言人間一生道中紀に、松下嘉平次のでき、其冬大阪へ下られ、諸見物の残念がり大かたならず。同七丑の顔みせは、大阪姉川大吉座へ下り、其秋より又京へ登り、澤村染松合座の芝居へ出、天羽衣のさうら三八を出し、京中の悦び、同八とらのとしも同座の居なり、信仰記に、木下東吉の大おたり、同十辰の顔みせより、今の十藏を子分にして名を譲り、吉右衛門と改、初狂言、先陣浮洲岩に盛久役、見功者の感心な、めなはず。二の替より何やら差つかひ有て、喜津右衛門と替、同十一巳の顔みせ、菊流國家太平記に、石堂勘ヶ由と成、實惡の仕内、一向ほむるにいとまなき大出来、同十二午のかほみせは、大阪へ下り、又吉右衛門と改、明和五子年まで、七年が間大阪勤にて、同六丑の年、京尾上くめ介座へ上られしが、をしいことは豆

の數がよえて、いせん上京程にはなく、同七寅の年も居なりに勤、本朝二十四孝の信玄、關兵衛の二役を、此世の名殘狂言として、六月十七日行年七十七歳にて、問義院永壽日妙と名のみ残りき、惜いかな。今の十藏、實はふりつけの上手、小倉山百介子にて、小倉山千太郎といひ、寛延の初め、京染松七三郎座にて、黒舟の忠吉役をどかさされ、同三年の顔みせ、京南側芝居にて、中まはのありし時、物ぐさ太郎の狂言に、狩野歌之介を勤、寶曆元未のかほみせに、神山座へ若衆形にて出、同四戌のかほみせより、元服して立役と成、山下宇源太座へすみ、顔みせに、狂言師とく又と成、三番三の立評よく、打續き京の居なり、親父百介も、寶曆六年霜月十二日に此世をとりて、西方のふりつけとなられき。同十辰のかほみせより、古中村十藏子ふんと成、中むら十藏の名を受継ぎ、澤村國太郎座へ出、上上中にまゐるされ、次第にひいき多く、同十四申の十月、大阪下りの暇をに、いろは縁起の段を出し、山中左衛門役をどかし、大入を取、明和二酉の顔みせは、大阪三升大五郎座へ出評よく、同三四三ヶ年の間、しゆびよく勤、同五霜月京へ上り、市山助五郎座へすみ、今年まで當地の勤、次第に上達わつて、上上當にすみ、上下事よく取合、折々は吉右衛門役の武道のおさへ役をせられても、年若に似合ず、落付てよく致され、第一町中のひいき多く、川東は別して受よく、一體花やかにて、當世の愛敬男、今このまゝのもの。

○中村系

佐野川萬菊弟

○中村吉衛門

始ハ十藏ト云

子分 ○中村八重八 死去

○中村十藏

始ハ小倉山千太郎ト云

弟子

○中村團藏

始ハ山三郎ト云

子

○中村千藏

弟子

○中村岩五郎

始ハ岩藏

○江戸坂京右衛門

始ハ中村正藏ト云

弟子

○江戸坂正藏

○中村文藏

○中村八江八

○嵐吉三郎

里

環

元來竹田出にて、子供時分は、大阪濱芝居にて、大きに名をうり、子供評には、極上上吉と記され、何役でも自由にこなされし人、寶曆八寅の正月十六日より、大阪相ノ谷秀松座にて、夜の顔みせ始り、嵐勘三郎の嵐を受、嵐吉三郎と名のり、大芝居へ初ふたい上上とまゐりし、先男つゝさされいにて、大がらにて格好よく、後には立ものにな

らるべきとの沙汰にて在しにたがはず、寶曆九十兩年、大坂にて座本を勤、段々評よく、其冬霜月より、京澤じら國太郎座へ上られしが、京の初ふたい、かほみせに繪馬よりぬけ出、座頭と奴やりをどりの所作、評よく、間の替、櫻合戦に、狐忠信役をてかし、二の替、大内山に、四つ塚虎之介といふ前髪の角力の仕内大出来ゆゑ上上吉にすゝみ、夫より同十四中の年迄、京出勤なりしが、ちとたるみが見え、さのどくにありしを、明和二酉の顔みせ、大阪三升大五郎座へ下り、久しぶりの評よく、間の替、薄雪に、つゞ平役を勤、切狂言の心中に、髪結手間取善助と成、おはつ徳兵衛の長蔵格の役をてかし、上上吉と成、始終評よく、次第に藝をあげ、明和七寅の顔みせは、藤松三十郎座へ出、上上吉に至り、三の替、淀屋橋けんくわに、早川又兵衛役大當り、先大がらにて色まろく、角力取などになられては、さりとはいかつかつほく、男作の役者には、文七八藏のけては、此人より外にはとゞらぬぞ、今年は、七年ぶりにて京のお勤、何役でも仕かねぬ藝風、はななくしき當りをなされよ。

○尾上紋太郎

里

桃

尾上菊五郎弟子筋にて、初めは門太郎とて、寛延二巳の年、京中村松兵衛座へ、色子にて出られしが初ふたい、同三年の年は、女形にて上と斗まゐりし、夫より暫出勤なく、寶曆三酉のとし、山下又太郎座へ元服して立役と成、勘介島の狂言より出、同四年は、澤村座へすみ、上上と成、二の替入狭山に、手代庄二郎、柴田まゆりの助、二役評よく、同六子のとし、秋狂言、がんりう島に、興五郎役を大にてかし、同七丑のかほみせより、上上吉に進みしが、中なるみして上上吉と成、同九霜月、江戸市村座へ下り、顔みせは座付ばかりにて、狂言に不出、春は芝居出火にて、暫の間出勤にて、同十一巳の顔みせに、京中むら千藏座へ上り、元の上上吉に直り、和實をかね、極彩

色に兵介役大できにて、始終京都の出勤座本をせられ、實事にて、折々當りれしより、ちか頃は、やつしをやめ、實事ばかりせられ、上上當迄至りたれど、京大阪にて、實事にては十藏、吉三郎、來介、やつしにては三五郎、吉太郎など、次第に見物悦ぶ様に成し故、一ト比ほどに評判もなく、ちと薄きましたれど、全體美男にてかつからよく、衣裳はいつとても花やかな事なれば、御工夫あらば評はんの出るはたしかく。

○藤松三十郎

紫浪

三保木儀左衛門に由縁ありて、子供時分は、三保木藤松とて、京宮地芝居へ出、評はんを取、其後まばらくふたゝを引、役者を止められ、又寶曆八とらの顔みせより、京中むら久米太郎座へ立役と成、大芝居の出勤、初舞臺より評よく、先和らかなよい仕出シとのさたにて、上上と記し、道成寺現在鱗に、源藏と成、所作事をでかされ、東鑑に、仁田四郎と成、實事の大でき、同卯の顔みせは、上上吉と成、同十辰顔見せより、三保木といふ苗氏を取おき富士松三十郎と改、同十一巳のかほみせ、大阪へ下り、姉川新四郎座へ出、松山三十郎出勤にて、三の字を山十郎と改出、やつし形を勤られしが、初下りのまさはと評はんもなく、同十二十三は、京つとめにて、同十四申のとしは、尾張名古や下り、評よく、明和二酉顔みせ、京澤むら座へ出、上吉と成、忠臣藏若さの介をでかし、同三四も京を勤、同五子の顔みせ、大阪三升他人座へ出、初下りとは、きついちがひにて、段々ひいさ多く、同七寅の顔みせより、座本をつとめ、繁昌にて有しに、益狂言よりいかゞまでやら芝居を休まれ、堀江市の川まばる姉川万代座へ出、一座引越し、菊水の巻に侍従の介と成、酒の酔仕内てかされ上上吉と成、近年は實事をやめて、やつし形になられしが、とかく實事のかたが當り多し。今年は京都のつとめ、所作事は老ゆうにな

り、花々しい當りをとり給へ。

○市川八百藏 二代

中車

故市川八百藏は、道外形松島茂平次子にて、幼名松島吉三郎といひ、寛保二冬より、中むら座へ子役にて出、市川海老藏弟子と成、紋。延享三冬より、松島八百藏と改、初て五郎役、夫より年々春は五郎をでかし、段々出世して、寶曆九の春、中むら座にて五郎と、似せ朝ひな菊之丞との帯引大當り、辨長にて、はやくちのさいもん大出来、俳名の定花もちりて、同初冬より、全冬成果と改、をしひかな。今頃まで存命ならば、大立ものなるべし。今の八百藏事、古定花の係に其まゝにて、始中村傳九郎弟子にて、中村傳藏とて、寶曆の初め、森田座へ上の立役にて出、同十一、中村座にて、古定花三回忌追善として、古盛府と勤し、おはな半七を、またく盛府相手にて勤、同十三末の年より、市川八百藏名跡を繼て、五郎役をでかし、上上士にいたり、明和三顔みせ、高むら座にて木下兵吉の大出来、一體器用はだなる藝風にて、小手のさいたる仕内、當時上上當りなれども、追々立身あるべし。

○澤村喜十郎

喜長

享保の末、吹屋町河岸の小芝居にて、このころ豊後初下りの時、金むらやおさんに、村上常五郎、盛や伊八に、今の喜十郎相勤め、大當り。元文二巳のとし冬、中村座が初ふたい。始岡田龜次郎といひ、又龜十郎。元文四年澤田長十郎助高屋高助事弟子と成、染山喜十郎と改、寛保元酉の顔みせより、澤村喜十郎と改名し、敵役をつとめ、寶曆二

の冬より、京嵐三右衛門座へ上り、實悪にて上上者、同三の冬、江戸森田座へ歸り。立役と成、又實悪をも勤、功者なれども位事かひなく、忠臣藏の平右門、夏祭の釣舟杯はお家く。

○坂東三津五郎

是業

古坂東三八義子、始は大坂濱しはる竹田座にて、竹田巳之助といひ、明和三成の霜月、師匠三八同道にて、江戸森田座へ下り、評判よく、翌年秋、芦屋の興勘平をてかし、同冬、市村座、同五子の秋、菅原の源藏大とき、同六森田座、同冬居なりにて、此時より紋（丸）に改、始は東を付、同七の春、あさひなをてかし、同冬も同座、今年卯の春は、始て助経役、何をさせても、間のぬけぬ萬能の人なり。ならふことなら、口跡を直して貰たいまで。當時は上上者、次第に吉も黒みませう。

○尾上新七

芙蓉雀

尾上新七弟子にて、子供の時分は、尾上佐野介とて、寶曆六子の顔みせより、江戸市村座へ出、同十一巳のかほみせより、春五郎と改、同十二年の顔見せより、立役と成、上上と云るし、明和二酉の顔みせより、大坂へ上り、中山文七座へ出、七三郎と改名し、一年勤、同三成のかほみせより、京へ上り同四亥の顔見せより、新七と改め、今年まで居なりの勤、近年次第に師匠の傳けうつり、段々と上達有て、當時上上者、先花やかにてよし。今少し小がらなるが、さりとては残念に存ます。

○坂東又太郎 四代

東山

古嵐音八子にて、子供の時は、あらし九八といひ、其後市村の弟子と成、四代目坂東又太郎と名乗、次第に評よく、いさゝに預り、上上白吉まで進み、明和七とらの霜月より、大坂へ上り、小川座の勤、なじみのうすいだけに、江戸ほどのさたなく、まつほりつとめられたら、追々評はんが出ませう。

坂東系

元祖 坂東又九良義子 實は坂東又次郎子

○坂東又太郎

元禄十七申二月廿八日正心院宗慶日淨

○坂東又太郎

始ハ坂東又次郎

三代目

○坂東又太郎

八代目市村河江門人

四代目

○坂東又太郎

九代目市村家橋門人

後二代目大公廣次ト改

子 坂東百松

○嵐金妻

睦友

元來大坂竹田出にて、成長して嵐三五郎弟子と成、明和四年、出羽の芝居の座本と勤、同五の顔見勢、京尾上座へ上り、上上。其時、大坂へ下り、他人座へ出、次第に評よく、同寅の年は、與三郎座にて、上上其秋、名古屋へ下り、大ぶん評判をとり、當年は上上言、去とは小きみよひ精の出し様、どうぞがらもつとやりたい。まかし山椒は、小粒でもからいとやう、出精ゆまき、めが見え、位も大きにす、みました。

○中山門十郎

全體口跡の引はなしに、入藏のいきごみありて、仕内は文七に其儘、藝は功者なり、此人も狂言作者松谷來助子にて、寶曆八とらのとしては、大阪姉川座をつとめ、松谷紋十郎といひ、兄弟衆は、今ではいつかどの大立者になられたれば、なぜまつぱりと大芝居へ出勤なされぬぞ。明和三戌の顔見勢に、京小川座へ上られし時も、評判もよかりしに、二の替切にて出勤なく、惜し事。

○市川友藏

二 紅

元來幼年の時は、大阪濱芝居龜谷座にて、龜谷虎藏といひ、其のうち中村富十郎弟子と成、苗氏を中村と改、中芝居をつとめ、夫より江戸へ下り、辰松座へ出、明和六丑の顔みせより、市川團藏弟子と成、市川友藏と改名して、江戸市ひら座へ、師匠團藏と一所に出、取まはしり、しく、評よく、上上寺とまるされ、同七とらの顔みせに、京へ上り、三樹徳二郎座へ出、何をせられても受よく、口跡仕内立居まで、團藏に其儘にて、見物の悦び、御所櫻の辨慶役をつとめられ、大きにぞかされ、どのやうな大役でも、それ／＼にこなさる、重寶なお人。

○三升屋助十郎 二代

介 花

古三升屋助十郎は、始元祖中村七三郎弟子にて、瀧井助五郎といひ、後に元祖團十郎弟子と成、市川助十郎と改、又三升やとあらたむ。一比道外形にて、後はやつし事、十郎役を度々でかし、享保十年三月に相果ぬ、深川本誓寺に名のみ残る。紋◆斯のごとく、ひしに一文字なり。後◆に直す。是角一と升を兼ねるなるべし。今助十郎は、を付ル。始三條勘太郎弟子にて、三條龜太郎として、延享四の頃より、森田座へ色子にて出、寶曆五亥の顔みせ頃より、若女形となり、段々立身し、明和四の冬より、森田座にて立役と成、古三升やの所縁ありて、名跡を相續す。今上上言なり。

○尾上松助

三 朝

菊五郎弟子にて、寶曆六子の冬より、子役にて出られ、寶曆十三の冬より、若女形、明和二冬より、市ひら座や、ら三枚に入、同年の顔みせより、森田座にて女形の立もの、段々と立身して、同五年の頃には、上上白吉に至り、きりやうよく、ひいさあり、女形にて大ていにせられし所、師匠の例を引ての役替、去顔みせより、市村座にて、男なり一しは似合ひ、其上せい高く、近比は肥満せられしゆゑ、男よく、まかれども初ての立役故に、上上吉、やがて立身。

○松山三十郎

是二代目の小式部、いぜん大阪にて、若衆形を勤、其後去方へ行かれ、商人になられしよし噂ありしが、寶曆三酉の春より、大阪三條定介座へ、やつし形にて出られ、戀女房のけい政役、評よく、翌戌の冬、江戸森田座へ下り、子の秋かさねの狂言に、舞金五郎のおぼろの役をてかし、亥子丑とら四年が間、まゆびよく勤、卯の顔見せに、大阪中山文七座へ上り、京へも十二年のとし、澤村國太郎座へ出、かほみせに、中納言これ盛と成、おぼろの仕内評よく、一年勤、明和三戌の年は、大阪菊八座、同四は雛助座へすみ、それより打絶て休息、ちと當風のやつしには、かたいやうなれど、おぼろの仕内などには、若手衆の及びませぬ功者な事く。

○笠屋又九郎 二代

狐 十

故又九郎は、若女形の上手、加茂川野鹽子にて、享保の始め、京繩手嘉太夫しばるへ幼して出、其後大和や嘉四郎として、たいこにて名を得、元文二己の年冬より敵役と成、萬太夫座へ出、夫より京大阪の勤、寶曆三酉の霜月、江戸市村座へ下り、三座を勤、同六の冬上京にて、明和四亥の三月十八日、京にて死去、肥大なる生れつき、敵役にはよい男ぶり、其子今の又九郎は、色子のとぎ、笠や又三郎といひ、其のち役者をやめ、又七年ぶりにて、敵役にて又藏と改、寶曆十二の冬より、京中むら千藏座へ出、又大阪嵐ひな助座より、明和七年、森田座へ下り、江戸にては親の名を繼いで、又九郎と名のり、今中むら座の勤、随分はげみ給へ。男されいにて大手なる仕出し、末たのもし。

○嵐藤十郎

呂 久

一しきりは、めさくくと上達あらうと存たに、中たるみが致した。故中村十藏の俵ありとして、名古屋にては、十藏が京にて大當りせし、花街蛙の毛利もとなり役にて、入をとられました。武道事には、つかひおけの有てよし。せりふの仰山なが、此人の癖、お氣をつけられませ。

○市山助五郎 二代

志 山

此人は、故市山助五郎賢子にて、幼名元松といひ、大阪道頓ぼり芝居にて、太鼓を打れたる事も有し。其砌、島の内足代やといへる方へ養子に行、其後別宅して、三絃は大内藤藏の弟子となり、大西長藏と名乗、竹本しばるへも暫出勤せられ、明和三戌の顔みせに上京して、四條南側芝居にて、山下京之介と合座本を勤られしが、つきも出しにて上とするす。初舞臺から座本をせられしは、去とは珍らしい事、およそ此人に始る。夫より三年座本をつとめ、同六丑のときは、尾上座へすみ、同七寅の顔みせ、大坂へ下り、藤松三十郎座へ出。根がなじみの地ゆへ、受よく藝も段々と上られ、今上上と成ぬ。親助五郎は、世に知る所の上手にてありしが、延享四卯の正月十日、行年五十六才にて、山譽良智禪定門と塚にのこり、今年は廿五回忌に當れり、親父ほどに名をあげ給へ。

○嵐三四郎 二代

○市野川門三郎

三四郎は、古嵐三四郎子にて、幼少の時は、三郎太と申たりと存る。寛延三は、江戸中村座の若衆形にて、寶曆四酉の顔みせより立役と成、大坂三升大五郎座へやつし形にて出、同九卯の年は、京へ子供芝居の立物にて、嵐小六の弟子と成、嵐七三郎といひ、其のち元服して大阪へ下り、中芝居へ出、明和七寅の顔みせより、京三升徳次

郎座へ出勤、先口跡はつきりとしてよく、末たのもし。

○尾上門三郎 里遊

○梁川春五郎

尾上紋太郎か、へにて、尾上藤藏とて、幼少の時は、四條大まばるへも出、大ぶん評ばんを取し子役にて、其後宮地子供芝居へ出、立者と成、去明和七とらの秋まで出勤にて、同冬元服して、門三郎と改め、京四條尾上座へ出、立役と成。先男つまされいにてよし。春五郎は、初は櫻山四郎三郎弟子にて、近比梁川此兵衛弟子と成、染川三十郎と改、寶曆九卯の顔みせに、京澤村染松合座へ出、二の替より出勤なく、それより旅を廻り、寶曆十一の冬、大阪北堀江まばるの中村富菊座へ、染川辰十郎とて出、同十二の冬、會根崎新地濱側新芝居、よし澤金藏座へ、又三十郎とて出、夫より去明和七寅の顔みせより、春五郎と改、京三升徳二郎座へ出勤。打つゝも出勤めるやうになされよ。

○坂東定十郎

○坂東吉藏

○尾上政藏

○市川章藏

○坂東鶴五郎

○市川染藏

○市川時藏

○中村民十郎

○尾上叶介

いづれも上達のせつ、細評を加ふべきのみ。

○三ヶ津親仁形之評

○山中平九郎 二代

仙 虹

古山中平九郎は、江戸寶悪の名人、三ヶ津に其名高く、古今稀なる者なり、ことに怨靈事に妙を得たり。是世の人専ら知る所なり。今の山中氏は、享保十五戌の霜月、市村座へ始めて出、上と斗まるとし、寛保の比より、今に續て市村座の頭取役、當時は舞臺出勤なし、老功ゆゑお役目御太義。

山中系

子 享保六丑九月十七日

水木竹十郎

弟子

○山中平九郎

享保九五月十五日死

弟子

○山中平九郎

市村座の頭取と成

○山中平十郎

○佐川新九郎

盛 佐

古佐の川市松弟子、さりとて古つはもの。

○松屋新十郎

令 之

上村喜三郎として、ふるさ人、寶曆七丑の顔よせより、新十郎と改、澤むら座へ出、一谷の經盛、崇禎寺馬場の彌三右衛門役などは、扱々功者な事。今に見功者連中の取さた。同十辰の顔みせより、松や新十郎と改め、今年迄頭取役を兼帯にて出勤御苦勞。

○大嶋九十郎

蝶 七

はじめは流五郎といひ、大島嘉十郎にわけありて、大島をなのられ、近年は休みがちにてありしが、今年は大坂の勤、まてく古い人にて、功者もの。

新刻役者綱目卷之三終

新刻役者綱目卷之四

○三ヶ津實悪ノ評

○中村歌右衛門

一 先

一國をくつがへず謀叛人につかひては、續く者なき人品骨柄、威あつて猛く、眼中尖く、どうもいへぬおしたて、元は加州の産にて、寛保二戌の顔みせに、京大芝居へ出られ、立者になるべき仕出しの諸方の評判、延享二卯の顔見せより、大阪へ下り、次第に立身して、大立ものと成、寶曆四戌のとし、二の替、天羽衣に、山名宗全、赤松四郎、二役大出来にて、其時の評に、實悪巻頭と成、逸風より上に立、上上黒吉にす、めしが、同五六さほど、の當りめなき故、暫く上上吉に聴し、同七丑の三月より、江戸市村座へ下り、翌とりの年、同座にて、角田川にうばが池ばくと成、古盛府を殺す仕内にて、大きに評を取、同卯の年より、上上吉と成、中むら座へ出、同十は市村座、同十一は森田座にて、魂の七ばけをつとめ、春は祐經役を始て勤、評よく、同十二年の顔みせは、大坂三升大五郎座へ登り、延着ゆる狂言仕組の間に合兼、江戸にてせられし七ばけを、取あへず出されしに、土地の氣に合ぬゆゑか、さえられず、上上吉に記し置しが、其二の替り、秋葉權現に、日本駄右衛門と成、かたりの仕内大で、上上吉にのほり、同十三も、同座にて、元の上上黒吉に直り、打つゝ大阪勤にて、明和三戌の年よ

り、座本を勤、同四亥の二の替、ひつこの玉川に、豆腐や權兵衛、才原勘ヶ山、二役大出来にて、其霜月より、京尾上座へ上り、顔見勢は、さして沙汰もなかりしが、二の替、渡邊團右衛門と成、梅幸と出合、さりとはいくくと大きに受とり、何ぞまづほりとした實悪の仕内が見たいと、諸見物の待たがれしを、只一年つとめ、嚴流島のがんろうを暇乞にして、同七寅の顔みせ、江戸中むら座へ下り、清水清玄評よく、益替りに、はんがくの悪女。なるほどすまじく見えました。今年は、大阪小川座の勤、二の替は、船頭徳藏役は、外に真似てはとざりませぬ。當時の實悪く。

○中村系

中村千彌出中村源左衛門筋

○中村歌右衛門

弟子

○中村松江 始ハ松右衛門トイフ

○中村玉柏

○中村津多右衛門 初年竹田出 始桐谷槌松トイフ

○中村哥治

○坂田半五郎 二代

杉

曉

古半五郎は、正徳の始より出て、敵役を勤、享保四の春、初日の朝比奈にて、大出来、それより度々あさひなをでかし、男作まうたんは得もの、後年は、實事と成、又實悪と役替、享保二十卯の年四月廿三日、市村座舞臺より、すぐに極樂の樂屋入して、谷中瑞林寺に其名をとこむ。今半五郎、實父は、仙國彦助弟子にて、始は仙國彦十郎といひ、後に田川彦十郎とて、道外形を勤、今半五郎は、享保の末、吹や町小芝居へ、仙國佐六とて出、寛保二戌の冬、市村座へ出、仙國左十郎といふ敵役なり。段々立身して、延享四年の四月、中むら座にて、菅原の春藤玄蕃と、やつこ宅内より評判よく、寛延二巳の年冬、中村座にて、坂田半五郎と改名す。又弟左十郎は、寶曆五亥の霜月より、市村座へ出、夫より三座を勤評よく、器用なる藝風にて、見物の嬉しがる人なり。去ル五月に世を去る。今半五郎は、寶曆十二年、中村座にて、始ての鬼王大出来、夫より年々勤、明和三年市村座にて、武知の大出来、明和元申の年評より、上上黒吉とし、當時の鬼王役、まうたんよし。全體狂言と、らず、舞臺身にいらせてせらるゝゆゑよし。今實悪より本實の方をおもとす。位事今少しおもはしからず。實はまづかりとあれど、惜いことは花うすく、残念の至、何してもかでも引受てせらるゝ、御功者く。

○坂田系

元祖實惡

○坂田半五郎

二代目坂田藤十郎弟子
享保二十年卯四月廿三日死
圓信院日亮信士

江戸道外名人

○仙國彦助

元祖中村七三郎弟子
元文五年申四月廿六日死
諸法院宗眞日實

弟子

坂田國八

坂田大右衛門

弟子

○田川彦十郎

寶曆十一巳十月廿五日死

始ハ仙國ト云

實子二代目

○坂田半五郎

始ハ仙國左十郎ト云

二男

○坂田佐十郎

坂田富五郎

子

明和七寅五月三日圓得院宗順日喜

女 今三升や助十郎妻

○淺尾爲十郎

奥

山

當世の實惡、此人ほど惡にめき〜と仕上げられた人は、餘り澤山になき器用なる藝風。此淺尾は、古若女形、淺尾十次郎筋にて、六歳の時までは、萬吉といひ、其後爲藏といひて、旅を修行して、寶曆七丑の顔見せ、大阪十木菊松座へ爲十郎と改、始て出、相馬太郎役をつとめ、評よく、二の替、井手の下紐に、横雲大膳に、もつこふの

傳といふ非人、二役續て受よく、同八寅の年も、嵐久米松座へ出、右兩年の間の座組は、濱芝居生立の衆集りて、角の芝居にて興行、まづ中芝居のやうなる座組、其比より立物になるべき仕出しと、町中の取沙汰。同九十兩年は、何方へゆかれしやら見受す。同十一巳の顔見せ、姉川新四郎座へ出、大場三郎役よく、上上と記し、二の替、まら丸役もでかし、同十二年のかほ見勢、中山文七座へすみ、梶原平次役、評判よく、座列ともに進み、位も上上吉と成、やれ爲十郎〜と、大阪中の評ばんにて、二の替評には、上上吉、同十三同座の勤、問の替、双蝶々に、手代權九郎大できにて、敵役巻頭にのぼり、申酉も同座を勤、顔みせ評に、上上吉に至り、桃太郎稚嚙に、柴刈の女房、後に岩倉後室と成、桃をくひ若くなり、姫の身代りにたつをかなしみ、無間鐘のちやも請よく、戀女房、八平次役もよしの評判。明和三戌の年は、菊八座にて、井手の下紐に、いせんの二役、かくべつに仕上られ、同四亥の顔見勢、京山下市山合座へ、中山文七同道にて始て登り、京にても見物の悦び、菊水の巻、石堂勘ヶ由在兵衛、一谷のみだ六などは、よき沙汰もなく、出入渡に、獄門庄兵衛役、新町橋の段は、さしたる事もなし。黒船の内へかゝりに来る場は、まづとわるものと見えて大出来。同子の年も、居なりにて、染模様の手代善六役をでかし、もそつと京に置たしと、町〜の噂の中を、同六丑の年は、大阪山下八百藏座へすみ、翌とらのはしは、藤松三十郎座を勤、二の替、はらの十郎兵衛評よく、三の替、淀屋橋喧嘩に、手代傳兵衛役を當、ねつの四郎右衛門は、さのみ評判もなかりき。此人手代の悪などさせては、をかしみを兼、小手さ〜にて、外についともなし。近比は折〜實役の親仁形を勤らるれど、ちとからだか廻り過て、花やか過るとの評はん。今年は、京三升徳次郎座へ上り、顔みせより評よく、二の替小栗宗丹役の大出来、全體藤川平九郎のいきごみ有て、諸見物の嬉しがり、當世にかなひし實惡、當時の位は、上上吉なれど、黒吉は今の間〜。

○中村仲藏

秀

鶴

中村傳九郎弟子にて、延享四未の春より、中村座へ子役にて出、寛延三より、若衆形を勤、寶曆六子の冬より、立役の上と斗ふるし、寶曆十二の比までは上上なり。同顔みせの評にて、上上士に進み、明和二酉の年春、市村座にて、いづの次郎より實悪と成、同年、忠臣藏の定九郎役より、大きに評判出、立身し、同三戌の顔みせは、上上白吉、これより夜に日にましての出世、同五子の春、中むら座にて、かまや武兵衛をでかし、同七寅の春、中村座にて、始て助つねの大出来、同冬、同座にてらいがうの大當り、此人近比は、何を致されてもとかく見物うれしがり。まかれども、何役にても、穴のみなをほせらるゝが、此人の癖なり。今少し大やうにきて、當りをとる工夫おれかし。去春の助経などは、誠の大できとも當りともいふべし。去かほみせの評には、上上書に進む。今龍の雲を得たる勢ひなり。

○中島三甫右衛門 二代

天

幸

親父三甫右衛門は、元祖中島勘左衛門弟子にて、正徳四年の霜月、市村座へ始て出、夫より段々出世にて、一、比は立役、後に實悪と成、これ中島一流の公家悪とて、今に傳たり。江戸にては名高き人。寶曆の比より、森田座頭取役を勤、同九霜月、同座の番附に、名前はあれども、是より出勤なく、寶曆十二年のとしに果ぬ。今三甫右衛門は、實子にて、延享四卯の冬より、森田座へ出、三甫藏と名乗、敵役となり、續いて同座の勤、寶曆二の冬より、市村座、同三の春、始てかぢはら、同四戌の冬より、中村座へ出、段々出世にて、同八の春も同座にて、朝比奈を

でかし、同十年の比は、上上士にすゝみ、敵なれどもをかしみくはへての仕内、愛敬ある人なり。同十二年のとしより、三甫右衛門と改名し、明和三のとし、上上書に至り、をかしみをやめられたならば、一段とよかるべし。

○中島系

中祖中島勘右衛門弟子

○中島三甫右衛門

實子
○中島三甫右衛門 始ハ三甫藏ト云

寶曆十二年三月廿三日死

○中島寅藏

弟子

○中島三甫藏 始ハ志賀藏

○中島國四郎

○大谷廣右衛門 三代

晩

風

元祖廣右衛門は、大谷氏の最初にて、江戸根生の敵役の開山、元祿の始より立者にて、元祖團十郎と同時代の人なり。享保六年丑の二月十九日、本住院圓理日了と、芝正傳寺に其誌を残す。元祖廣次は、此廣右衛門子なり。二代目廣右衛門は、元祖の弟子にて、享保元申の霜月より、市村座へ龍左衛門とて、敵役にて出、はなつたらしと

異名し、おどけ敵のはじめ、延享二の冬、中村座に於て、廣右衛門と改、評判よかりしが、程なく同四年に果ぬ。其子龍左衛門は、享保十八丑の冬より、子役にて福太郎として出、元文四の冬、廣七と改、敵役、延享二の冬より、二代目龍左衛門と改、寛延二巳の十一月に終る。今廣右衛門は、元祖より三代目なり。これ二代目廣次弟子にて、始國藏として、寛延の末より出、敵役を勤、寶曆九年の比は、上卜と云るし、段々と評ばんよく、上上に成、同十二年の冬より、廣右衛門と改名す。上上書に至り、翌年の春始て鬼王をでかし、同十四申の春、中村座にて、市川雷藏、助六の時、髭のいさををでかし、此比右雷藏とは、相役者成しが、程なく別れてよりは、此人評判も一ト比のやうにあらず。全體小手さ、にて、其上ぶたい身に入れてせらる、故よし。近年半五郎についで、鬼王役なり。

○坂東滿藏

鬼丸

元は竹田にて、萬徳といひし人にて、江戸へ下り、彦三郎の苗氏を受て、舞臺へも出られ、寛延三年は、大阪三升大五郎座へ出、寶曆二申の霜月に、京山下又太郎座へ始て上り、顔見せに、角前髪素袍大太刀を佩、江戸風のさしきにて、まばらくくの出端さたよく、上上書、二の替より、上上白吉と成、同四戌の年、山下宇源太座にて、中村喜代三、江戸下り暇を狂言に、千曳鐘せし時、奴隸兵衛役にて、切腹の段うれひをでかし、次第に評よく、打續き京勤にて、同卯の年より、實悪と成、ちと評も薄らぎしが、明和四の冬、十八年ふりにて、大阪中山來介座へ下り、上上書と成、中途よりまばる出來かね、名古屋へ下り評を取、同六丑の春、二の替より、京尾上座へ出られし。役がらにより、つかひやうの有人、上下事などは、ちと取合ねど、男作奴などにしては、打て付た物、

いかゞしてか、此一兩年は見受させぬ。お勤を待ます。

○桐島儀右衛門

風虎

親父は、桐島十右衛門として、久しき敵役、元は桐島小三郎として、大阪にて、こしもと役を勤られ、其後寛延三年、大阪中村十藏座へ、成人しての地の初々たい、上上と云るし、段々評よく、上上書に成、寶曆五年まで、大阪に勤、同六子の顔みせに、京難波松之介座へ出、初上りより沙汰よく、夏祭の團七役評よろしく、京出勤のうらにも、信仰記の山口九郎次郎、千本櫻のいがみの權太などは、大きにでかし、明和三三兩年は、大阪へ出られ、同四亥の顔見勢より、江戸中村座へ下り、作者のはたらきにて、物いはぬ祐經の役を勤、第一男つぎ奇麗にて、人品祐經らしくて、よいかつはくとの評ばん。翌子の年は、又大阪へ戻り、丑のとしは、京中村松代座へすみ、一兩年は、三ヶ津に出勤なし、くつく上達あつて、實悪の頭ともなるべき仕出しなりしが、近比ははなやかみか除ほどぬけましてきのどく。せりふのめりはりのあるやうに、どうぞ御工夫あれかし。

○染川此兵衛

染川

始は中村大藏といひ、寶曆三酉の顔みせより、染川此兵衛と改、大阪中村十藏座へ出、上上書、其暮、京澤村國太郎座へ上り、大藏といひし時分京へ出られしとは大きに上達にて評よく、二の替より、上上書にすみ、打續き京つとめなりしが、ちと評判も薄らぎし所を、同九卯の顔みせは、大阪嵐吉三郎座へ下り、銀閣寺の狂言に、岩治の悪女、奴士手平、二役大できにて、段々と評よく、明和六丑の年まで、大阪勤にて、其暮寅のかほみせよ

り、久しぶりにて、京三升座へ上り、上上書、とかくまつとりとまた事より、をかしの事にかけては、どうもいへぬ事ども多し。男肥大にて、口跡に幅あり。申分はないが、上下事はそれほどに落付かぬが、去とは残念。此上に位事まつほりとならうものなら、鬼に鐵棒。

○嵐七五郎 二代

舎丸

親七五郎は、白極まで昇りし實悪の上手なれども、病氣といふ實形にまめられては、たてつゝもならぬ事やら、いつか西方の大立者と成ぬ。惜むべし。今七五郎若衆形の時分は、市川海老藏の弟子と成、市川龍藏とて、寶曆元末の年まで、大阪出勤なりしが、翌二年より七年迄、いつかたへ修行にゆかれしやら、見せなんだ所に、同八寅の二月十一日より、大阪角の芝居にて、嵐久米松座、中芝居始りし時、親の名を継ぎ、嵐七五郎とて出られしに、扱もよい仕出しと評よく、同九卯の年は、京嵐三五郎座へ上り、顔見せ石川悪太郎役大出来にて、初舞臺より評よく、上上にて、二の替、里の子平の雷藏、百六、二役をでかし、上上吉に進み、同十二年迄四年の間首尾よく勤、夫より大阪へ下り、一、比は立役を勤られたれど、敵役の方餘ほどすぐれてよきゆゑ、近比は又々敵役の勤にて、上上書に成ぬ。親舎丸のいさごみ有て、よき仕出しなれば、外の工夫を付すとも、親父の鎧にて、随分出精めらば、次第に書黒みませう。一、いさは、くつと上りさうに有しが、中たるみ致殘心。今が大事の所でござるぞ。

○中村團藏

不 及

余ほど古ひお人、當時の敵役よりは、昔仕入ゆゑ、まつくりとしてようござる。是故中村十藏の弟子にて、始は中村山三といひ、其後片岡團藏と改、又中村團藏と成、寶曆九卯の霜月より、片岡滿兵衛と替、同十一巳の顔見勢より、中村萬兵衛と呼び、翌午の年より、元の中村團藏に立戻り、さて、度々のお變名、天神記の白太夫役は、けしからぬ大でき、どうぞ中途よりひかぬやうに、まつほりと出勤なされよ。子息千藏は、扱もよい女形になられました。

○三ヶ津敵役ノ評

○坂東岩五郎

岩 止

坂東國五郎の實の弟にて、寶曆六子の霜月より、大阪大松曲助座が、大芝居の初舞臺にて、上上とまゐりし、全體をかしみをかねたる仕内のゆゑ、大きに評よく、寅の年は、上上吉と成、辰の顔見勢に、雷女房稻妻と成、夫、かみなり、姫と祝言するを見て、りんきをなし、兄に國五郎、弟に岩ごころといふ子迄なしたる中とのせりふにて、評を取、段々評判よく、午の年より上上書、次第に位す、み、明和三酉のときは、上上書、當時は上上書もはや今少しにて黒吉、初ぶたいより一年もとたえなく、脇目もふらぬ難波の勤、當二の替は、山名巴之丞とて、やつし形の仕内、此役をする敵役も、當時此人ばかりと見入ます。第一大がらにて、かつはよく、上下事取合、世話敵の侍などにしては、至極にくう、別而おかしひ事をさせては、腹の宿替するやうな事は度くにて、今での敵役、兄國五郎も故人になられ、惜い事。まかし兄貴よりは、拔群よいの評ばん。

○藤川半三郎二代

茶 谷

古藤川半三郎は、古嵐三五良相役者にて、後に片岡仁左衛門と改名し、女形をわらひく殺すなど、むごいことの名人にて、作り方なども兼られし人なれど、古人と成ぬ。今の茶谷は、元山本京四郎弟子にて、山本七三郎といひ、子供芝居へ出られ、寶曆二申の顔みせより、山本七藏と改、京嵐三右衛門座へ出上上にて、中村富十郎、江戸下り、暇乞に和田合戦の車戸頭女房役の大できより、めきくと評判つよく、上上吉にゑるされ、寶曆七年まで打つゝき京勤にて、同八の春、大阪桐谷秀松座へ、市川團藏と一所に下り、山本七藏とて出、同九卯の顔見せより、由縁ありて二代目藤川半三郎と改名し、嵐吉三郎座へ出、二の替、鳴瀧育に、五五助となり、かゝの給仕をと、がするとは、これもすまじらよいな、といふせりふにて落を取、翌辰の年も、同座を勤、同巳の顔みせより、京へ上り、今年まで打續き出勤にて、上上吉まで昇られ、一體小手きにて、世話事などさせては、去とは功者、願くはもそつとがらをやりたいまで。

○大谷廣八

几 幡

師匠は、元祖大谷廣治、功者なことにかけては、此廣八程する人は、當時外になし。まかし惜い事は、實はかりにて花薄く、引立なく、是のみ残念の至。既に寶曆五亥の年より、上上吉に進みたれど、同十二年の年、江戸森田座へ下られ、當時は花をおもとするなればとて、江戸の氣に合かね、上上吉と賤したれど、同十三未の霜月、京園太郎座へ上り、元の黒吉にゑるしたれども、とかく歌舞伎といふ事がすくなく、若い衆悦ばねど、眞實古風の敵

一通り、胸眼をふらぬ達人。明和二より去年まで休れし所、久しふりにて當春より大阪堀江市の側まはる、中村菊三郎座へ出勤、次第に豆敷のふえますが、殘心く。

○佐川今五郎

子供の時は、佐川傳五とて、宮地芝居へも出られしとの噂。寶曆三酉の顔見勢に、京山下又太郎座が初ふたいにて、上と斗にて、夫より上上と成、同七丑の年に、元文年中出勤の最負ある敵役の名を継ぎ、升五郎と改名し、二の替、肝煎藤兵衛役評よく、上上吉にのぼり、秋狂言、龜山敵討に、赤堀傳八役、今村七三郎病氣ゆゑ替り役を勤、大きにでかし、翌寅の年、上上吉に進み、卯のときは、又元の今五郎と成、あらし三五郎座へ出、夫より明和元申の年迄出勤なく、同二の春、内野芝居染松座へ出、安達原の岩手ばゝの大でき、それよりとんと四條へも出勤なく、諸見物の殘念がり、世話事などをさせては、どうもいへぬ押立、去とはおしい敵役を休ませて置事。大阪へなど出られたり、立身あるは慥く。

○中村助五郎二代

魚 樂

故中村助五郎は、江戸道外形、上手、仙國彦介子にて、享保十巳の霜月、森田座へ、中村龜太郎とて、若衆形にて出、元文元の冬、仙國助五郎と改、同四年霜月、中むら座にて、中村助五郎と改名、それより段々立身して、最負つよく、ことに中廣治とは相役者にて、二人揃ひ、春はいつも男作にて、大當りを取、股野、河津の角力にては、度く大あたり、男道成寺の所作に名高く、江戸實惡の巻頭とし、上上黒吉とゑるし、寶曆十三未の七月十三日

に、西方の舞臺へ行きぬ。勇猛院魚樂日涼の名を淨心寺の碑にと、ひ。今助五郎、親子とてこれほどに似るものやらん。妻言葉まで其まゝなり。寶曆十二年の年、仙國助次とて、森田座へ始めて出、其比上と載せ、同十三未の冬、同座にて、中村助五郎に改、今廣治相手にて、親父の勤られし股野の角力、此時より上上と記し、同十四の春は、獄門庄兵衛をでかし、明和二年は、上上吉に進み、同七寅の霜月は、市村座にて、又、角力をでかされ、此上ずるふんと出精せられて、親父ほどに成られよかし。さてもよい男ぶり。

○山下次郎三

元芳澤浪江といふ色子、其後囃子方と成、宗三といひよし。それより山下又太郎弟子と成、山下次郎三に改、寛延四未の冬より、大阪中村十藏座へ出、敵役にて續いて大阪の勤、寶曆八寅の冬より、京澤村染松合座へ出、又大阪へ歸り、明和四五兩年休にて、同六丑の冬より、大阪山下八百藏座へ出、同七は休、其冬より、江戸中村座へ下り、翌春より出勤、男小がらなれど、口跡に幅あり、まづかりとしてよし。

○大谷友右衛門

此 勇

大谷廣八弟子にて、元大阪濱芝居出羽座へ出、竹田友三郎といひ、夫より又濱芝居の龜谷座へ出、大谷友三郎と改、其後明和三戌の顔見せより、京山下市山合座のまばるへ、大谷友右衛門と改出、諸見物の受よく、同六丑の冬は、江戸市村座へ、菊五郎同道にて下り、打續き評よく、居なりの勤、仕立ち手はしかく、少しをかしみもあつてよし。

○富澤半三郎

中 葉

寶曆四年霜月より始て中村座へ出、傳九郎の弟子と成、中村傳吾といひ、夫より同七年冬より、古人宮川八郎左衛門の名を継ぎ、又明和五霜月より、富澤半三と改名す。古人富澤半三は、享保の比名を得し人、古傳九郎より、朝ひなを譲り得、度々當りをとる。今半三郎は、をかしみなしに眞の敵役仕内に切が見えます。古勘左衛門の風あり。

○中島三甫藏

笠 子

今三甫右衛門の弟子にて、始は志賀藏と云、其後三甫藏と改め、少しをかしみあり。師匠の跡を繼て、公家悪の名を得給へ。

○山村光藏

大阪濱芝居龜谷出にて、子供時分は喜吉といひ、成長して中芝居へ出、山村喜吉と名乗、去る寅の年より、大阪中山文七座へ光藏と改、大芝居の初ぶたい、敵役にはよい仕出し、そのけずらついでてよろこぶる。

○市川宗三郎

古市川宗三郎は、實悪の大立もの成るが、終には違ひ芝居へ參られ、今宗三郎は、庄五郎とて、江戸森田座へ出、

寛延四戌の顔見せより、師匠の名を受継ぎ、翌亥の年、大阪北新地まはる、山本佐吉座へ上り、せいする記の權四郎役をでかし、寶曆十辰の顔みせが、京の初ぶたい、顔つきににがみあつて、敵役には相應く。

○松本友十郎 二代

鬼頭

旅にては、松本新九郎といふたるよし、いかなる由縁にて、上手の名を受継れしぞや。寶曆四戌の顔みせ、京山下宇源太座が初ぶたい、ちやう事は得ものにて、見物を笑はすかお家く。

○中島勘左衛門 三代

島子

中島の元祖は、あぶら勘六として、紋は二かゝ笠を付る。其子勘左衛門より中島と號、これ江戸立役の大立もの、實事の上手なり。其子勘六、後に勘左衛門と改、敵役にて、功者なる者なり。寶曆十二の秋果ぬ。今勘左衛門は、初名傳之介といひ、子役にて出、寶曆三年に勘六と改、段々出世して、寶曆十二の冬より、親の名を受つぎ、勘左衛門とあらたむ。仕内よく、此上立身あるべし。

○中島系

○あぶら勘六 道外形
元祖

一代目

○中島勘左衛門

實事名人

二代目

○中島勘左衛門

始勘六

○中島勘左衛門

初名傳之介

正徳六申四月廿一日死

寶曆十二年八月五日死

始勘六

弟 中島三郎四郎

○市川照右衛門

鬼從

始は市川入藏として、寶曆十四の冬、中村座へ出、四代目團十郎弟子と成、明和二の冬より、照右衛門と改、聲大きく、役がらに應じ、段々と出世致さうやうと存る。

○篠塚宗三

半風

篠塚嘉左衛門弟子にて、田舎を修行の時分は、藤川平九郎でせられたるゆゑ當りしとのうはさ。いまだ大阪へは出られねど、江戸の舞臺までふまれしゆゑ、舊功が顯はれ、當世の衆より、役によりまづつくりとしてよし。

○中村次郎三 二代

丸子

延享年中まで出勤に、中村次郎三といふ敵役ありしが、いかなる由縁にて、名を受継れしやら、今次郎三の舎兄は、今の嵐三五郎弟子の、あらし歌仙との噂、これまで大阪中芝居を勤られしが、去明和七寅の顔みせより、京

尾上久米介座へ始めて上られ、双蝶々の妙真役より、めつさりと受よく、打續き居なりの勤、口跡調子よく、敵役には、よいかつほく、とかくをかししせりよをいふて、落すとらるゝ人、當世のきゝもの。

○中村新五郎 二代

太 中

今の山下金作の弟のよしにて、初年の時分は、中村初五郎とて、慶子方に居られ、寶曆四戌の顔みせより、江戸中むら座へ子役にて出、同九卯の年まで江戸勤にて、同十辰のかほみせ、慶子と一所に大阪文七座へ上り、同十四申のとし、京澤村座へ、岩井半之介と改上られ、翌酉の年元服して、五代目の岩井半次郎と名乗、立役と成、さのみ評もなかりしを、去寅の年より、二代目中村新五郎と改名しての敵役、立役より拔群宜しく、今年は、大阪小川座の勤、小がらなれど、をかしみあつてよいぞ。

○中村新四郎

喜代三弟子の中村四郎五郎實の弟にて、寶曆のはじめ、中むら權藏とて、大阪岩田座へ出、寶曆四戌の顔みせ、京山下宇源太座へ始めて出、同六子の年、中途より染松座へすみ、勤功記の、忠太役をでかし、評をとり、同八寅の顔見せより、桐島儀左衛門弟子と成、桐島と名乗、久米太郎座へ出、同十一年は、江戸森田座を勤、明和二酉の年より、元の中村と成、京松之丞座、同三も京勤め、其後は、旅にても修行にや、沙汰も聞えず。

○市川染五郎

義 考

高麗藏弟子にて、寶曆十辰の冬より、森田座へ出、始は市川松兵衛といひ、敵役道外形をつとめ、明和三の冬より立役と成、染五郎と改、今又敵と成、立は功者。

○中村津多右衛門

元來大阪竹田出にて、子供の時は槌松といひ、元服して桐野谷槌松と成、其後中村歌右衛門弟子と成、大阪中芝居を勤、京石垣町芝居へ出羽座登りし時、ちよと出られ、明和五子の顔みせに、師匠歌右衛門と同道にて、熊五郎と改、京尾上座へ上り、翌丑のとし、津多右衛門と成、次第に評判も出ましたに、大阪へ下り、堀江の荒木座へすみ、今年も同座の勤、口跡立居まで、師匠によう似ますぞ。

○三樹貫藏

東 里

三樹大五郎弟にて、寶曆八とらの顔見せに、京澤村染松合座へ、敵役の突出し、翌卯の年より大阪勤、いやみなく、すなほ成る仕内、ちと花やかになされぬかい。

○坂東三八 二代

平 久

師匠古三八は、始太田三十郎といへる、三味線の上手なり。八代目の羽左衛門弟子と成、坂東又八と改、延享三寅の春より出、寛延三の春、始て朝比奈をでかし、同霜月より坂東三八と成、翌年の春、やほ大じん評判よく、段々と出世、夫より江戸奴荒事の立ものと成、明和元の冬、大阪へ上り、同三の冬、江戸へ歸り、明和七寅正月十

一日に世をさりて、専譽平久尾綱信士と號す。今三八は、始坂東金太郎とて、寶曆五亥の冬より、市村座へ子役にて出、寶曆十二冬より、師匠の元の名又八と改、段々立身にて、去暮より三八と改名す。此人これでやばならざるやうとがなしいといふ事にて落を取、此上三八流の朝比奈を寫し、さらばけをいふて、師匠の家をおこし給へ。

○市川齋藏

何 紅

色子の時分は、玉澤安五郎とて、寛延四未の年が初舞臺、夫より女形と成、故玉澤才次郎血筋の由縁ありて、寶曆十辰のかほみせより、才次郎と改出勤なりしが、其暮より、思ひきつて立役に成、市川團藏の弟子と成、市川齋藏と變名す。直をなるよい仕出しなりしを、去明和七寅の年より敵役、あまり柔和過て、役柄取合ぬとのさた、始終京の勤、ちと他國御修行もまかるべし。

○山下俊五郎

文 字

山下四郎五郎の弟にて、新五郎とて、寶曆十辰の顔みせ、京嵐雛助座が初ぶたい、今少しゆるやかにせられたら、くつとわがりませう、工夫あれかし。

○中村四郎五郎 四代

鬼 洞

先四郎五郎は、喜代三弟子なり。此人も喜代三弟子にて、始は中村松兵衛とて、女形にて出、其後慶子弟子と成、中村富之介といひ、又浪藏と成、立役、明和六の冬、江戸森田座へ下り、今中村四郎五郎と改め敵役、出精あるべし。

し。

○藤川乙右衛門

○中村岩五郎 虎岩

○あらし信藏

○中村大太郎 山且

乙右衛門は、古藤川平九郎弟子にて、始猪藏といひ、後官藏と改、今又乙右衛門といふ。とかく一年まづほりと出勤なきゆゑ、評判も薄し。岩五郎は、中村十藏弟子にて、岩藏とて子供まばらへ出、去ル丑の顔みせより、大芝居へ初ぶたい、今年より岩五郎と改名、立に成ては、きつ事、飛鳥も及ばぬ程の身のかるま。信藏は、山下十右衛門とて、旅をめぐり、京内野芝居へも出、其後治藏と改、四條大芝居へ出、今年よりわらし雛助弟子と成、名苗氏とも改ての出勤、先口跡のてうしよく、役がらに相應く。大太郎は、中村傳九郎弟子にて、始は虎次といひ、江戸勤にて、明和七寅の霜月、はじめて三掛座へ上られしが、顔みせばかり出勤にて、春はいでられず、年若に見ゆれば、随分精出してはげまれよ。

○松本大七

○坂田國八

○市川綱藏

○藤川半十郎

○澤村和田藏

○澤村澤藏

○坂東重藏

○中島國四郎

○坂東善次

○宮崎八藏

○中村此藏

○大谷國藏

○篠塚浦右衛門

○山中平十郎

○姉川京七

○澤村金十郎

○大谷國治

○坂田大右衛門

○市川和歌藏

○中村吉平次

○中村友十郎

右の衆中は、いづれも牛角の敵役、追々立身あるべし。出世の節、細評を加ふべし。

○道外形之評

○澤村宇十郎

文 福

寛延二の冬、中村座へあづま此兵衛として出られしが、道外役のはじめかと存る。その、ちは、打續と森田座のつとめ、今年もいかゞ致したやうに出勤なし。古和考替りに、ずぬふんと腹筋なことお案じなされよ。

○市川久藏

蛙 聲

三代目團十郎弟子にて、元文六酉の春、中村座へ立役にて始て出、今中むら座の頭取役ゆゑ、舞臺へはあまり出られず。

○中村傳五郎

如 鶴

今中村傳九郎弟子にて、始傳吉として、寶曆五亥の冬より、子役にて出、明和三の冬より、傳五郎と改、随分見物をわらはすやうにせられ、藝かるうてよし。ついでながら、此人の親父は、松島庄五郎として、江戸に名高きつゝみ歌長歌の上手なり、今は古人となられき。

○嵐音八二代

和 考

親父音八は、享保十八丑の正月江戸中村座へ下り、立役にて出られ、後に道外形と成、段々評判よく、大上上吉、江戸道外形の随一となられし人、其子彦吉、明和七とらの冬より、音八と改名す。親に似ておほうに成て名をお

げられよ。これ今大阪にゐらるゝ坂東又太郎が弟なり。

○三ヶ津花車形ノ評

○天満屋久七

紫

紅

辰岡久菊として、功上上吉までのぼりし若女形の立者にて有しが、近比に狂言作者と成、をりふしは老母役を勤、いかさま根が女形の果ゆゑ、むかしの御残り、去とはやさかたにて、又々格別に見えます。

○市川伊達藏

市

鶴

元は花川市之丞として、京の女形、享保中比より、色子にて出、段々立身し、寶曆九卯の冬、江戸市むら座へ下り、同十四の申のとし春、中村座にて市川の門葉と成、伊達藏と改め立役、又敵役と成、去ふゆより、花車形と成、役がふさいました修行ゆゑに功者あり。

○山科新五郎

山科嘉左衛門といふ詰頭の抱にて、色子の時分は仙太郎といひ、一旦四枚にものりし女形成しが、其後ふたいをやめ、近比花車形の勤、功者なる仕内なり。

○市川團五郎

市

言

海老藏弟子の團太郎の弟のよし、寛保元酉の冬、河原崎座へ始て出、いかじゆ太郎の役を勤、立役にて、其比上上吉と記せしなり。其後市むら座の頭取役をつとめ、今又中村座の頭取ゆゑ、舞臺出勤は稀なり。當時立役を兼ての花車形なり。

○岸田東太郎

文

露

岸田小源次筋にて、初小主水といひ、今は森田座頭取御苦勞。

新刻役者綱目卷之四終

新刻役者綱目卷之五

○三ヶ津若女形ノ評

○中村富十郎

慶子

三ヶ津若女形の名人、古今不可思議の上手、總藝頭とまで稱せられし、元祖よし澤めやめの實子なれども、いとけなきより、中村新五郎方へ養子と成、享保十四酉の冬、養父新五郎と一所に、江戸市村座へ下られしが、ぶたいへは出ず、同十六亥の正月、同座にて牛若丸が初舞たいなり。翌子の年、十二歳にて始て京都萬太夫座へ出、それより段々立身して、今三ヶ津若女形の隨一と成、諸人にもてはやされ、當り狂言かぞふるにいとまなく、寛延三の秋、京にて、大阪下り暇乞に、くずの葉の大當り、同四未の顔みせ、大阪中村十藏座へ下り、女占お百役、切に相槌を打て評判よく、二の替は、やりてみやと成、大切に路考三回忌退善として、石橋を出し、大入を取、寶曆二申の年は、京嵐三右衛門座へ出、二の替、けいせい北野櫻に、天神菅原と成、太夫白妙に、あらし富之介にて、太夫と天神の仕わけやう、外に仕人はないと、見功者の感心。秋狂言和田合戦に、はんがくの大出来、江戸下りのいとま乞に、娘道成寺の大あたり、毎日くそいとらうくの大入。同三酉の顔見勢、江戸中むら座へ出、毒酒を入替おく狂言にてさたよく、春狂言三番目始り、娘道成寺所作事、大當りにて、六月中旬までの大入、同四戌の顔見勢も同座にて、仙臺訛を出し、春狂言は、けいせい山路役にて、評を取、石橋を出し、ますくよ

との沙汰。同五六も同座にて、壽三升會我に、伴左衛門女房の役に、命をすて、夫の戀を取もつ仕内、さりと
 は哀にせられしが、さのみ評なく、四月替、不斷櫻に、雲井と成、振袖の若後家、あいの若を見て、夫より心を
 亂し、ぬれさとの大當り、七月替り、こくせんやは、差たることもなかりしが、八月替り、菅原に、松王女ぼうや
 く大できにて、前方嵐小六、此役を致されしとは、十割もよいの噂にて、同七も居なり。同八寅のかほみせよ
 り、市村座へすみ、松君阪摩廓といふ外題にて松風と成、行平歸洛の名残をしみ、常盤津文字太夫が淨瑠璃に
 て、跡につ、ほりと海づらを詠め、なごちをしげに一人所作の大當り。同九卯のとし、蓬萊會我にあさひなと
 成、龜藏と草摺引をして當、益替り、女由良の助なま酔の仕内を大にでかし、九月九日より、大阪上りの暇乞に、
 蘆屋道滿の葛の葉役大當りにて、江戸中の見物おしもわけられぬ大入にて、置土産として、菊の花薄に盃を一枚
 づ、箱入にて付け、合紋にて十箱づ、毎日出し、我一人にとらんと見物の賑ひ、十月中旬まではやりつめ、前代未
 聞の大あたりにて、同十辰の顔みせ、大阪中山文七座へ出、古今例なき大入にて、夜十日のうち、棧敷直段も、一
 間十五貫文までまたる事は、むかしより聞も及ばぬ程の事、全く慶子一人の手柄なり。二の替、九州釣鐘岬に、
 秋長のみだ、やどり木御前となり、國家の爲に、夫秋長を手にかけ、其身もまがいする仕内は、一向詞に述べ
 れぬ大出来にて、二役より袖にて、娘おみつと成、まほらしき嫉妬の仕内にて、縛られながら襖へ口にて、梅山
 の火は、ひの木より出るといふことを書、大切娘道成寺所作事、大あたりにて、戀女房に、重の井役に當りを
 とり、同十二も同座にて、鎌倉鑑に、五郎藏女ぼうおさくと成、狂人と成りての仕内、去とはきれいなる
 事、外に仕人はなし。磯馴松を出し、小ふじの大出来は、いふもくだなり。同十三午の年顔見せは、三升大五郎座
 へ住、三番三を勤、野に久米太郎 千歳に金さくやはり女形をくづつての仕様、まほらしい事は此人にといひ、二の替、こし

もと白菊役、大きに宜しく、九月十六日より、出入港を出し、やつこの小まん役をでかし、京登りの暇乞に、用明
 天皇鐘入の段を出されしに、時ならぬ十月のさむそらに、夜の七ツ時より、見物泉の湧がごとく、なか／＼急に
 は棧敷もなく、近年おほえぬ大入、ふたいはいふに及ばず、場の見物、木戸口に餘り、十月廿三日迄、毎日／＼の
 入詰にて、同十四申の顔見勢、京澤村國太郎座へ上り、初日は霜月朔日なり、夜八ツ時より、舞臺まで棧敷にし
 て、場は勿論高場など、いふもの少もなく、一面にさじさの繪引詰、見物のかほは、見よしの、花か雲かとお
 やしされ、棧敷の毛氈は、龍田の錦をわざひくけしき、古今の賑ひ、朔日より五日まで、棧敷賣高千廿五軒、六日
 より十一日迄、千百五十三軒、凡十日が間に、二千軒餘の賣高は、京芝居にてはためしすくなき事、斯の如くの
 大入をとられしは此人に始る。狂言は毒酒を入替へて、切に相槌を打、古格などにて當られしは、流石の大立
 物。二の替、鯉姿山に、足利義滿のみだいと、庄司娘おみつ二役、寶曆十年、大阪中山座にて、二の替にせられし
 二役にて、京中一統におもしろがり、別してみたい役は、大阪よりはかくべつに受取、大當り。三の替は、石橋を
 出し、大入を取、次の替、あいの若にたそがれ、秋狂言、戀女房にまげの井。一年中當り続けにて、大入をとる
 とは、例すくなき古今無双の女形との町々噂やまず。明和二酉の顔みせは、あらし松之丞座へすみ、本名まづか
 なれども、状の間違にて、辨慶と替／＼いふゆゑ、わざと辨慶と成ての仕内、諸見物腹を抱へ、此仕内は、大阪に
 て今のおやめ致されし鏡、いづれを何れといひがたき兩人の出来。間の替、菅原に、菅丞相仕内宜しくありし
 が、入かひなく、殘心。二の替、大切に、七化の所作を出し、古めかしいのなんのと取きたあれども、兎角大入を取
 は奇妙なり。秋狂言、行平に、小ふじ役、どうもいへぬとの評判。同三戌の顔見せは、小川吉太郎座へ出、田舎娘
 おべく役に、あちこちに吉右衛門姉川の聲色せりふありし故、立ものには似合るとの評にて、入もかいな

く、最負の方は、大イにきのどくがりしに、二の替、けいせい比叡山に、夜發と成、まうたん大く當り、顔みせの恥辱をたちまちに雪がれしは、さすが名人のまゐるし。九月九日より、蘆屋の葛の葉と成、大入を取。十月朔日より、大切に、風流娘道成寺の所作にて、猶々大入、ぶたいの上まで入詰。十月廿一日切にていとまごひ首尾よく勤、同四亥の年は、大阪中村歌右衛門座へ下り、同五子の上は、他人座へ出、秋狂言、時頼記雪の段大出来、暇乞に又娘道成寺を出し、あまり度く同と物をせらる、故、いかいと思ひの外、大入をとらる、は妙なり。同六丑の年は、京中むら松代座へ出、二の替に、傾情菊川と成、きびまやうをわぶきく、若殿にぬれかける仕内、一向狂言とは見えず、今に始ぬ事ながら、見物我を折り、秋狂言、鬼一に、大くらと成、檜垣茶やの段は、人品といひ、どうもいへぬ仕様、切に入劔立番を差殺し、本心をわかす場は、三升を見る心地と、見功者の悦び、時分あしく、夫程に評なく、惜いこと成しが、尾上菊五郎江戸下り暇乞狂言に、城之介に梅幸、女ぼら慶子にて、おつとに好まれ、いぜんの傾情の道中をしていやがり、後に我子の臆病をくやみて、主人の身代りに立んと心づかひの仕内、一向詞に述べられぬほどの大出来。同七寅の年は、尾上久米助座へ出、夏の比、伊勢の芝居へスヶに下られ、あの方にて餘ほど大さうな病氣のよしにて、最負れん中の氣扱ひにて有し所、本服あつて上京、諸見物の悦び。江戸下りに付き、用明天皇鑑入の段を出し、まゆびよく勤、今年は、江戸森田座のつとめ、顔みせより大當りにて、二の替、藤や伊左衛門を、角鬘にて勤、相手夕霧は、野鹽をつかひ、實は團三郎にて、工藤と對面の場は、五粒に其まゝにて、さりとめめましく、切は竹ぬき五郎、栢庭を見る心地との評判、こびま町はじまつてからない大入大當り、全く慶子一人の大手柄、何方にても大入を取る事は、餘人の及ばぬ所にて、時代世話とも自由にして、傾情ごとの意氣地、娘役のふり袖の似合まほらしく、位事よく移り、まうたんは得手もの、所作事は、肩な

らぶる者なく、何ひとつ不足なき大名人、今三々津若女形の總巻首にして、古今無双、玄妙のお上手く。

○中村系

中村富十郎弟子
二代目

○中村新五郎 初中村初五郎ト云
後岩井半四郎ト云

○中村新五郎

養子
○中村富十郎 實ハ元祖芳澤のやめ子

弟子
○中村筆之介 始ハ大町ト云

○中村花崎

○中村文吉 始カしくトイフ

○中村富治 嵐音八子ニテ始ハ三八トイフ

○中村松代

○中村野鹽 始カも川のしほ

今の
○中村四郎五郎 始中村富之助
後中村治藏

○芳澤あやめ三代

一 鳳

元祖親あやめは、若女形の總本寺、三ヶ津總藝頭と賞美せられし大名人、世もつて知る所、一たん山下権七とて、立役に成て見られたれど、女形にあはせては、百六十一にもといかぬゆゑ、元の女形にもどり、享保十四年酉の七月十五日に身まかり、覺月院宗顯かくげつゐんそうけんと法名す。其子四人、芳澤春水二代目山下好玄又太中村慶子又十よし澤一風やちのあひづれも打揃ひたる上手、又太郎も、寶曆十二年九月十四日を期とし、蓮々院妙清日照と改名せられしは、去とは惜し事。二代目のあやめ、初は芳澤崎之助といひ、後にあやめと改、三ヶ津の立ものと成、能書の譽れあつて、地藝の達人なりしが、これも寶曆四年七月十八日に、觀月院宗覺日心と名のみを残す。今のあやめは、元文元たつの年、大阪中山新九郎座へ萬代として子役にて出、同三年は、京玉妻座へ、崎之助と改、始めて藝をかけ出られし時分より、上手にならるべき氣さし有て、町中の沙汰なりしが、はたして段々と立身にて、上上吉の若女形、立者と成、寛延四未の年は、大阪岩田座へ出、二の替、清水雅子淵に、武智女房かりうと成、梅の木にまばられ、雪にて作りたる城へ、血汐をふきかけ、火もえ出、いましめを切る仕内をでかし、寶曆二申の年は、中村十藏座へすみ、翌酉の年は、三升大五郎座にて、不破伴左衛門に、逸風女房横の戸と成、我子を殺され、狂氣の仕内評よく、同戊五年は、市村さの八座にて、二の替、衣掛櫻に、松兵衛女ほうおちよと成、障子に書置する狂言に、左文字を書、諸見物に我を折せ、亥の年、文七座にてますく評よく、子としては、坂東豊三郎座物草のお國御前の大出来、同七丑の顔見勢より、京染松松次郎座へ、十九年ふりにて上り、扱も上手になられしと、京中のびつくり、かほみせ、二の替ともにてでかし、翌寅の年は、久米太郎座へ出、信仰記の、うば侍従と成、手

負物がたりのまうたん大出来、其暮、大阪下りのいとま乞に、和田合戦のはんがく大當り、同九卯のとし、大阪嵐吉三郎座にて、二のかはりに雷神の狂言、ふた葉と成、ふり袖の使者をでかされ、次上上吉と記され、替りめ度毎に當りをとり、同十辰の年も、同座をつとめ、大上上吉と成、其暮霜月、京中村千藏座へ出、石堂勘ヶ由が女ほう寄せ浪のまうたん、言句に述べられぬほどの大できたて、同十二午の顔みせ、大阪中山文七座へ下り、オ上上吉に進み、顔みせ鎌倉鑑のまづかなれども、痺風に成來り、間違にてわざと辨慶なりといひ、關所の者をたばかる仕内、大きにでかし、二の替より、極上上吉と昇り、同十三未の年も、同座にて、ふたつ蝶々に、長吉姉おせき、小栗の淺香大あたりして、同十四申の年より、黒極上上吉に定まり、明和二酉の顔みせより、三代目のあやめと改、芳澤家の吉例、大根漬の狂言を出し、翌戌のかほみせは、おね川菊八座へすみ、開書太平記に、立役すくなき座組ゆゑ、女謀反の仕内大出来、同亥の年は、嵐雜介座にて、千本櫻に、忠信を前髪にて勤、大々當り、丑の年は、他人座にて、顔見せに、紙筆にて、衝立に墨繪の馬をか、れ、諸見物の感心、春は又双蝶々のおせき、いせんに替らずさたよく、寅の年は、與三郎座、今年は尾上座へ上京、紙筆にて馬を畫く狂言を勤、久しふりゆゑ、京中の待かね大かたならず、初日を今やくと日をかぞへて樂しみしに、どうした拍子や、めざましい當りなく、左とは残念千萬、地藝にかけては、元祖あやめにもおとらぬ上手、此上に慶子ほど所作事がならう物なら、三ヶ津無類總藝頭と稱すべき人、どこへ出してもまきつとした大立者く。

○芳澤系

古今若女形隨一

元祖

○芳澤あやめ

一ト比立役ニ成シ時ハ山下權七ト云
享保十四年酉七月十五日死
覺月院宗顯居士

弟子 地蔵上手
○芳澤玉妻

弟 ○芳澤四郎七

二代目

○芳澤あやめ

始崎之介ト云

弟子

○芳澤崎之助

始 山下市五郎
後よし澤五郎一

寶曆四七月十八日死
觀月院覺日心

○山下又太郎

子

○山下又太郎

始岩太郎ト云

○芳澤幸之介

今坂田藤十郎子

寶曆十二年九月十四日
逝々院妙清日照

○中村富十郎

三代目

○芳澤あやめ

始名萬代子

後崎之助

○芳澤いろは

○嵐三右衛門 五代

杉

鳥

幼名は、吉田小六といひ、四十五年以前は、竹田芝居へも出、夏まばらくの間、子供狂言を歌舞伎仕立にして、非人敵討を取組、其時春藤次郎左衛門役をつとめられし事をおもへば、餘ほど久しい事、其後三代目嵐三右衛門新平弟子と成、おらし苗氏を名乗、享保十二未の霜月より、京四條我屋名代座本佐野川萬菊座へ、三代目三左衛門顔みせに、六法をふり、其時の供を、此人若衆形にて勤、それより三ヶ津を修行し、既に極上上吉、若女形の大立者となられし。器量押立よく、所作事は得手もの、餘り上手過て、時々は仕過しの事も有しが、蘆屋の葛の葉、戀女房まげの井のうれへ、かたさうらの女非人などは、慶子も及ばざる大でさ、真鳥の助八、兼道、山うは、安達原の岩手ば、は、此人にとりめ、はでなる事をぬいて、まづほりとうへ仕らるれば、女形の隨一なるべし。此嵐名前の事、大阪にては、久しき太夫元株にて、其むかしとへば、往古の芝居は、今の難波樂師の邊にて、興行ありしとかや、そのうち道頓堀へ移り、數の櫓をならべ、日々に繁昌せし其砌より、おらし三右衛門といふ名は、六十餘州津々浦々迄も、かくれなき名代の役者なり。尤いにしへもさくや九兵衛、鎌倉團右衛門といふ役者も、六法をふりし事なれ共、そりさげ鬘に、頬髭、田夫野人の姿にて、舞臺をうなりあるさし事なりしが、元祖三右衛門、衣裳を立派に着なし、袴股立長羽織立髪かづらにて、笛鼓太鼓三味線を加へ、風流に品をつけ、勤められしより、諸見物ヤレ嵐が風流なる六法を見よと、世こそつて評判をなし、それが嘉例と成て、顔みせの切と、初狂言には、六法を勤られ、三ヶ津にて、一人の名人と賞美にあひしが、其子に門三郎といふ人ありしかども、兼て父三右衛門、益にたつまじきと思ひけるにや、田舎にて蟻燭の商ひをせ置しが、程なく父三右衛門

病氣つきしより呼登し、ワキニばんめを勤めさせけるに、そのみ人の目に立程にもなく、町中の諸見物も、足らざる人あれば、門三がやうなる顔付じやと、うつけ者の手本にするほどの人體成しが、父三右門養生叶はず、元祿三年十月十八日、無常の嵐に誘はれ、つひに山嵐壽昭居士といふ名ばかり残りぬ。其葬の顔見せに、右の門三郎と、二代目嵐三右衛門と名乗らせ、親の譲のたんざり、六法幕切て一ふりふつた所、父三右門より少し小ぶりには見ゆれど、さりとては親によく似た事かなと、見る内、親よりも身振拍子よく、聲のうはがれた迄を、より産付たと諸見物の聲のか、らぬ隙もなかりき。六法過ての口上に、此おくに親ども狂言をたて置きしてござりませれど、なまなかぶ調法もの、舞臺の長居は御機げんの程もいかり、とにかくお馴染同前に、御最負をたのみ上ますと、跡はどどりで仕廻、春狂言より段々首尾よく、後には名人の名を取、元祿十四年霜月に、京みやこ萬太夫座本嵐三右衛門と格幕をわけながら、ぶたい一も出勤なく、その霜月に、都の土と成、源譽了信と法名す。三代目三右衛門は、寶永元年、大阪大西久寶寺や芝居にて、八歳の冬籠より座もと、切に六法をつとめ、見物いづれも袖をぬらぬ人もなかりし。それより段々上手の名を取、打つゝ享保十一年の年まで、およそ廿二年座本を勤、同十二未の年、藤井花松座へすまれしが、抱役者に成し始めなり。其霜月、京都萬菊座へ登り、顔見せの切に、六法をつとめ、其後養子松之丞を、四代目嵐三右衛門と名乗らせ、其身は嵐新平と改め、寶曆四年七月十日に身まかり、眞空祐讀日祭と、石塔に名をとらむ。四代目三右衛門は、女形にて京大阪を勤、其後伊勢の芝居へ下り、あの地にて、行年廿五歳にて、相果ぬ。暫く嵐といふ名の中絶の所、明和六丑の顔みせより、嵐三右衛門と名乗、五代目相續は珍重く、立役と成、立髪にて、嵐家の六法をふりての出端、さすがく、間の替、双蝶々に、與五郎のやのし形と、長吉姉のおせき役、何と申ても、立役よりは女形のかたは、さつと功者が見えます。こ

れゆへ女形の部へ記す。其後はやすみ、子息雖助も、段々と上達あつて、若女形の立者になられ、さぞ御満足く。

○嵐系

本國攝州尾崎西崎氏

元祖

○嵐三右衛門

元祿三年十月十八日死
山嵐壽昭居士

二代目實子

○嵐三右衛門

元祿十四年十一月死
源譽了信

三代目實子

○嵐三右衛門

後ニ新平ト云
寶曆四戌七月十日死
眞空普門院祐讀日祭

四代目養子始名松之丞

○嵐三右衛門

四月廿二日死廿五歳
眞證院普讀日淨

四代目三右衛門弟子筋

○嵐松之丞

始八重藏ト云
早世

○嵐三勝

始藤岡小吉
中比中村小伊三
又嵐小伊三

○嵐信藏

始山下次藏ト云

新平弟子
五代目
弟子

○嵐三右衛門

始嵐小六ト云

○嵐雛治

○嵐此松

○嵐豊之丞

新刻役者綱目卷之五終

新刻役者綱目卷之六

○三ヶ津若女形ノ評

○瀬川菊之丞二代

路考

抑瀬川菊之丞の名は、故仙鶴といへる、京都の俳師と相談にて付られし由、まことに色香も深き瀬川帽子の名も清く、所作事の達人、弟菊次郎は、地藝に名高く、兄弟ともに名人上手と呼ばれ、今の菊之丞これについで、壯年より若女形の立者となる事妙といふべし。先の菊之丞は、正徳のはじめ、大阪の色子にて、紋を付しに、享保十年より○に改、享保八、九は、京にて座本を勤、同十年の比より、若女形の大立者と成、同十五戌の冬は、江戸中村座へ初下りにて大當り、翌十六亥の春は、福引名古屋に、むげんの鏡、古今の大あたり、同十九の春、中むら座にて、淺間だけときれの小まん、石橋、例なき大出来、それより元文二の冬より、京大阪の勤、又寛保元の冬、江戸へ下り、中村市村の間に勤、道成寺、羽衣、女鳴神、其外家の藝にて當りを取、三ヶつに名をひかせ、又ひらがな盛衰記に、其徳を殘し、極上上吉に評せられ、寛延二巳の九月二日に、極樂のふたいへ行かれぬ。弟菊次郎は、享保十巳の霜月、京嵐重次郎座へ、菊之丞と一所に出られ、同十二年の冬は、京にて都萬太夫芝居の座本をつとめ、同十六の冬、江戸市村座へ初下り、十七の春、同座にて八百屋お七の大當り、同十八も同座にて、けいせいおげまきの當り、其外非人敵討、無間の鏡、お杉の世話事、寛保二の冬は、大阪岩井座へ上り、翌